

歯学部ニュース

平成30年度第2号（通算134号）

特集 歯学部卒業おめでとう
Shall we リサーチ！

目次

特集1 歯学部卒業おめでとう	1
学部長から 前田 健康	
副病院長から 小林 正治	
卒業生から 郡司 敏宏・内田 俊・小松 子記・窪田 雄也・勅使川原芽依・喜本理紗子	
平成30年度 歯学部卒業生名簿	
大学院修了にあたり	11
木口 哲郎・設楽 仁子・栗原加奈子・佐藤 拓実	
平成30年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名	
平成30年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻博士前期・博士後期課程修了者論文名	
大学院へ行く	18
清水 志保・吉村 将悟・高見澤 圭	
教授に就任して	21
予防歯科学分野 教授 小川 祐司	
新潟大学大学院医歯学総合研究科 口腔生命福祉学講座 教授 吉羽 邦彦	
歯周診断・再建学分野 教授 多部田康一	
活動の場を海外に広げて	28
SSSV報告 小澤 月詩・小野すみれ・那須 優介	
ミャンマー医療支援活動に参加して 岸本 直隆	
早期臨床実習を終えて	35
吉田 麻莉・近藤裕次郎	
ポリクリを終えて	37
森川 雄太・大久保 光	
部活動紹介	39
ゴルフ部 阿部 空	
医歯学祭を終えて	40
歯学科3年 田中 杏奈	
特集2 Shall we リサーチ!	41
SCRP報告 柴崎 慎司	
留学生紹介 Raksanan Karawekpanyawong・Supaluk Trakanant	
歯学部生の学会発表体験記 渡部 清人	
歯学部生の課外研究活動 登内 恒介	
歯学部で行われているユニークな研究紹介 黒瀬 雅之	
学会受賞報告	51
小野 高裕・藤井 規孝・那小屋公太・高嶋真樹子	
阿部 朋子・大川 純平・兒玉 匠平・山中 秀敏	
新潟歯学会報告	59
永田 昌毅	
さくらサイエンス実施報告	60
井上 誠	
総務委員会だより	63
前田 健康	
診療室・分野紹介	69
顎顔面放射線学分野 教授 林 孝文	
口腔生理学分野教授 山村 健介	
齊藤 力先生追悼文	73
小林 正治	
素顔拝見	74
高橋 直紀・長谷川真奈・長谷川陽子・飯田 和泉・中島 努・村上 智哉	
同窓会だより	80
ミニコラム	85
歯学部を支える方々 井部 達也・中澤 典子	
准講会活動について 児玉 泰光・辻村 恭憲	
教職員異動	89
編集後記	95



卒業を祝して

歯学部長 前田 健康

歯学科第49期生の皆さん、口腔生命福祉学科第12期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。歯学部教職員を代表して、本日めでたくご卒業される皆さんに心からお祝い申し上げます。また、今日の日を一日千秋の思いで待ち焦がれていた保護者、ご家族の皆様方のご尽力にも敬意を表するとともに、お喜び申し上げます。

卒業生の皆さんは、新潟大学歯学部の教育課程をすべて修了し、本日、学士の称号を与えられ、この春から、歯科臨床研修医、歯科衛生士、福祉職、行政職、大学院への進学等、さまざまな道に進まれます。各人の進む道は異なるものの、歯科医学・医療、口腔保健・福祉に携わり、国民の健康の維持・増進に寄与するという皆さんの目標は同一であると思います。

我が国は超高齢社会を迎え、総務省の統計調査によれば、2018年9月15日時点の総人口に占める高齢者人口（65歳以上）の割合は28.1%と過去最高になり、2013年から6年連続で総人口の1/4を超えています。また平成30年版高齢化白書によると、75歳以上人口（後期高齢者）の割合は13.8%にも達しています。超高齢者社会を迎えた我が国では、医療制度の在り方が問われ、社会保障制度の改革が進んでいます。またグローバル化が急速に進んでいます。平成28年度に文部科学省より公表された歯学教育モデル・コア・カリキュラムは「国際的な公衆衛生や歯科も含めた医療制度の変遷を鑑み、国民から求められる倫理観・医療安全、チーム医療、地域包括ケアシステム、健康長寿社会などのニーズに対応できる実践的臨床能力を有する歯科医師を養成することを意識

し、大幅な改訂が行われました。この中で、歯科医師として求められる基本的な資質・能力として、プロフェッショナリズム、医学知識と問題対応能力、診療技能と患者ケア、コミュニケーション能力、チーム医療の実践、医療の質と安全の管理、社会における医療の実践、科学的探究、生涯にわたって共に学ぶ姿勢の9項目が掲げられ、これらは医師として求められる基本的な資質・能力と同一なものと定められました。また、国は歯学に対し、健康長寿社会実現への貢献、医療イノベーションの創出、国際的な医療課題の解決を期待しています。このような中で、本日、社会に旅立つ卒業生の皆さんが何をすべきなのでしょう？社会は口腔医療・保健・福祉のプロフェッショナルとなる皆さんに対して、常に幅広い教養、豊かな感性、きびしい倫理感を求め続けます。また、社会は専門的知識やスキルを維持・向上させる責任も求めるため、皆さんにはさらに一層の常日頃の精進が不可欠となります。皆さんが社会から認められるために、今日この日に、改めてこれからの長い人生に向けて新たな目標を設定しましょう。

「良馬鞭影を見て走る」という言葉があります。これは摩訶止観（まかしかん）という仏教の論書の中にある「快馬（けめ）の鞭影を見て即ち正路（しょうろ）に至る」という言葉に由来しているようです。この意味は、良馬は鞭の影を見ただけで進む、すなわち、本当に勉強や仕事ができる人は「勉強しろ」「仕事しろ」と言われなくても、自分から考え行動するということです。大学を出てから社会人としての学びの時間は40年以上に及

びます。平均寿命が伸びる中、学びの時間はますます増えていきます。皆さんが大学で学んだ4ないし6年間は人生の学びの時間の10～15%にしかならないのです。現代は厳しい競争社会です。社会は皆さんのさらなる努力による社会への貢献を求めています。これからのさらなる精進が皆さんの人生・将来に関わってきます。

本日、新たな夢を胸にスタートラインに立つ皆さんを、我々教職員一同はこれからも熱意を持って、応援していきたいと思えます。卒業する皆さんには、折を見て母校を訪ね、また生涯の学習の

場として、これからも新潟大学歯学部を積極的に活用していただくように願っています。皆さんが今日巣立っていく新潟大学歯学部は競争が激化している歯科界の中で、高い評価を受けています。すばらしい教育資源を有しています。我々教職員は皆さんに対し、これからの社会で勝ち抜くために必要な考え方、知識、技能を授けてきたと自負しています。新潟大学歯学部を卒業したという誇りを持ち、活躍して下さい。皆さんの今後の活躍を大いに期待しています。





歯学部卒業おめでとう

医歯学総合病院 副院長 小林 正 治（歯科担当）

歯学科第49期生ならびに口腔生命福祉学科第12期生の皆さん、卒業誠におめでとうございます。皆さんは、新潟大学歯学部のすべての課程を修了され、晴れて学士の学位を授与されました。長い間、皆さんを温かく支えてくださったご家族の皆様にも、心からお祝いを申し上げたいと思います。

大学に入学してから卒業まで、短かったような長かったような、両方の思いを皆さんは持っているのではないかと思います。いずれにしても、この大学生活の間に皆さんは人間として大きく成長したはずで、それは、物事を考える視野の広がりや、知識の豊かさ、さらには友人や先輩、指導を受けた教員など多くの人との繋がりを通じて得られたものだと思います。皆さんは今、人生の新たなステージに進むためのスタートの場に立っています。これから歩みを進めていくうえで、自分自身が将来どうありたいかをイメージし、そのためには何をしなければならぬかをよく考えてください。皆さんがこれまでに得た知識や技術は、あくまでも医療人としての基礎であります。皆さんがさらに大きく育つためには、自分自身で基礎の上に何を積み重ねていくかが勝負になります。

近年、AI（人工知能）やIoT（Internet of Things）、バーチャル・リアリティなどのデジタル技術やロボット技術が飛躍的に進歩・普及し、社会が急速かつ大きな規模で変わろうとしていま

す。歯科医療の領域も同様で、これらの技術はこれからの歯科における診断や治療そのものを大きく変えていくものと思われます。実際、歯科医療におけるデジタル化やAI、IoTの導入はかなりのスピードで進んでいます。口腔内スキャンングによる光学印象では、高速で単純かつ高精度に印象採得が行われ、診療時間の短縮や患者の負担軽減ならびに精度の高い補綴物の提供が可能となっています。また、IoTスマートハブラシなるものが開発されており、歯ブラシに搭載されたセンサーがスマートフォンと連動して歯みがきの回数や時間を記録・分析し、蓄積された情報と連動したよりパーソナライズされた予防歯科指導を行うことができるというものです。さらには、スマートフォンで撮影した口腔内の画像をもとにAIによる画像解析技術を活用して口腔の状態をチェックする技術も報告されています。今後も、高度医療の実現や地域医療の連携強化に向け、未来型医療の新たなイノベーションが創出されてくるものと思われます。このような時代の流れに取り残されないためにも、皆さんには広い視野を持って、知的好奇心を失うことなく、一步一步努力を重ねていただきたいと思います。

新潟大学歯学部ならびに医歯学総合病院歯科診療部門は、これから様々な分野で活躍する皆さんを全面的に支援します。また、卒業される皆さんも母校を末永く支援して下さいますよう心より願っています。

卒業生の言葉

歯学科6年 郡 司 敏 宏

新潟大学歯学部歯学科に入学して6年が経ちました。入学した当初は「6年なんて長すぎる、小学校と同じ年数じゃないか」と思っていました。振り返ってみると、思ったほど長くは感じませんでした。むしろ短かったのではないかと感じます。年齢が増すと一年間が短く感じやすくなる、というのをどこかで聞いたことがあります。確かにその通りだったなあ、と身をもって実感します。しかし、その短かった6年間の中には悩み、喜び、驚きなど様々思うことができました。

僕は「人の役に立つ仕事をしたいから医療系の大学に行きたい」という単純な理由でここに入学しました。実家は歯医者ではなく、歯科に対して強い思い入れも特にないまま入学してしまったので、戸惑うことしかありませんでした。

2、3年生では人体や材料の基礎的な内容について学び、4、5年生では少しずつ臨床的な内容を学んでいきました。授業では小児歯科、義歯科、歯周病科など科目ごとに勉強をしていくので、一つ一つの知識が点として蓄積されていくだけで、実際どのように臨床の場で使うのか実感できないまま過ごしていました。教科書などで文字でしか見たことのない道具を使い、時に用途の分からない器具を製作しました。そんな数年間を過ごしてきたため、僕は一体何を勉強しているのか、これを一生続けるのだろうか、という不安を

抱くことが何度もありました。

5年生の夏にCBTとOSCEが終わり、臨床実習が始まりました。今まで模型でしかやったことのないことを、実際の患者さんに対して行うことになりました。それは同時に、もう「分からない」は許されなくなった、ということでもありました。これから患者さんに対して何をやる必要があるか考え、その考えをライターの先生や患者さんに伝えられなくてはいけなくなりました。いままであやふやにしてきた知識をもう一度勉強しなおす必要がありました。これらの自学自習や臨床実習を通して、授業や基礎実習でやっていたことが実際にどう行われているか知ることができました。そんな時、点々としていた知識がつながり、推理小説の伏線が回収されたときのような驚きと喜びが駆け巡りました。

また、実習中に患者さんに「ありがとう」と言っていたことがありました。それは補綴物ができた時、調子の悪かった義歯が治った時、不安に思っていた症状が何だったのか判明したときなど様々でした。そんな言葉をかけていただいたとき、1年ほど前までは分からなかった歯科医師という仕事のやりがいを実感しました。

文章が稚拙で伝わりにくかったと思いますが、僕は歯学について学ぶことができ良かったと思います。歯科医師が人の健康にどのようにかわり、どのようなやりがいがあるか知ることができたのは新潟大学だったからだと思います。最後になりましたが、先生方、お世話になった患者さん、ありがとうございました。

「知らない」は許されない

歯学科6年 内田 俊

2012年に京都大学の山中教授がiPS細胞の開発でノーベル医学・生理学賞を受賞して以来、この6年間で4名もの偉大なる日本の研究者達が同賞を受賞しました。そんな医学の著しい発展とともに、私たち49期の学生生活の時間は過ぎ去ってしまいました。今改めて6年間で振り返って見ると、本当にあっという間の6年間だったと思います。バスケット部のオールデンタルで決勝トーナメントに進出したこと、臨床実習で患者さんを診させて頂いたこと、クラス旅行でどんちゃん騒ぎをしたこと、ふと思い返すと数えきれない様々な情景が昨日のここのように思い浮かびます。

私はこの6年間でモノの見方・考え方がガラリと変わりました。これまでは一つの答えを一つの道筋で考えようとしていましたが、大学での講義や実習を通して、一つの疾患に対して、その治療のアプローチは一つとは限らず、そもそも治療を行うこと自体が正解ではないという答えもあることを知りました。ある真実に対して見方を変えてみるとまた違って見えてくることがあります。だからこそ脳みそがたくさんあればその分違った意見も生まれてくるし、自分の考え方に色付けがさ

れていきます。学年が進み学習の専門性が増すにつれ、また様々な人の意見を聞くにつれ、以上に述べたような歯学・医学の枠にとらわれない幅広いものの見方を得ることができました。

毎年毎年世に送り出される約2000人の歯科医師、つまり今現在の私達の中には、心の底から患者さんの心に寄り添い、歯科医師という職業への社会的責任を自覚し、リタイアするまでひたむきに勉学に励む覚悟がある者がどのくらいの数いるのでしょうか。これから先「知らない」は許されません。知識の理由を一つ一つ自分のモノとし、誰よりも努力し、一人前の歯科医師として「歯が痛い」という謎の解明に日々全力を注ぎます。これまで支えてくださった両親、先生方、友達、部活動の仲間、関わって頂いた全ての方に感謝しております。ありがとうございました。



卒業にあたり

歯学科6年 小松子記

今回原稿依頼をいただき、歯学部ニュースを書かせていただくこととなりました、歯学科49期の小松子記と申します。卒業にあたり、6年間の思い出を振り返りたいと思います。

長期休みには旅行好きな同期に誘ってもらい、全国各地へ旅しました。現地で購入したご当地フォルムカードを旅の記念に実家へ送ることを慣例としていました。広島県の宮島ではお便り用の木製しゃもじがあり、ポストの中のしゃもじを想像して、内緒で送ってみたりもしました。どの旅行も少々ハードスケジュールでしたが、学生のうちにしかできない面白い旅行でした。

3年生の春休みからは年に1回49期修学旅行が催され、クラスメイトと温泉や阿賀野市のサントピアワールドに遊びに行きました。クラス旅行だけでも月岡温泉、村杉温泉、咲花温泉といった県内各地の温泉を巡ることができました。

学生生活を振り返ってみると、それはそれは周りの人に恵まれた素敵な6年間でした。4人の幹事や毎年修学旅行を企画してくれた子を始め、49期のみんなに感謝の気持ちを伝えるにはこの場ではとても書ききれません。6年という期間を日々楽しく過ごしてこられたのも同期に恵まれたおかげです。49期での6年間は色濃く、ずっと続いてほしい、なんて思ってしまうくらい楽しいものでした。4月から離ればなれになってしまうのが少し寂しいですが、それでも次会う時には、きっとみんな優しくてカッコイイ歯科医師になっ

ているのだと思うと、そんな姿が楽しみでもあります。

末筆ではありますが、これまでお世話になった先生方、病院スタッフの皆様、いつも笑顔で長時間の診療を受けてくださった担当患者さん、そしてここまで育て支え続けてくれた家族には感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

まだまだ父と姉の背中を追いかけ始めたばかりの駆け出しではありますが、これからの歯科医師人生、追いつけ追い越せ精神で私なりに頑張っていきたいと思います。



卒業にあたり

歯学科6年 窪田雄也

入学した当初、一年生の私から見た6年生は大人で、かっこよく見えました。自分がいざその学年になり、卒業と考えると、自分はまだまだ、子どもだと実感します。

短いようで長い6年間でしたが、そんな6年間の中で印象深い事を書こうと思います。

1つは1年生の時に始めた飲食店でのアルバイトです。ここで学んだ事は、どんなに理不尽と考えることでも、感情的になった方が損をするということでした。

それ以来、人に何かを伝えたい時は、どうやったら怒らずに気持ちを伝えられるかを考える様になった気がします。

もう1つは部活動です。中学、高校生時代は陸上部だったのですが、新しい事を始めてみようと思ひ、硬式テニス部に入部しました。初心者から始めると練習でも試合でも、経験するのは悔しい思いばかりです。それでも部活を続けていけたのは、周りの先輩や同期、後輩の存在が大きかったのだと思います。

また、主務や部長を経験させてもらったのですが、ここでもたくさんの事を学びました。

その中でも大きいのは、個人の頑張りでは限界があるという事です。特に、部長を任せて貰った1年間は、同期、先輩に支えてもらって、乗り越えられた気がします。

最後に、この学生生活の中では、やはり臨床実習が印象深いです。この1年間は、もちろん個人の努力も大切ですが、それ以上に集団で情報を共有する事の重要性を実感する1年間でした。実習の終盤では3人の患者さんに、「ずっと窪田さんに診てもらいたい」と言って頂きました。毎年どの学生にも仰ってくれている事なのかもしれませんが、私にとっては1年間が報われた気がして、とても嬉しかったです。

患者さんにそう言って頂けたのも、周りの同期、親切に引継をして下さった先輩方、指導して下さった先生方の存在ありきの事です。

助けて貰ってばかりの6年間でしたが、同時に努力をし続けた濃い6年間でした。

この濃い6年間を過ごせた事を感謝して、これから先も努力し続けます。

これまで関わった全ての人に感謝致します。本当に、ありがとうございました。



卒業生のことば

口腔生命福祉学科4年 勅使川原 芽依

私にとって長いようで短い2年間でした。中でも4年次は、終わってしまった今では、あっという間だったように感じます。歯科臨床実習や特論、福祉実習、就活など多くのことに追われながらも充実した毎日を過ごすことができました。

2年間の中で多くを占めたのが、歯科臨床実習です。歯科衛生士の臨床実習は、初めてではなかったものの今までと違う実習環境や自分の知識、技量に落胆することが多くありました。多々ご迷惑をおかけしたと思います。しかし、診療科の先生方や歯科衛生士、看護師の皆様優しく丁寧にご教授いただいたおかげで無事に終えることができました。心から感謝しています。大変お世話になりました。ありがとうございます。歯科臨床実習を通して、歯科衛生士の魅力を再度感じることができ、これからも歯科衛生士として成長していきたいと決意を新たにすることができました。

また福祉実習では、歯科臨床実習に比べると1カ月間という短い期間でしたが、指導していただ

いた職員の方やふれあった利用者様から多くのことを学ばせていただきました。言語だけでなく、非言語的なコミュニケーションや相手の立場に立った思いやりのある対応は、今後歯科衛生士として働く上でも大変貴重な経験ができたと思います。

楽しい事だけではなく2年間もここまで乗り越えてこられたのは、ご指導いただいた先生方や編入にもかかわらず初期の段階から暖かく迎えてくれた現役生、同じように編入したみんなが、一緒に頑張りながら、励まし合いながら支え合っただけからだと思います。皆様には2年間大変お世話になりました。感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。



卒業の言葉

口腔生命福祉学科4年 喜本 理紗子

口腔生命福祉学科に入学してからあっという間に4年が経ち、卒業を迎えようとしています。入学してすぐ、「この学科は学年が上がるにつれて忙しくなる」という話を耳にしました。大学生活を振り返ると、本当にその通りだなと感じます。特に4年次からは、臨床実習や福祉実習が始まり、並行して講義や特論に取り組みながらの就職活動や国試対策という、目まぐるしい1年でした。その中でも、臨床実習や福祉実習が印象に残りました。

臨床実習では、実際に診療の補助やPMTC等をやらせていただき、毎日多くのことを学びました。実習では、思うように動けず、自分の未熟さを感じ、悔しい思いをすることも多々ありました。しかし、実習を通して様々なことを経験していくうちに、できることが徐々に増え、自信につながりました。また、患者さんから「ありがとう」という言葉をいただいた時には、やりがいを感じました。

福祉実習では、私は児童相談所に行かせていただきました。実際に子どもたちと関わったり、業務の見学をさせていただきました。子どもたちとの関わり方で悩むこともありましたが、職員の方からアドバイスをいただいたことで、子どもたち

との距離も縮まり、嬉しく感じたことを今でも覚えていています。この実習を通し、机上では学べないような経験をしたり、それぞれの方に合った支援の方法などについて学ぶことができました。

また、私は歯学部のバスケット部に所属し、マネージャーとして活動しました。私は、高校までは別のスポーツをしており、バスケットについての知識もなく、入部当初は少し不安もありました。しかし、バスケット部に入部したことで、先輩、同期、後輩に恵まれ、学業以外においても楽しく充実した時間を過ごすことができました。

最後になりますが、お世話になった先生方、そして4年間を共に過ごしてきた口腔生命福祉学科のみなさんには本当に感謝しています。これから社会に出ていくにあたり、大学生活で得た学びや様々な活動を通して経験したことを活かして、頑張っていきたいと思います。



大学院修了にあたり

大学院修了にあたり

顎顔面口腔外科学分野 木口哲郎

大学入学以来、約10年間本学におりますが、今回初めて歯学部ニュースに投稿させていただきます。この度、大学院修了にあたりというテーマで執筆する機会を頂きましたので、私の大学院生活について振り返りたいと思います。

大学院進学のかっけは、臨床研修修了後の進路を決める際、大学で研究をやってみたい、大学時代に十分できなかった口腔外科の勉強をもっとしてみたいという漠然とした考えからでした。歯科医師として勤務し、生計を立てている同期も数多くいる中、大学院進学に最初は少し不安も感じておりました。幸いにも、自分の同期で大学院に進学する人が多く、互いに切磋琢磨しながら充実した4年間を過ごすことができたと思います。

大学院1年目は、大学院講義とともに、口腔外科8ヵ月、歯科麻酔科4ヵ月の臨床を学ぶ機会を得ました。指導医の先生方から懇切丁寧な指導を受けながら、外科基本手技や病棟管理、麻酔管理などを学ばせて頂きました。大学院2年目からは、本格的な研究生活が始まります。歯科薬理学分野で基礎研究をすることが決まり、培養細胞や組織を用いた口腔扁平上皮癌進展の分子生物学的解析に関する研究を行って参りました。基礎研究関連の分野は、大学時代はどちらかというと苦手

意識を持っていましたので、論文や大学時代に購入した「細胞の分子生物学」という厚さ6cmほどにもなる本を傍らに、基本から学習しました。実験スケジュールの関係上、時には土日や深夜に大学で実験することもありましたが、新たな発見となり得るデータが出たときは今までの苦労を忘れるほど研究が楽しく感じられました。海外の学会発表では、自分の英語力の乏しさを痛感することもありましたが、国内の学会含め、多くの先生方とディスカッションを行い、貴重なアドバイスを頂き、大変勉強になりました。

今後は、大学院で培った経験を糧に臨床や研究の場で貢献できるよう努力していく所存です。最後になりましたが、この場をお借りしましてこれまでお世話になりました先生方に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。



大学院修了にあたり

包括歯科補綴学分野 設 樂 仁 子

大学院に進学してあっという間に4年の月日が過ぎようとしています。学生から考えると11年も新潟にいることになるとは信じられません。私は大学院に入るかどうかを3回目の大学院募集締め切り当日まで悩んでおり、ある先生の一言がなければ大学院に入っていなかったかもしれません。あの時声をかけていただかなければ、院生になっていなかったかもしれないと思うとなんだか不思議な感じがします。

私は「舌圧と舌運動」についてというテーマで研究をしてきました。舌運動を測定する装置は新しく導入したものであったため、計測方法などがわからず最初はとても苦労しましたが、指導医の藤原先生のもとなんとか研究を進めていきました。おかげで、国際学会に参加し発表するという貴重な経験をすることができました。国際学会では、ニンジンなど日本ではあまり試料にしないであろう食品を使った研究の口演や、外国の人との交流（観光）、など異文化に触れることができました。（私は英語が苦手なのでほとんど会話はできませんでした…。）

大学院生活は大変なこともありましたが、このようにとても充実したもので、大学院に入っていなければ経験することができなかった様々な経験をし、貴重な時間を過ごすことができました。そ

して何よりもありがたかったことが、医局の方針で様々な学会に積極的に参加することができたため、講演や発表を聴くチャンスやいろいろな人と出会う機会がとても多かったことです。この4年間で学んだことを生かし、これからも精進していきたいと思っております。最後になりましたが小野高裕教授、藤原先生をはじめ、包括歯科補綴学分野の先生方々に心より感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。



大学院修了にあたり

歯科矯正学分野 栗原 加奈子

私は北海道大学病院での歯科医師臨床研修修了後、2015年4月当教室に入局致しました。矯正を学びたくて歯学部を目指し、大学院入学時はやっとスタート地点に立てたと思っていましたが、早くも4年が経過しようとしています。

臨床では「現症の把握」に苦勞し、悩み考えた4年間だったと思います。現症の把握のために資料を整えることは最低条件で、現症の把握ができなければ適切な治療方針立案もできません。当初は資料作製過程でのエラーも多く、トレース1枚、技工物1つ完成させるだけで相当な時間がかかりました。1つの症例から学べることはとても多く、それだけにわからないことも多く、時間が惜しくて深夜まで残ったり休日も大学にきては症例と向き合う日々でした。

研究は、矯正臨床における難治性疾患の1つである開咬症例の発症要因と治療後の安定性に係わる舌動態の特徴とを明らかにするため、開咬症例の嚥下時舌圧発現様相に着目した機能研究を行いました。歯科矯正学分野と包括歯科補綴学分野の共同研究として、国内外の学会で研究成果の発表をさせていただきましたが、そこでの経験や人との出会いは毎回有意義で貴重な経験の連続でし

た。参加者との意見交換を通して自分の研究の立ち位置を確認できたばかりでなく、研究課題を明確化しより客観的な考察が可能になったと思います。

4年間、臨床と研究の両立で毎日が慌ただしく過ぎていきました。そんな中、同期や近い学年の先生の実在は非常に励みとなりました。失敗から学ぶことが多かったものの、今思うと1つとして無駄なことはなかったように思います。思い切り勉強できた環境に感謝し、臨床、研究ともに次の課題に向けて今後より一層精進して参ります。ご指導を賜りました齋藤功教授、指導医の福井忠雄先生をはじめとする歯科矯正学分野の先生、包括歯科補綴学分野の小野高裕教授、堀一浩先生、ならびに同門の先生には心よりお礼申し上げます。



歯科矯正学分野同期の先生と、筆者は左前

大学院を振り返って

歯学教育研究開発学分野 佐藤 拓実

大学院生活も終わりに差し掛かり、振り返ると研究、診療、外勤、学会と慌ただしくも目まぐるしい4年間でした。

本稿では簡単にではありますが、大学院進学を決めた理由と、研究のことに絞って書かせていただきます。

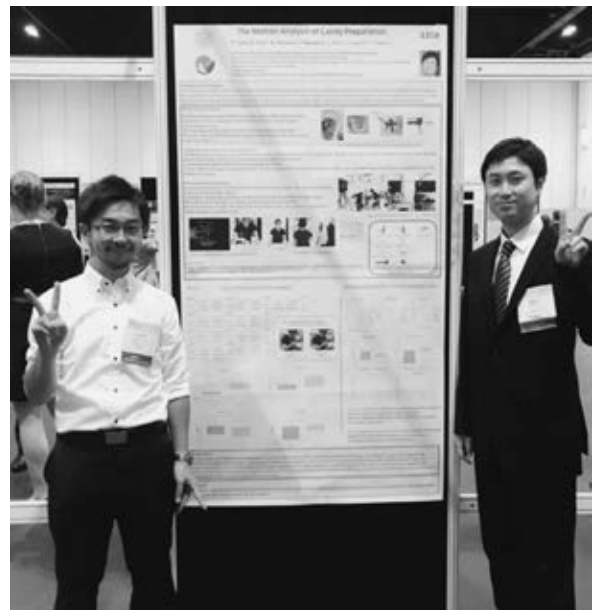
私は大学での臨床実習に始まり、開業医勤務までの経験から、歯科医師の教育、特に臨床技能教育について疑問と不安を抱き、この分野には多くの問題点があり、これを解決するのは喫緊の課題であると感じるようになりました。その点で歯学教育研究開発学分野への入局は魅力的でした。ただ大学院進学については多少及び腰になっていました。というのも大学5年生の時に行った簡単な研究「ヒトの嗅覚受容体遺伝子におけるSNPの網羅的解析」の経験から、研究とは難しく、根気のいるもので、成果が出るかどうかは正に神頼みということを感じ知ったからです。しかしながら当分野の藤井規孝教授には臨床研修、後期臨床研修の2年間とてもお世話になったこともあり、安心して進学を決意することができました。

私の研究テーマは「歯科治療時の姿勢の解析」です。モーションキャプチャシステムという動作計測システムを用いて、歯科治療における術者の身体各部位、インスツルメント等の時系列的で三次元的な位置の解析を行っています。歯科医療分野ではこれまでほとんど試みられなかったことであり、結果の扱い方、その解釈、動作の特徴の発見というすべてを一から考えなければならず、多くの壁にぶつかることになりました。しかし幸い

なことに共同研究させていただいている、本学工学部福祉人間工学科の林豊彦教授がこのシステムに明るく、同研究室の大学生、大学院生らと共に切磋琢磨する充実した日々となりました。

また大変ありがたいことに、研究内容を各種学会で発表させていただく機会にも恵まれました。中でもIADR2018でポスター発表を行ったことが一番印象に残っています。各国によって歯科医療を取り巻く環境は異なりますので、当然ながら関心事は異なります。そのような背景から、所謂国際色豊かな発表の数々が大変興味深くありました。

最後になりますが、このような4年間の貴重な経験をさせていただき、またご指導いただいた藤井規孝教授を始め、歯学教育研究開発学分野・歯科総合診療部の先生方そして共同研究者の皆様にご心より御礼申し上げます。



IADRにて。筆者は右

平成30年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名

博士の専攻分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	野々村 絢子 （口腔生命科学）	Relationships between changes of posterior occlusal support status and risk for protein-energy malnutrition among the Japanese community-dwelling elderly （日本の地域在住高齢者における臼歯部の咬合の変化とたんぱく質エネルギー低栄養状態のリスクの関係）
博士（歯学）	竹内 亮祐 （口腔生命科学）	Immunohistochemical and gene expression analysis of Glut 1 and Runx 2 in reparative dentin formation during dental pulp wound healing （歯髄創傷治癒時の修復象牙質形成におけるGlut 1とRunx 2の免疫組織化学的および遺伝子発現解析）
博士（歯学）	遠問 愛子 （口腔生命科学）	Glucose Transporter-2 and 4 Are Involved in Glucose Supply During Pulpal Wound Healing Following Pulpotomy with Mineral Trioxide Aggregate in Rat Molars （グルコーストランスポーター-2および4はラット臼歯のMineral Trioxide Aggregateによる断髄後の歯髄創傷治癒過程においてグルコース供給に関与する）
博士（歯学）	長谷川 泰輔 （口腔生命科学）	Sulfated vizantin causes the detachment of biofilms composed mainly of the genus Streptococcus by modulating microbial adhesion. （硫酸化体ビザンチンはStreptococcus属の付着関連遺伝子群の発現を低下させることでバイオフィルム構造を剥離する）
博士（歯学）	永井 康介 （口腔生命科学）	Pneumococcal DNA-binding proteins released through autolysis induce the production of proinflammatory cytokines via toll-like receptor 4 （自己溶菌に伴い漏出する肺炎球菌のDNA結合タンパク質は、TLR4を介して炎症性サイトカインの産生を促進する）
博士（歯学）	SULIMAN Mubarak Osman Mahgoub （口腔生命科学）	The Effect of Collagen Cross-links Deficiency on the Incorporation of Bone Grafts （移植骨定着に対するコラーゲンクロスリンク量低下の影響）
博士（歯学）	木口 哲郎 （口腔生命科学）	R2 TP complex contributes to cancer development in oral squamous cell carcinoma (OSCC) （R2 TP複合体は口腔扁平上皮癌進展に寄与する）
博士（歯学）	中谷 暢佑 （口腔生命科学）	Inhibitory effects of fluoxetine, an antidepressant drug, on masseter muscle nociception at the trigeminal subnucleus caudalis and upper cervical spinal cord regions in a rat model of psychophysical stress. （フルオキセチンは情動ストレスによる三叉神経脊髄路核尾側亜核・上位頸髄部での咬筋侵害応答の増強を抑制する）
博士（歯学）	石川 隆一 （口腔生命科学）	Sox Genes Show Spatiotemporal Expression during Murine Tongue and Eyelid （Sox遺伝子群は舌と目蓋の発生において、時空的な発現を示す）
博士（歯学）	CHE Yulan （口腔生命科学）	MAEA rs6815464 polymorphism and periodontitis in postmenopausal Japanese females: a cross-sectional study （閉経後日本女性におけるMAEArs6815464多型と歯周炎：横断研究）
博士（歯学）	原 実生 （口腔生命科学）	A bacterial metabolite ameliorates periodontal pathogen-induced gingival epithelial barrier disruption via GPR40 signaling. （細菌由来のメタボライトはGPR40シグナリングを介して歯周病原細菌に誘導される歯肉上皮バリア機能の低下を抑制する）
博士（歯学）	竹内 麻衣 （口腔生命科学）	Indirect regulation of PCSK9 gene in inflammatory response by <i>Porphyromonas gingivalis</i> infection （ <i>Porphyromonas gingivalis</i> 感染時炎症応答におけるPCSK9遺伝子発現の制御機構）

博士の専攻 分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	網谷 季莉子 （口腔生命科学）	性別，年代別にみた閉塞性睡眠時無呼吸と顎顔面形態，BMIとの関連
博士（歯学）	市川 佳弥 （口腔生命科学）	術前顎矯正治療を行った片側性唇顎口蓋裂患者の外鼻形態の変化
博士（歯学）	栗原 加奈子 （口腔生命科学）	The effect of tongue thrusting on tongue pressure production during swallowing in adult anterior open bite cases （成人前歯部開咬症の舌突出が嚥下時舌圧発現様相に与える影響）
博士（歯学）	藤田 瑛 （口腔生命科学）	有限要素解析を用いた顎偏位を伴う骨格性下顎前突症の顎骨内応力解析
博士（歯学）	砂田 悠香子 （口腔生命科学）	Measurement of hyoid muscle activity and hyoid-laryngeal position during tongue lift movement （舌挙上運動中の舌骨筋活動および舌骨喉頭位置の測定）
博士（歯学）	安田 昌代 （口腔生命科学）	口腔乾燥感をもたらす要因の性別および年齢別検討
博士（歯学）	大川 純平 （口腔生命科学）	Estimation of Pharyngeal Residue after Swallowing by Retronasal Aroma （レトロネーザルアロマを用いた嚥下後咽頭残留量の推定）
博士（歯学）	菊地 さつき （口腔生命科学）	部分床義歯装着による咀嚼能力の変化に影響する因子の探索
博士（歯学）	SALAZAR Simonne Estacio （口腔生命科学）	The Impact of a newly constructed removable denture to the objective and subjective masticatory function （義歯新製が咀嚼機能に及ぼす影響）
博士（歯学）	設楽 仁子 （口腔生命科学）	水嚥下時の舌圧発現様相と舌運動との関係
博士（歯学）	藤井 克則 （口腔生命科学）	都市部一般住民における継続的な歯科定期受診と咀嚼能率との関係について 一吹田研究一
博士（歯学）	曾我 麻里恵 （口腔生命科学）	小唾液腺の口腔内超音波画像解剖アトラス策定の試み
博士（歯学）	佐藤 拓実 （口腔生命科学）	光学式モーションキャプチャ・システムによる歯牙切削動作の定量的解析
博士（歯学）	小山 和泉 （口腔生命科学）	深達度 5 mm以下の舌癌の後発頸部リンパ節転移様相に関する検討—超音波診断による経過観察における早期検出のための姿勢推定OpenPoseの応用—
博士（歯学）	高 昇将 （口腔生命科学）	Effects of silanization conditions on flexural properties of SiC fiber-reinforced resin （シランカップリング処理の条件がSiC繊維強化型レジンの曲げ特性におよぼす影響）

平成30年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻博士前期・博士後期課程修了者論文名

専攻分野の名称	氏名（専攻）	論文名
修士 (口腔保健福祉学)	石 黒 明日香 (口腔生命福祉学)	新潟大学歯学部口腔生命福祉学卒業生の就職状況と仕事および学科教育満足度に関する調査
修士 (口腔保健福祉学)	窪 田 し ほ (口腔生命福祉学)	婦人保護事業の利用者が公的支援から疎外される要因に関する一考察
修士 (口腔保健福祉学)	渋 木 瞳 (口腔生命福祉学)	身体的フレイル患者に対する歩行機能訓練に伴う口腔・嚥下機能の改善を検証する
修士 (口腔保健福祉学)	牧 口 由 依 (口腔生命福祉学)	通所型障害者福祉施設における口腔の健康維持に向けた取り組み状況に関する実態調査
博士 (口腔保健福祉学)	鈴 木 瞳 (口腔生命福祉学)	Effects of preoperative periodontal treatment on postoperative infection in cardiac valve surgery (心臓弁手術患者における術前歯周治療による術後感染への影響)
博士 (口腔保健福祉学)	中 田 悠 (口腔生命福祉学)	Perioperative changes in knowledge and attitude towards oral health by oral health education (周術期患者における口腔衛生指導による口腔衛生への意識改善)
博士 (口腔保健福祉学)	新 井 恵 (口腔生命福祉学)	透析患者に対して歯科衛生士が行う口腔健康教育の有用性について
博士 (口腔保健福祉学)	木 村 有 子 (口腔生命福祉学)	「歯科大学病院に勤務する中堅歯科衛生士の成長過程における悩みと問題解決の変遷」

大学院へ行こう

顎顔面口腔外科分野 清水志保

はじめまして、顎顔面口腔外科、大学院3年の清水志保です。今回、“大学院へいこう”の執筆依頼をいただきました。みなさんに大学院へ興味をもっていただきたく、僭越ながら私の大学院生活を少しご紹介させていただきます。拙い文章で恐縮ですが、少々お付き合いください。

平成27年3月に日本歯科大学を卒業後、新潟大学のAコースで研修を行いました。そこで実際に患者さんの歯科治療を経験してみて、ほとんどの方が全身疾患を有しており、単に治療手技を習得するだけでなく、それに対応できる力が必要だと感じました。また研修プログラムの3週間の口腔外科・病棟研修で目標としたい先生と出会い、より深く口腔外科を勉強したいという気持ちが大きくなり、顎顔面口腔外科の大学院へ進学しました。

大学院に入ると、1年目は外来・病棟にて口腔外科業務に従事しますが、2年目以降は基礎研究を行います。臨床から離れたくないのが本音でしたが、基礎研究の楽しさを先輩方から勧められ、口腔生理学で研究することになりました。実際に同講座の岡本先生から研究の説明を受け、緊張しながらも、なんだか面白そう！と心が揺らいだのでした。

私が提示された研究内容はざっくり言うと“ストレスと痛み”。学生時代に詰め込んだ、生理学の痛みに関する知識はC線維とかその程度…ほぼゼロからのスタートでした。大縫線核？三叉神経脊髄路核尾側亜核（Vc）？fos蛋白？わからないことだらけ。歯学部の学生さんに混ざって生理の授業を受けたり、教科書や論文を読んだりしながら、不安な研究生活がスタートしたのでした。

この2年間実験してデータをまとめて発表する、を繰り返し、自分の研究において足りない部

分を補足していきます。幸いなことに、国内学会だけでなく、海外学会にも参加するチャンスをいただきました。同じ分野を研究する学外のプロの研究者たちと会話をすることはとても貴重な機会です。

先日、先輩の論文がacceptされ、今度は私が行ってきた研究を論文にする番です。文章を書くのが苦手な私にとって、論文（しかも英語で…）を執筆することは非常に苦しい作業になりますが、学内外の先生方にご指導いただきながら、頑張っています。自分が出した新しい研究結果を公表できることは、とてもワクワクしますし、このワクワク感を味わうことができるのも、研究の醍醐味です。歯科治療を行っているだけではなかなか味わうことができません。

臨床からは少し離れてしまうけど、少し寄り道して4年間研究にどっぷり浸かるのも今だからこそできること。いろんな経験、出会いがあり、歯科医師として、人間としても大きく成長できるチャンスです。このことは必ず自分にとって将来、大きな糧となるはずですよ。あなたも大学院にいったりませんか？



IADR@ロンドン

大学院へ行こう

包括歯科補綴学分野 吉村将悟

包括歯科補綴学分野（義歯科）2年目の吉村将悟と申します。歯学部ニュースへ投稿させて頂くのは初となりますが、今回「大学院へ行こう」という題で原稿依頼を頂きましたので僕が大学院へ行こうと思った動機や院に入って感じたことを紹介させて頂こうと思います。

僕が包括歯科補綴学分野の大学院に進学しようと決めた大きな理由は、学生時代の臨床実習で義歯に関して大きな挫折を感じたことでした。義歯に関する診療を行ってみると、咬合採得って何が正解なのだろうか、どこまで出来ていけば次のステップに進めるのだろうかということが全く分からなくなり、パニックに陥ってしまいました。このとき感じたパニックという挫折は時間とともに悔しさへと変化し、もっと義歯がうまくなりたい、自分一人で満足のいく診療がしたいという気持ちへと変わっていきました。この気持ちがありつつ、大学でならば多くの先生の色々な方法論、技術を見て、感じ、盗むことができるかもしれないと考えたことが、僕が大学院進学を決意した理

由の一つでした。進学する上で「研究」に関する不安と経済的な問題は確かにありましたが、医局説明会などの懇親会で小野教授に相談させて頂いたとき、「経済状況が負担にならないようにしっかりと自立できる環境を目指している」、「最初は診療に集中して研究は先輩のやっていることをみながらゆっくり学んでいけばよい」という言葉を頂いたことも僕が進学へと一歩踏み出す理由でした。

親身になってくださる先生方に相談しやすい環境や、技工室での何気ない診療に関する会話も大学院ならではの特色なのかなと感じます。研究はスロースターターとなりましたが、普段の診療ともリンクした「咀嚼」に関する研究が始まり、知れば知るほど普段の臨床に生きてくるということを実感してきました。ここでは紹介しきれないことも多々ありますので、大学院進学を考えている方や少し話を聞いてみたいという方は是非とも先生方に聞いてみてください。今後を考える上できっと手助けとなるはずです！

大学院へ行こう

歯周診断・再建学分野 高見澤 圭

歯周診断・再建学分野大学院2年の高見澤圭です。2年が経過した大学院生活を振り返り、思ったことや経験したことについて書かせていただきます。

まず、大学院に進学を決めた理由についてですが、学生時代に歯周病学の授業や実習を通し、患者様の治療において歯周病学は治療方針を決定するキーポイントであり基盤になることを学生時代に学びました。それがとても興味深く、歯周治療をもっと勉強し経験してみたいと思ったのが、大学院に行こうと決めたきっかけです。

その後、私は新潟大学医学総合病院で研修を1年間過ごし、歯周診断・再建学分野に進学しました。他大学出身という不安もありましたが、8人の同期に恵まれ、研究や臨床のことなど相談でき、先輩や先生方からも沢山のことを学ぶことができ、充実した大学院生活を送ることができています。研究ではどのようにアプローチをすれば良いのか分からず行き詰まってしまうことが

あったり、臨床では大学での診療だけでなく出張先での診療も含めて悩むことが多くあります。そんな時には、諸先生方から「もっとこうしたほうが良い。こういうケースではこう。」といったアドバイスをもらえるとてもありがたい環境です。また、国外で行われた学会に参加させていただく機会をいただいた際には、準備はとても大変でしたが、度胸が付き、かけがえのない経験をすることができました。

国家試験に合格し、歯科研修医を終えてからが歯科医師のスタートラインと私は思っています。その後どのような環境に身を置くかで歯科医師人生は大きく変わると思っています。大学院は、興味を持った分野をさらに深く理解する事ができ、沢山の経験を積む事ができ、さらには臨床技術も向上できる場所です。大学院生活で得るものは、今後の自分の財産になると思います。

この文章がこれから進路を決める方への参考になればいいなと思います。



教授に就任して



教授就任にあたり

予防歯科学分野 教授 小川 祐 司

このたび、新潟大学歯学部予防歯科学分野の教授を拝命いたしました。堀井欣一教授、宮崎秀夫教授をはじめ多くの先輩諸兄が築いてこられた本講座は50年の歳月を迎えました。培ってきた伝統を大切にしながら時代の新たなニーズに即した講座運営が私に課せられた使命であると認識しております。同窓会誌でも就任にあたっての抱負を述べさせていただきましたが、改めて以下に趣意を記したく思います。

教育については、予防歯科学分野が日本で唯一のWHO（世界保健機関）口腔保健協力センターに認証されたのを機に、教育内容にWHOの口腔保健戦略をベースにした国際口腔保健を織り交ぜ、“Think globally, act locally”をコンセプトに国際的視野を持って最先端のエビデンスを選別・駆使でき、かつ論理的思考が行える人材の育成を大きな柱にしてきました。時代のニーズに即した口腔保健を国際的な視点で捉えられる礎を築くことにより、優れた歯科医療リーダーの素地を修得させることが目標です。科目としては、予防歯科学のみならず、国際歯科保健医療学入門、う蝕学、衛生学、統合科目、PBLにも参画し、基礎と臨床の橋渡しを担っております。臨床予備実習や臨床実習では、メンテナンスの手技を中心に適切なセルフケアの獲得と維持についてマンツーマンで指導を行い、集団に対する公衆衛生的な口腔保健の推進についても、母子保健や学校保健等を通じて演習形式による地域実習を実践しています。これらは地域社会に貢献する歯科医師と

して求められる知識・技術・態度の修得に大いに役立つ内容であると認識しており、新カリキュラム下においても培ったノウハウを最大限有効に活かし、すべての人が質の高い健康を享受できるような社会性に富んだ歯科医療リーダーの教育育成を目指して参ります。

大学院教育においては、専攻共通必修科目としてベーシック実践統計学を担当し、新入大学院生に対する研究デザインの構築から論文作成におけるデータ解析の指針について、演習を組み合わせた講義を開講してきました。外国人留学生には、英語によるチュートリアルを実施して、知識の構築のみならず研究全般におけるアドバイスも行っています。魅力ある大学院カリキュラムの充実に取り組む上では、海外で活躍する研究者を積極的に講師として迎え入れ、最新の知見や情報を修学できるようなコース内容がこれからの課題であると認識しております。選択必修コースでは、ベーシック国際口腔保健学コースを担当するとともに、国際口腔保健科学コースにおいて、国際的視野での基本的な口腔疾患の予防と健康増進の理論を習得させるべくWHO国際口腔保健をベースにした完全英語教育を行っています。本コースは他に類を見ないWHOでのエクスターンシップを必修と課しているほか、WHO協力センターネットワークを活用してアジア諸国における口腔保健調査研究活動をプログラムに組み込んでおり、実践的な国際口腔保健のフィールドトレーニングを可能にしています。「大学院教育の実質化」を基盤

に、WHO口腔保健協力センターの実績を取り入れながら、国際性のある研究者を輩出すべく大学院教育の質の担保を目指して参りたいと考えております。

研究については、予防歯科学分野が主導している「新潟高齢者スタディ」を通じて、高齢者の口腔健康に関連する要因を様々な角度から検証を試み、その学術アウトカムは、WHOの高齢者口腔保健施策のエビデンスにも位置づけられてきました。本スタディを通じて得られた知見は100本を超える論文や報告となっています。今後は健康長寿のメカニズムを解明する目的で、精神衛生、運動機能、生活習慣を多角的な観点からデータ取得・解析することが求められており、さらなるエビデンスの構築とともに施策に転換するトランスレーションを積極的に支援することによって、予防歯科学の調査研究力を社会的に高めることが重要であると認識しております。

また、学内外の他分野（施設）との共同研究についても内容の拡充が不可欠であり、WHO協力センターを中心とするグローバルネットワークの中では、国民、民族レベルでの疫学研究を通じて、う蝕・歯周疾患・口腔ガン等の罹患特性を明らかにし、ヘルスプロモーションを実践する上で生活習慣共通のリスクファクターアプローチが必要不可欠です。禁煙支援や栄養指導（砂糖摂取抑制）などを対象にした政策研究を進め、歯科から行うコモンリスクファクターアプローチを体系化し、その成果をエビデンスとして世界が共有して公衆

衛生向上に役立てていく流れを作って行きたいと思っております。

診療については、医歯学総合病院予防歯科において、患者様の生涯を通じた口腔内の健康保持増進に寄与するため、ライフステージに応じた口腔保健指導と口腔疾患予防処置・管理等を適切に行っていくことが命題です。う蝕予防を中心とした小児口腔健康管理、歯周病予防を中心とした成人口腔健康管理、そして喪失歯予防を目的とした高齢者口腔健康管理です。その対象は、口腔内に自覚症状がない健常者から口腔疾患治療が終了したメンテナンス患者までを含みます。メンテナンスは、治療によって得られた口腔内の健康な状態を持続させ、同時に再発を防止させる点で、歯科医療の中では必須の部分です。このメンテナンスの成果が患者様のQOL向上にどれほど貢献しているか、客観的に可視化できる評価指標を考案することが、予防歯科の果たす役割・意義をより明確化できるものと考えております。予防歯科を通じて質の高い医療を提供するとともに、患者様本位の安全で安心できる医療サービスの提供に力を尽くしたいと考えております。

以上、簡単ではありますが主な趣意を述べさせていただきました。大切なことは、これらを実実に成果に結びつけていくことであり、医局員ひとりひとりの力を大切にして、大きな力に繋げる努力を続けて参りたいと思っております。

皆様方のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



教授就任祝賀会にて

教授に就任して



教授就任のご挨拶

新潟大学大学院医歯学総合研究科 口腔生命福祉学講座 教授
吉羽邦彦

2018（平成30）年10月1日付けで、口腔生命福祉学講座（口腔生命福祉学科）教授に就任いたしました、吉羽邦彦（よしばくにひこ）と申します。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

私は1984年に新潟大学歯学部卒業後、歯科保存学第一教室（現在の口腔健康科学講座う蝕学分野）・岩久正明教授のもとに大学院生として入局いたしました。大学院生時代は、口腔解剖学第一教室（現在の顎顔面再建学講座硬組織形態学分野）・小澤英浩教授のご指導のもと、組織の石灰化機構の解明に取り組みました。大学院修了後、約半年間の佐渡・小木町立歯科診療所勤務を経て、1989年1月1日付けで、新潟大学歯学部附属病院・助手に採用されました。1995年11月から約1年間、歯の発生研究の第一人者であったルイ・パスツール大学医学部（フランス・ストラスブール）、Jean-Victor Ruch 教授のもとに留学する機会を得ました。そこでは歯の形成と細胞分化に重要な役割を果たしている細胞外マトリックスに関する研究に従事させて頂きました。その後、大学院医歯学総合研究科口腔健康科学講座う蝕学分野・助教、准教授を経て、現在に至っております。

さて、2004年に開設されました口腔生命福祉学科も、2019年3月には12期生を輩出します。本学科の卒業生は歯科診療所や病院歯科などの医療機関ばかりでなく、行政や介護・障害福祉施設など様々な分野で活躍しています。また現在、3名の卒業生が本学科の専任教員として学生指導にあたっております。私はこれまで主として歯学科学

生の教育、特に保存修復学（う蝕の治療、審美的修復処置）と歯内療法学（歯の神経や根の治療）に関する講義、基礎実習および臨床実習に携わってまいりました。一方、口腔生命福祉学科の学生に対しましては、3年次の「歯科診療補助」の授業の一部を担当するとともに、医歯学総合病院・歯の診療科外来において3、4年次の歯科衛生士臨床実習指導のお手伝いをさせて頂いております。「歯科診療補助」は歯科衛生士の3大業務（歯科予防処置、歯科診療補助、歯科保健指導）の一つで、その業務範囲は器具・材料の準備や診療介助から、歯周病患者の歯周組織検査や歯周初期治療、メンテナンスなど多岐にわたります。最近では歯科医療に対するニーズも多様化、高度化し、知識や技能を含めた高い専門性が診療補助に求められるようになってきています。私はこれから専任の教員として担当することになりますが、関連する教育プログラムの改良などを通して、より質の高い歯科衛生士の育成に努めてまいりたいと考えております。

超高齢社会を迎え、医療の現場では人口構成や疾病構造の変化への対応が求められています。「健康寿命の延伸」が国民的な要請となるなか、口腔の健康が全身の健康に強く関係することが明らかになりつつあります。残存歯数と認知機能との関連や、歯周病と糖尿病や循環器疾患などの非感染性疾患（生活習慣病）との関連性が示唆されており、高齢社会における様々な健康・医療問題の解決に向けて、歯科医療・口腔保健の重要性が

益々高まっています。このような状況のなか、口腔保健医療、口腔ケアの担い手としてその活躍が期待される歯科衛生士の養成教育を担う一教育者として、その責任の重さを改めて認識している次第です。「人生100年時代」を見据え、これからの歯科保健医療をリードするとともに、時代の潮流や社会の変化に柔軟に対応できる歯科衛生士の育成には、しっかりとした土台（基礎）作りが重要と考えております。これまでの歯学教育と臨床経験を生かし、少しでも貢献したいと考えておりますが、臨床教育には現場での臨床実習が欠かせません。医歯学総合病院をはじめ関連機関・施設の先生方ならびにスタッフの皆様には今後とも一層のご指導とご協力を賜りますよう、この場をお借りして改めましてお願い申し上げます。

健康長寿社会の実現のためには歯の保存と咬合機能の維持が益々重要となっています。永久歯の抜歯の主な原因は「歯周病」と「う蝕」ですが、中・高齢層では「破折」の割合が増加していることが報告されています。特に発症した多くが抜歯の適応となる垂直性歯根破折は歯髄を失った失活歯に多発しており、歯根破折の防止のために歯髄の保護・保存が重要と考えられています。私はこのような歯の保存、特に歯髄保存の重要性を踏まえ、「象牙質／歯髄複合体の修復と再生機構の解明」、および「歯髄保存・再生療法に有用な生体機能性材料の開発」に関する研究を主なテーマとして研究活動を進めてまいりました。新規生体機能性材料の創生と新たな歯髄保存療法、さらに

は歯髄・象牙質再生療法の開発を目指そうとするもので、歯の保存による口腔機能の維持、さらにはQOLの向上と健康長寿社会の実現に寄与できるものと考えております。

先の平成28年度歯科疾患実態調査によれば、80歳になっても20本以上自分の歯を持つ「8020」達成者は50%を超えました。これに対してう蝕は若年者で顕著に減少している一方で、65歳以上の高齢者では逆に増加傾向にあります。根面う蝕の増加が反映されているものと考えられており、「根面う蝕の予防・処置法の開発」が喫緊の課題となっています。根面う蝕は発症部位により切削や修復操作が困難な場合も少なくなく、特に口腔清掃の不十分な要介護者や高齢者、また口腔乾燥症患者などでは、根面う蝕が多発することが知られています。発生の予防や進行抑制処置として、現在、フッ化物やフッ化ジアンミン銀などの薬剤塗布が応用されていますが、これらの有効性に関するさらなる検証が必要と思われます。また、これまでの研究手法を応用・発展させ、根面う蝕の発生予防と進行抑制に対してより効果的、簡便な薬剤・材料の開発に関する研究も開始したいと考えているところです。

最後になりましたが、新潟大学歯学部ならびに口腔生命福祉学科の発展に微力ではありますが全力を尽くす所存です。皆様には今後とも一層のご支援とご指導を賜りますよう、よろしく申し上げます。

教授に就任して



教授に就任して

歯周診断・再建学分野 教授 多部田 康一

平成30年10月1日付で新潟大学大学院医歯学総合研究科歯周診断・再建学分野教授に就任致しました多部田 康一（たべた こういち）と申します。私は27期生として新潟大学歯学部を平成9年に卒業致しました。東京に生まれ埼玉で育ち、高校は山梨県にある駿台甲府高校で寮生活を送りました。新潟大学に入学してからは28年が経ち、すっかりこの土地に愛着を持って生活しています。本学出身にて幾度か歯学部ニュースに自己紹介をしておりますので、主に歯学部在學生と保護者の皆さまに向けての自己紹介をさせていただきます。

私の大学生時代の教養課程はまだ2年間あり、のびのびと自由に過ごすことが可能な時代でした。テニス部に所属し、クラブ活動とアルバイト三昧の生活で模範的學生とは対極であり、多くの先生方に大変お世話になりました。学部卒業後はさらに4年も自分に勉強（研究）なんてできるのか？といった不安を持ちながらも、後悔しないようにできる経験をしてみたいという好奇心から大学院進学を選択しました。大学院入学後は、“頑張ろう”という気持ちに自然に転換しました。私はこれまで教員として働いてくる中で、多くの學生を見てきました。多少苦労しながらも頑張っただけで卒業し、国家試験に合格した後は、まるで別人のように立派な歯科医師になり、様々な分野で活躍してゆく人が沢山いました。歯学部では学ぶことがそのまま、自身の将来に結び付きます。努力家の優秀な學生は着実に力をつけてゆきますし、

そうでない人も意識を変えて頑張ればいつでも挽回できます。ただし、国家試験の合格率が低下している今の時代は昔と違うので、同じ努力なら早めの奮起が間違いなく得策です。そのような頑張りの中の選択肢の一つとして是非、学生時代の成績と関係なく大学院進学についても検討してほしいと考えています。大学院で研究を行うことで、考える習慣を身に付け、どのような背景をもって現在の歯科治療が行われているかを知ること、情報の氾濫の中で新しい知識や技術をいかに取捨選択し、自分の臨床に取り入れてゆくかという点でとても重要であり、質の高い医療を実践するために必ず役立ちます。そのうえでの多面からの努力により、時代や地域に合った多様な患者サービスの提供と、患者さんからの高い満足度と評価を得ることが可能となるでしょう。皆さんの新潟大学歯学部及び大学院での経験が、歯科医療従事者としての社会貢献につながればと考えています。

私は学部生時代に口腔外科か矯正科に進むことを心の中では考えていましたが、ライターの先生の勧誘をきっかけに、結果として、自分自身で聞いてないようにも思っていた当時の第2保存科（歯周病科）の大学院へ進学することとなりました。私が入局した当時、原 耕二先生が教授でいらした歯科保存学第2講座（現歯周診断・再建学分野）は、炎症性疾患としての歯周病の特性から、臨床教室としていち早く免疫・生物学的アプローチをもって研究に取り組んでおり、とてもアカデ

ミックな雰囲気には溢れていました。大学院の研究では、当時、講師でいらした山崎 和久先生（現口腔生命福祉学科教授）より、免疫学的研究手法を用いた歯周病の自己免疫疾患的側面や歯周病原細菌に対する自然免疫機構についての研究についてご指導を頂きました。研究には、主体的に学習しながら答えを求めてゆく作業が必要であり、学部学生の知識習得型の学習とは全く異なります。大学院進学前の不安は全く無用なもので、楽しく充実した4年間を過ごすことができました。大学院時代に関わった歯周病原細菌に対する自然免疫機構の研究テーマは、グラム陰性細菌細胞壁の構成成分であるリポポリサッカリド（LPS）に対する宿主側抗原認識レセプターとしてのToll like receptor の発見（1997年～1998年）に基づくものです。この発見をしたBruce Beutler M.D.の研究室（スクリプス研究所、米国）に、私は運よく留学する機会を得て、大学院卒業後の2005年から約3年間、ポスドクとして自然免疫の研究に従事しました。滞在した米国カリフォルニア州San Diegoは西海岸のメキシコとの国境付近に位置し、年中温暖な気候の風光明媚な都市です。裕福な米国人が多く住む比較的治安の良い都市ですが、安いお給料でぎりぎりの生活を送るポスドクであったため、楽しみも限られていました。しかしながら初めての海外生活での新しい経験や、異なる価値観を知ること、自分の興味に没頭する貴重な時間を得ることができました。学生の頃には全く想像もしなかった世界が広がり、今の自分を作る糧となる経験をしました。そのような中で、大学などのアカデミックで働くことを目指す考えがほぼ固まりました。昨年、2018年、新しいがん治療薬の開発に繋がったPD-1分子の発見について、京都大学の本庶佑先生がノーベル生理学・医学賞を受賞したことが話題となり、日本の医学研究の質の高さが改めて示されました。私の留学当時のボスであるDr. Beutler も、私が帰国した5年後の2011年に“Discoveries concerning the activation of innate immunity”（自然免疫活性誘導に関する一連の発見）についてノーベル生理学・医学賞を受賞しました。彼の受賞内容は、ゲノム配列がまだすべて決まっていなかった当

時、ミュータジェネシスという遺伝学的手法を免疫学に応用することで自然免疫に機能する新規の遺伝子群を発見したことが評価されています。私の研究成果もそのうちの一つであり、スタートしたばかりの未熟な研究者見習いでありながら、自然免疫研究全盛期に最先端の競争に参加し、その概要図を描く発見に寄与することができたことはとても幸運なことでした。帰国後5年を経て、師事したボスのノーベル賞受賞のニュースを聞いた時には心から喜びました。私が学生時代には存在しなかったそれらの新しい知見は、現在の医歯学系学生も学ぶ、学習内容の一つでもあります。大学院での研究生活から米国留学を経て、学生時代には想像もしなかった世界で、大切な友人を得ることもできました。こうして大学に残って働くことにならなかったとしても、この経験の価値は私にとって変わらないものです。

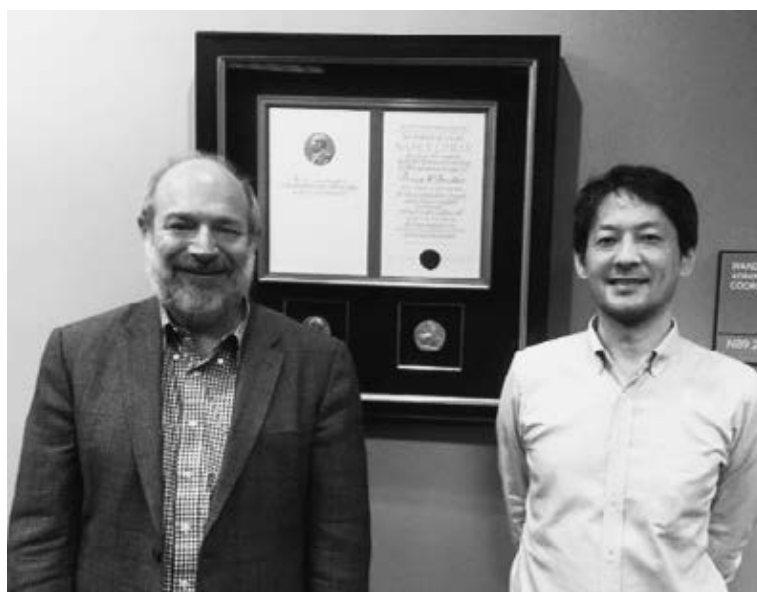
2005年の帰国後には、すぐに臨床実習を担当することとなり、教育・研究・臨床と多忙な時期が始まりました。その直後より臨床研修が義務化され、そこから十数年の間に社会の変化に大学が対応する努力を求められている時代と感じます。科学技術の進歩、経済環境や価値観の変化は、研究活動だけでなく人を相手にする教育や臨床とも密接に関連しています。臨床医として思考力のある、汎用力の高い人材育成のための授業や実習を行うために新潟大学歯学部の各分野の先生方が努力しています。私たち歯周診断・再建学分野においても同様です。歯周病学、歯周治療学はすべての歯科治療に関わるものであり、すべての学生に十分に理解をして卒業をして欲しいと考えています。解りやすくするために教科書には簡潔に記載される内容も、深く理解するといろいろな問題や矛盾があり、臨床現場においてそのまま当てはまらないこともあります。そのような点に疑問を持つ学生は必ずいます。そしてその疑問は正しく重要です。さらに深い理解が伴うことで、歯科治療において個々の異なる患者さんへの対応が可能となります。

歯周病学、歯周治療学では科学技術の進歩と情報の蓄積により、過去の知見（病因論）の修正や、治療方法の有効性についての再評価が続いていま

す。これは歴史の浅い歯周病学の発展における次の発展の前兆と考えられます。そのような点で歯周病学には予防・治療において明確な課題が残る未来のある分野と考えています。歯周病の罹患率は依然高いままです。歯周病の薬剤によるコントロールにおいては、薬剤耐性（AMR）が喫緊の問題になっており、歯周病の治療においても転換が必要です。歯周組織再生においては歯周組織の欠損を十分に補う方法が必要とされています。歯周病と全身疾患の関連が知られますが、歯科と内科の臨床現場をつなぐような共通する臨床マーカーが開発されれば、歯科医師がより積極的に国民の健康増進に役割を果たすことができます。そして歯を保存するための歯周病治療には原因除去とリスク因子の除去が重要ですが、リスク評価やリスク程度を反映する客観的指標が臨床現場には必要です。また、2017年には米国の歯周病学会のコンセンサスとして、侵襲性歯周炎（以前の若年性歯周炎）の診断が無くなりました。これからも科学技術の進歩とともに、教科書に記載されることや治療方法は間違いなく変化してゆくものと思われれます。大学・大学病院では現行最先端の歯周治療理論・技術を実践してゆくと同時に、歯周病学が発展して国民の利益になるよう努力をすることがとても大切です。

前述のように学生さんには情報の氾濫に惑わさ

れず、高い思考力をもって真の実力をつけて欲しいと考えています。私の恩師である前任教授の吉江弘正先生は歯周病に限らず、一つの専門領域を起点にしっかり思考し、臨床スキルを高めたのち、さらに幅広く多領域の臨床スキルを高めてゆくことは効率の良い方法であると学生さんに向けてお話しをされていました。これについては私もまったく同様に考えます。目標、やりがい、生きがいのような言葉で表現されるかわかりませんが、皆さんが目指すもの、大切なものを得るために、より一歩踏み出してチャレンジして欲しいと考えています。そのような環境を与えることができる分野が基礎・臨床問わず新潟大学歯学部にはたくさんあります。母校にそれがあつたことはとても恵まれたことであることは認識してほしいと思います。そのうえで、学外に良い勤務先を見つけて研鑽することもよしです。焦ることなく近視眼的にならずに進んでください。歯周診断・再建学分野（歯周病科）も専門としての歯周病学の発展への努力とともに教育・研究・臨床の歯車を回して活動しています。学生さんとは講義・基礎実習、臨床実習、卒後研修等に関わることを楽しみにしています。さらに一緒に歯周病の研究・臨床を行ってゆく新しい仲間に出会えることを願っています。興味があつたら遠慮せず声をかけてください。どうぞよろしくお願い致します。



ノーベル生理学・医学賞メダルの前でDr. Bruce Beutlerと
(2017年, UT Southwestern Medical Center, Dallas, Texas)

SSSV報告

Short Visitに行こう

歯学科4年 小澤月詩

私は夏休みの間、後輩2名と約2週間の台湾留学生交流支援制度プログラム（SVプログラム）に参加させていただきました。SVのプログラムは、様々な国の中から希望を出し、先生方に選考していただけます。この制度では、日本学生支援機構からの支援を受けることができるなど、参加しやすいよう工夫がされています。

私が今回台湾のSVを希望させていただいたのは、その国柄と日本との交流の多さにあります。

日本と台湾は、観光や文化のみでなく、医療の分野でも交流が深く、お互いに進歩のための良い影響を与える存在であると私は考えています。また、同じアジア圏であり、島国でもあります。似た環境を持つ中、それぞれにどのような医療の背景があり、また歯科の制度はどのようなになっているのか、非常に興味がありました。

今回のプログラム内容は現地市民病院歯科診療部での見学、アシストなどの研修、大学付属病院での頭頸部外科手術見学、CAD/CAMスキャニング実習でした。後輩はまだ臨床科目の履修が始まっておらず、見学しながら私自身も後輩に手技や意義について説明をしながらお互いに多く学びのある実習内容でした。台湾では日本とあまり変わらない医療の提供がされていますが、“予防”という概念がなく、常に“施される医療”であると現地の雰囲気やお話を伺って感じました。衛生面も日本ほど強く意識されておらず、患者側も気にしていないようでした。医療の進歩という言葉がよく使われていますが、実際は医療者と国民の

意識の変化が正しい言葉の使い方ではないかと考えさせられるお話も伺うことができました。さらに、台湾には歯科衛生士という日本では当たり前前の職業が確立されていません。代わりに看護師や雑務を行う助手が現場で働いています。国立陽明大学は台湾で唯一歯科衛生士の重要性に着目した学部長が歯科衛生科を設けた珍しい大学でもあり、卒業生であり、研究生の先生から非常に歯科衛生に対しての貴重なお話や考え方を伺うことができました。

休日や平日の実習終わりには九份や陽明山、夜市など観光スポットや地元の人オススメの場所へ現地の学生が連れて行ってくださいました。

英語が公用語の国ではないため、なかなか現地の人がいないとコミュニケーションが取れなかったり、交通機関を利用しにくいところに連れて行ってくださり、とても楽しく、また感謝しています。

私も初めは言葉の違う国に行くことに抵抗がありましたが、帰ってきた後は、現地での歯科学を学んだだけでなく、自分のコミュニケーション力と英語力の向上、新しいことにチャレンジする大切さを学ぶことができたと思います。また、明確な目的を持つことができた4年生の時期だからこそ、より今後の自分にとって有意義な時間を過ごせたこと、自分の意見を英語でも話すことができたことに、自分のことではありますが歯学部生としての成長も感じます。

最後ではありますが、このような貴重な経験を快く応援してくれた両親、常に私達生徒の視野を広げる機会をくださる新潟大学の先生方、台湾への道のを引率してくださった泉教授、台湾で大

変お世話になりました羅文良先生、法慈に深く感謝いたします。また、新潟大学と他諸国の大学との連携が永く続きますように、また多くの新潟大

学の学生が良い経験、良い刺激を受けられるように願っております。



ミャンマー研修に参加して

歯学科5年 小野 すみれ

「あなたは本当にミャンマー人と同じ顔をしていますね」ミャンマーで何度言われたであろうか。

これまでの24年間、日本人離れしているねと言われ続けてきたが、とうとうミャンマーの地で現地の方々によって認められることとなったのだ。

12/17～26の期間SSSVのプログラムで、ミャンマーのヤンゴン歯科大学へ行って来ました。この医療支援は、2014年以降、毎年口腔外科の先生方と歯科麻酔科の先生方が行っているもので、今回初めてそこに学生も同行させて頂く形での参加でした。1日目～4日目の午前中が術前検査から手術見学、午後は各診療科の見学、5日目はヤンゴン歯科大学の若き精鋭たちとのディスカッションという内容盛りだくさんの刺激的なプログラムでした。

1日目の術前診査では2日目以降に手術を行う患者さんの診断を行う様子を見学しました。先生方が限られた環境で、かつ短時間に次々と診断を行っていく姿に、大変感銘を受けました。印象的だったのは、日本では見る事ができない、唇顎口蓋裂の治療を受けていない10代後半の患者さんの症例を見学できた事でした。日本では、唇顎口

蓋裂に対して乳幼児期から一貫治療を行うのが一般的ですが、ミャンマーでは成人になっても口蓋閉鎖術を行っていない患者さんがいる事を知り、珍しい症例の経験に加え、医療の格差も改めて感じる事ができました。二日目からは先生方が行う手術を多くのヤンゴン歯科大学の研修医や先生方の熱心な視線とともに見学するという稀有な体験もできました。また、病棟で手術を終えた患者さんの家族が笑顔で話して下さった事も印象深く心に刻まれています。患者さんご家族の人生を治す事ができる、先生方の手技の素晴らしさに加え、改めて、やりがいのある仕事だと感じました。

最終日の学生さんとのディスカッションでは、日本の歯科教育についてたくさんの質問を受けました。学生さん達の学習に対する真剣な姿勢と熱意に驚くと共に、私自身も負けない様にもっと頑張ろうと心に誓いました。

最後に、不慣れな私たちに、このような機会を与え、又お世話頂いた口腔外科、歯科麻酔科の先生方、石田先生、また親切に面倒を見てくださった現地の学生さん達、先生方のご厚意に、この場をお借りしてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

また機会があれば、次回は歯科医師としてミャンマーの歯科医療に協力できたらと思っております。



カナダ・ブリティッシュコロンビア大学

歯学科6年 那須優介

日本学生支援機構による海外留学支援制度(SSSV)により、2018年2月より2週間、カナダのブリティッシュコロンビア大学(UBC)に同期の荒木、工藤と共に短期留学をさせていただきました。この場をお借りして、今回の短期留学について簡単にご報告させていただきます。

UBCでのプログラムの内容はシンプルで、現地の学生のスケジュールを手渡され、自分たちで自由に見学しなさい、というものでした。留学生向けの講義や院内ツアー等はなく、自らその場にいる先生や学生に話しかけて学ぶという積極性が試されました。そうした中で2週間、講義・少人数セミナーへの参加、臨床実習の見学・アシストなどを行いました。

UBC歯学部歯学科は1学年約50人の4年制です。臨床実習は、簡単なものは1年次から始まり、3、4年次で本格的な診療を行います。本学の臨床実習で学生1人が担当する患者さんは15人前後ですが、UBCでは1人当たり50人にもものぼるそうです。学生の患者さんが多い理由として、UBC歯学部の外来にある全ユニットが学生と大学院生専用であることと、治療費を安くしていることが背景にあるようです。学生が臨床実習中に経験する症例数は、クラウン、義歯、根治、抜歯等々どれも桁違いで、そういった経験値の高さに裏付けられた手際の良さや滲み出る自信のようなものに少し圧倒されました。

また、開業歯科医院の見学もさせていただきました。院長はUBC卒のカナダ国籍ですが生まれ

は日本という経歴で、カナダ滞在中の日本人の患者さんも多く来院していました。院長曰く、日本人の、特に若い患者さんの口の中を見ると残念に思うことがよくあるそうで、日本での歯科治療について一部疑問視していました。日本の開業歯科医のモラルや、人々の予防意識には課題があるのかもしれないと感じました。

UBCはカナダのバンクーバーにあります。バンクーバーの気温は東京と同じくらいで気候は穏やか、都市部から近いところに自然も豊かで、非常に住みよいところでした。現地の学生も非常に親切で、何度か夕食に誘ってくれたほか、週末にはスキー場に連れて行ってくれました。流石は冬季オリンピック開催地で、雪質は新潟のものとは全く違い、サラサラで大変滑りやすかったです。

今回の留学を通して、カナダという国やUBCの学生の優れた点を発見し刺激をもらった一方で、自分が普段いる環境がいかに恵まれているか、何が自分の強みになるのかを考えるきっかけとなりました。臨床実習で言えば、症例数はUBCと比較して少ないですが、ライター先生の充実したサポートに加え、同じフロアで診療する先生方をお手本にすることができ、総合病院の中で機能する歯科としての役割を学べる環境など、勝っている点は少なくありません。このように一度外へ出てみることで、日本という国にいる自分を見直し、改めて気付くことがたくさんあると思います。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださった魚島教授、石田先生をはじめとする先生方、引率して下さった柿原先生、そしてこのプログラムに携わる全ての方々に深く感謝申し上げます。



引率の柿原先生、同期の2人と



現地の学生達と夕食



ミャンマー医療支援活動に参加して

歯科麻酔学分野 岸本直隆

2018年12月17日～23日の日程でUniversity of Dental Medicine, Yangon, Myanmar（ヤンゴン歯科大学）における“口唇裂・口蓋裂を中心とする口腔外科手術に関する医療支援”に参加しました。新潟大学・歯学部と同校との姉妹校提携に基づき、2014年から開始されたこの事業は今回で5回目となりました。メンバーは前田健康・歯学部長、高木律男・顎顔面口腔外科学分野 教授、瀬尾憲司・歯科麻酔学分野 教授、児玉泰光・顎顔面口腔外科学分野 講師、永井孝宏・顎顔面口腔外科学分野 医員、岸本（歯科麻酔学分野 准教授）の6名に加え、SSSV事業として歯学科5年の相澤有香さん、小野すみれさんの2名が参加しました。

ヤンゴンに到着した翌日から病院にて約30名の患者に対する術前診察を実施し、術者と相談の上、今回手術を行う症例を決定しました。日本での術前診察とは違い、採血や呼吸機能などの詳しいデータが乏しく、全身状態の把握に苦慮する場面もありましたが、視診、聴診を中心とした五感による評価を行い、慎重に診察を進めました。手術は12月19日～21日にかけて計9症例を行いました。患者年齢は7カ月から19歳で、手術内容は口唇形成術、口蓋形成術、骨移植術、顎関節授動術、副耳切除術、鼻修正術でした。顎関節強直症の症例では開口量が15mm程度と重度の挿管困難でしたが、医科病院から気管支ファイバースコープを借用し、無事に挿管することができました。渡航前は設備や器材面における不安がありましたが、麻酔器は日本で一般的に使用されているものが揃

えられており、事前に準備してきた器材と合わせて問題なく手術・麻酔を終えることができました。手術中は多くのヤンゴン歯科大学スタッフが見学に来て、熱心に手術の手技を学ばれていました。また関連病院の麻酔科医も積極的に日本で使われている薬剤や器具について質問されており、この支援の目的が手術や物資の支援だけでなく、教育や情報の共有といった意味を含んでいることを実感しました。

ヤンゴン歯科大学のスタッフには病院外でも大変お世話になり、ホテルから空港や病院への送迎をはじめとして、歓迎会や慰労会の開催や市内観光案内など色々と配慮してくださいました。また最終日の手術が終わった際には多くのお土産やプレゼントを頂き、おもてなしの心に深く感動しました。私は初めての参加でしたが、他の先生は複数回この事業へ参加されており、ヤンゴン歯科大学の歯学部長や口腔外科の先生方とも懇意で、長年に渡って良い関係性を保ってこられたことを感じました。これまでボランティア活動へ参加する機会はほとんどありませんでしたが、ヤンゴン滞在中に多くの感謝の言葉を頂き、それによって自分の心も豊かになった気がしました。本事業は本学、および参加者にとっても意義が大きく、今後もこのような素晴らしい活動が継続されることを期待しております。

最後になりましたが、参加された先生方、学生さん、渡航のため色々と準備をして頂いた歯学部事務の皆様、病院手術部または材料室、支援の意義を理解し麻酔薬を提供して下さった丸石製薬株式会社様に深くお礼申し上げます。



写真1 成田空港にて出発前の集合写真



写真2 手術終了後の記念写真、ヤンゴン歯科大学のスタッフと共に

早期臨床実習を終えて

早期臨床実習を終えて

歯学科3年 吉田麻莉

早期臨床実習Ⅱは、1年生の時に行われた早期臨床実習Ⅰとは異なり基礎科目と臨床科目との関連を強く意識した内容で行われた。各診療科における実習と基礎科目の講義が隔週で行われ、実習においても解剖学や歯科理工学などの基礎科目を意識する場面が多くあった。例えば、歯科放射線科ではレントゲンやCTから魚の骨がどこに刺さっているのかを考えた。診断を行うためには、教科書だけでは理解の難しい三次元的な解剖学的位置関係の把握が必要だ。また、基礎科目での講義では研究内容について分かりやすく説明があった。基礎研究が臨床において多くの患者さんに利益をもたらすこと、研究のおかげで歯科医療が進歩していることを改めて認識できた。

2年生、3年生で学ぶ基礎科目は覚えるべきことが膨大で、勉強していても歯科とはあまり関係ないのではないかと感じることも多くあった。そんな中、早期臨床実習Ⅱで基礎や臨床に携わる先生方のお話や治療見学、実習を通して、臨床にお

ける基礎科目の重要性を改めて感じることもできた。

3年生後期から臨床科目が始まって、基礎科目が大切であったことを改めて感じている。例えば、病理学では組織学で学んだ正常の組織像を知っていないと異常病変が分からないし、病因を理解するには解剖学の知識も必要だ。また、補綴学では咀嚼や嚥下の流れを理解するのに生理学や解剖学の知識が必要だ。基礎科目で学んできたことが繋がってきて面白さと同時に、基礎の定着が不十分であることを痛感する。

早期臨床実習で治療見学を通して、病院に医療を必要としている患者さんが多くいて、特に高齢の方が多く感じた。食べることは、単に栄養を摂取するだけでなく楽しみの一つでもある。美味しく食べられるように良い補綴装置を作ったり、予防にも積極的に取り組んでう蝕や歯周疾患による歯の喪失を減らし健康の保持増進にも努めたい。まだ書きたらないくらいやりたいことが沢山ある。歯科医療は患者のQOLに大きな影響与える責任ある職種である。このことを心に留め、これからの実習・講義一つ一つに取り組みたいと思う。

早期臨床実習を終えて

歯学科1年 近藤 裕次郎

早期臨床実習の活動は大きく三つに分かれるが、それぞれに学びがあった。

患者役実習では、6年生の先輩方に自分の歯を診ていただいたが、彼らの対応は既に歯科医師のそれようであった。中でも感じたのは先輩方との話しやすさ、とりわけ彼らの笑顔の穏やかさだった。自然な笑顔は相手の緊張を緩和し、悩みなどを相談しやすくさせる。これは診療する時に限らず、一般的な対人関係においても当てはまるものであり、日々の生活態度が如実に表れるだろう。5年後には自分も彼らのようになるために、膨大な知識と高いコミュニケーション能力を身に付けていなければならないのだと痛感し、一層身が引き締まった。

患者付き添い実習では、患者さんをユニットに案内した際、先生が親身になって患者さんの予定を聞いたり、治療方針を丁寧に説明する姿を見る

ことができた。ここでも医療従事者として患者さんと接するには、きちんと意思疎通をして彼らの不安を和らげていくような対応が必要になるだろうと感じた。

治療見学実習では様々な診療科を回ったが、特に口腔外科の見学が印象深い。手術の様子や患者さんの手術後の経過の写真をを見せていただいたが、激しい顔面の損傷やそれに対する外科的な処置は、日常からかけ離れたようで衝撃を受けた。しかし、術後経過の写真を順に見ていくとみるみる快方に向かっており、口腔外科医の技術と人間の再生力に驚かされた。一方で、写真から患者さんへの負担が想像以上に大きいことも見受けられた。そのような困難な手術を成功させる技術と集中力を長く持続させる体力も必要であることを学んだ。

早期臨床実習は私にとって初めての経験をすることが非常に多く、医療従事者としての心得の一片に触れることができた。入学したばかりの学生が実際に病院で患者さんと触れ合う機会を得られることに感謝し、勉学、部活共に励んでいきたい。



ポリクリを終えて

ポリクリを終えて

歯学科5年 森川雄太

新潟大学に入学してから5年半が経った。あっという間に学年が上がり、実感が湧かずにいたが、馴染んできた白衣の汚れがこれまでの4年間の時間の経過を物語っている。

5年生に上がり、臨床予備実習（ポリクリ）が始まった。これまで行ってきた実習よりも臨床を強く想定した実習である。ポリクリに向け、着慣れた白衣から新しい緑衣へと袖を通したことで身が引き締まる思いと同時に、先輩方の背中に一歩近づけたようにも思えた。

実習は、模型相手から学生同士の人相手へと変わった。グローブを付け、歯科器具を持ち、人の口の中を触るのは初めてのことだ。口腔粘膜は、模型では感じることもなかった軟らかさや温かみが人の口を触っているということを強く実感させた。散々模型でやってきたという自信の裏に、言葉では表せない不安や緊張を感じていた。

ポリクリも板につき、新鮮だった互いの緑衣姿にも見慣れた頃には既に5年生になって半年が経とうとしていた。10月にはポリクリが終わり、実際に患者さんに治療を行う臨床実習の準備が始まる。臨床実習で治療を行うことは自分たちが目指している歯科医師としての姿に近く、憧れていた。10月になり、臨床実習のための登院式が行わ

れた。そこで先生方から青い糸で自分の名前の刺繍が施された緑衣を頂き、また一歩前進したような気がして高揚感のようなものを覚えた。

臨床に出て、今までとは違う新しい環境に身を移すことに期待と不安が共存していた。最初の1か月間は先輩と一緒に行動し、臨床のいろはを教わる引き継ぎ期間である。臨床の現場は覚えることが非常に多くある中、右も左もわからない私たちは先輩にお世話になりっぱなしであった。慣れた手つきで治療を行い、自分らの質問に対しても全て丁寧に答えて下さる先輩方の背中中、思っていたよりも大きく、遠いところにあるように感じた。自分たちにも同じことができるだろうか。抱えていた不安は大きく膨らんだ。

独り立ちした今、この不安を消していくためにも、将来、立派な歯科医師になるためにも、日々勉強にさらに励まなければならないことを改めて感じた。



ポリクリを終えて

歯学科5年 大久保 光

ポリクリを終えて、CBT、OSCEという山場を越え、臨床実習の荒波に飲まれ息つく暇もなく2018年を終えようとしている現在。年の瀬を実家で過ごししながら、5年生の生活を振り返ってみる。臨床実習までの道のりを、後輩が知る手助けになればと思う。

5年生に上がり、緑衣に袖を通し、ポリクリが始まる。これまでの講義や実習とは異なり、班毎の行動が主となる。座学で学んできた歯周、小児、矯正、口腔外科など各科毎の臨床的な実習をそれぞれ班毎に回っていく。ファントム相手の実習ではなく、相手は生身の人間だ。スケーリングひとつ取っても歯肉を傷つけることが怖くて中々うまくいかない。採血や伝達麻酔など、より侵襲の大きい処置は相手との信頼関係が重要となる。緊張感の中で学生同士助け合わなければ成り立たないのだ。

ポリクリはOSCE対策とも言われているが、これまでの講義内容を実際に体験することで知識がしっかり身に付くため、CBTや国家試験の為のいい勉強にもなる。器具や処置内容は実際に見るまでイメージが付きにくいものだが、一度見ると一気に理解が深まる。また臨床実習でも役立つ内容が盛りだくさんのため、ポリクリの内容はしっ

かり整理して取っておくことをお勧めする。

ポリクリも終盤を迎える頃、CBTがやってくる。スケジュール上、ポリクリの合間にCBTを挟むため、どうしても分からない科目は出てくる。班毎にポリクリで未履修の内容も異なるため、お互いに教え合うことで補うことが出来た。

CBTを無事終わるとすぐOSCEだ。ポリクリの内容を復習し、お互い試験官役となり対策した。ここでも仲間の存在が鍵である。

晴れて合格、登院式を経て臨床実習にあがると、これまで以上に仲間と助け合う日々を送ることになる。ぜひとも同期を大切にしてほしい。

新年からも、臨床で指導して下さる先生方、私達を見えない面でも助けて下さる病院スタッフの方々、広い心で協力して下さいる患者さん、支え合ってくれる同期への感謝を忘れず気を引き締めて頑張りたい。



ゴルフとはメンタルトレーニング

歯学科2年 阿部 空

まずは簡単に部活動の紹介をしたいと思います。私たち新潟大学歯学部ゴルフ部は男子11名、女子7名の合計18人の部員からなり、活動は毎週月曜日と水曜日に練習を行っています。練習といっても、ゴルフでは基本的に練習場にて打ちっ放しがメインであるため、夕方頃に日軽ゴルフガーデンさんで練習をさせて頂いています。

表題のメンタルトレーニングとはどのようななされているかを少しお話ししたいと思います。ゴルフは他のスポーツ、例えば野球、サッカー、バスケなどのチームスポーツとは異なり個人での競技という側面が強いと思います。普段のラウンドや先生方との学内戦、そして歯学部と言えばオールデンタルなど、ゴルフを実践する場面はそれなりにあります。筆者自身大学進学以降にゴルフを始めたため、初対面の先生方や学生とのラウンドでは未だに緊張します。しかし、自分の練習や技術の向上とともに、そのような場面でも少しずつメンタルをコントロール出来るようになっていくと実感しております。

オールデンタルでは他大学の学年も全く異なる

学生とラウンドをします。2018年度では戸塚カントリークラブという、名門コースでのラウンドも経験させて頂きました。オールデンタルではなかなかラウンドが難しいコースでのラウンドがやはり醍醐味であると同時に、私立の歯学部大学は応援も一味違います。筆者は初体験だったのですが、スタートのティーグラウンドに同じパーティの選手の応援のために多くの学生や先生方などが詰めかけ見学していました。その中をティショットするのは、かなりの緊張でありました。このような状況でプレーするのはプロ以外では考えられませんでした。これもまたメンタルトレーニングだったと思います。

人のお付き合いとは、歯学部の学生がいずれ卒業し多くの患者さんと会うことと同じだと思います。初めての方と会い、話し、信頼して頂いた上で治療をする。この繰り返しには当然、歯科医師としての技量も求められますが、コミュニケーションや礼儀作法などという基本的な部分も重要であり、ゴルフというスポーツを通じて学んでいけることが最大の魅力だと考えております。

医歯学祭を終えて

歯学科3年 田中杏奈

2018年度新潟大学医歯学祭にて実行委員長を務めさせていただきました、歯学科3年の田中杏奈です。10月27日、28日に行われました、今年で第8回になります医歯学祭は、皆様のおかげで無事に開催することができ、成功裏に終わることができました。開催にあたりご協力いただきました、前田学部長をはじめ、山村先生、顧問の佐伯先生、学務系の皆様、歯学部関係者の皆様、誠にありがとうございました。またお忙しい中、大変多くの方にご来場いただき感謝しております。

今年は、「彩（いろどり）」をテーマに掲げ、①医歯学部の学生が主体的に明るく前向きに取り組み、各企画で皆がそれぞれの色（＝個性）を出す、②医歯学祭を通して各学部の学生同士や学生と地域の皆様が交流し理解を深め、皆で大きな笑顔の花を咲かせる、という目標の元、企画運営に取り組んで参りました。私自身このテーマを達成することができ、皆さんに楽しんでいただけた医歯学祭になったのではないかと考えています。

医歯学祭は、資金集め、企画立案、運営まで全てを実行委員中心に多くの学生が協力して準備していきます。今年はその過程において、どうしたらより多くの人に足を運んでいただくことができるのか、より医歯学祭を楽しんでもらいかつ医療に興味を持ってもらうためにはどうしたらいいの

かを大切にしていまいりました。例年の活動に加え、新しく医歯学部学生による健康診断として、血管年齢測定や骨密度測定等を取り入れたり、ステージ企画を充実させたり新たな試みを増やしました。その他にも、風に立つライオンのモデルにもなった柴田紘一郎先生をはじめ多くの先生方にお越しいただき、講演していただきました。歯学部としましては、例年大好評の無料歯科相談を今年も開催し、お越しになった多くのお客様の悩みを解決し、歯科疾患の予防に対する意識向上、定期検診の重要性を理解して頂けたことと思えます。

私自身このような規模の学祭の運営に実行委員長として関わらせていただけたこと、とても貴重な経験になりました。この経験を生かして、私自身良い歯科医師になれるよう、今後も勉学に励んでいきたいと思えます。

最後になりましたが、医歯学祭は医歯学部の学生の日々の研鑽の成果を皆様に見ていただくことで、お互いにより理解を深めるとともに、日々ご協力いただいている方々への感謝の気持ちを伝えられるとても良い機会なのではないかと思っております。これからも医歯学祭がより多くの人に楽しんでもらい医療に興味を持ってもらえる良い場になるよう発展していくことを願っております。



SCRP報告

SCRP日本選抜大会を通して

歯学科6年 柴 崎 慎 司

平成、そして歯学科学生として最後の夏、私は新潟大学代表としてスチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラム（SCRP）日本代表選抜大会に出場してまいりました。本大会は日本歯科医師会が主催し、研究成果および英語によるプレゼンテーション能力を競う大会です。

私は「Preparation of Feeder Cells to Maintain the Human Deciduous Dental Pulp Stem Cells」というテーマで研究および発表を行いました。iPS細胞や組織幹細胞の培養には“床敷”になるfeeder細胞が不可欠です。そのfeeder細胞ですが、一番ポピュラーに用いられている細胞はマウス由来になります。ヒトの幹細胞を培養するのに他家細胞を使用するのは問題ないのか？そんな疑問を漠然と持ちつつも研究補助として細胞培養を行っていたおり、小児歯科学分野の齊藤一誠准教授から「こんな研究があるよ」と教えていただいたのが興味を持ったきっかけでした。

臨床実習も後半戦に差し掛かる3月中旬、SSSVでタイに出発する直前、生体歯科補綴学分野の魚島勝美教授から「今度のSCRP代表、柴崎よろしく」と成田空港国際線ターミナルでお話してくださったとき、春先にもかかわらず嫌な汗が止まりませんでした。

というのも、編入前に行った研究といえばハイドロキシアパタイト微粒子の形態制御をしていた私にとって、細胞を実際に触れる研究は「未知との遭遇」に他なりません。果たして限られた時間の中で結果を残すことができるのか、不安になり

ました。

そんな私の心配をよそに研究はどんどん進行していきます。

提供された歯髓細胞を培養し、遺伝子を導入し、導入した遺伝子がきちんと働いているか調べる。遺伝子が導入されたことを確認した細胞をfeeder細胞として、乳歯歯髓幹細胞の培養時に未分化状態が維持されているか確認する。

文章で書くとたった数行の内容ですが、それを実行し、結果を残すことはこんなにも難しいものか。と痛感する毎日でした。細胞はしゃべってくれませんし、こちらの考えを理解してくれることありません。細胞と意思の疎通ができるツールなんてないかなあ、などと悩んだ時期もあります。そんな中、他にも業務がたくさんあるにもかかわらず、たくさんの先生方が私に丁寧かつ根気強くご指導してくださったことは、研究を通じて一番の宝物です。

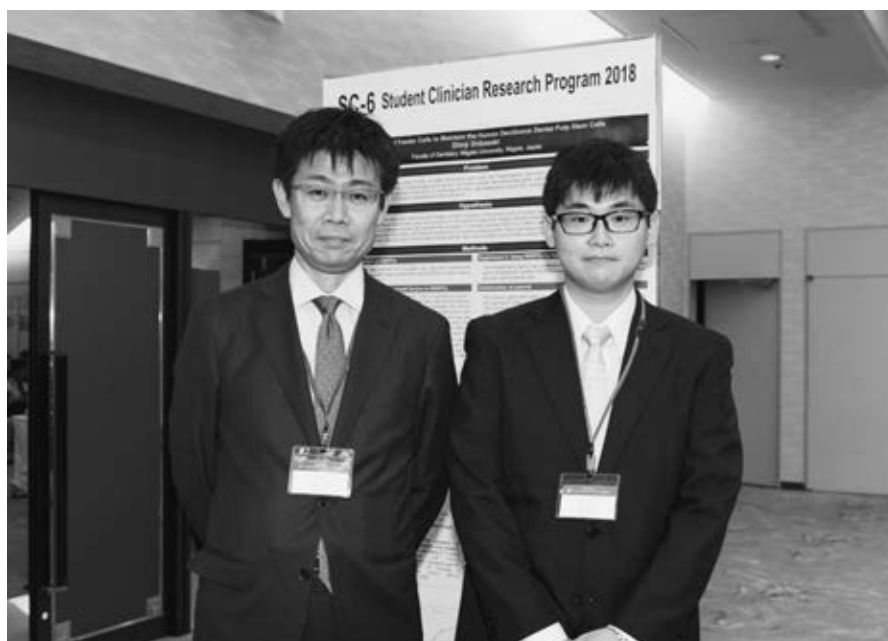
無事に結果もまとめ、発表資料や原稿の準備をし、大会当日を迎えました。残念ながら入賞することは叶いませんでしたが、自分自身が持てる全てを出し切ることができ、達成感を得ることができました。

本大会を通じて、基礎・臨床を問わず研究を行うことの必要性や意義を学ぶことができました。将来、歯科医師となったあとも研究を行うことができるよう絶えず努力をしてまいります。また、私と同じくらい、あるいはそれ以上の熱意を持った素晴らしい各大学の代表者と出会うことができました。同じ目標をもつ仲間たちと出会えたことはかけがいのない財産です。

最後になりますが、本大会に参加するにあたり、たくさんの方々からご支援ならびにご協力をいただきました。研究の機会を用意してくださっ

た生体歯科補綴学分野の魚島勝美教授、貴重な研究テーマを用意してくださり、また手技や考え方をご指導していただいた小児歯科学分野の齊藤一誠准教授、実験環境を提供してくださり、また実験に関する助言をしてくださった照沼美穂教授をはじめ口腔生化学分野の皆様、解析の助言をしてくださった歯科薬理学分野の柿原嘉人先生、大会

本部との連絡や書類の準備に奔走してくださった学務係の中澤典子様へ深く感謝申し上げます。さらに、臨床実習中にもかかわらず研究を行うことを了承してくださった藤井規孝教授をはじめ歯科総合診療部の先生方、49期ヘッドインストラクターの大島邦子先生、また同期の友人達に重ねて御礼申し上げます。



Japanese Elderly Study

The world's longest lifespan country

A Ph.D. student Preventive Dentistry Department,
Graduate School of Medical and Dental Science, Niigata University, Japan

A Lecturer Department of Community Dentistry
Faculty of Dentistry Mahidol University, Bangkok, Thailand

Raksanan Karawekpanyawong

The Japanese are well-known for their longest life expectancy in the world. The average life expectancy reached 84 years old in 2013 according to WHO. The mystery of longer life of Japanese people lied in the success of the national health insurance system and the medical advancement reported by previous studies. At the very first time I arrived in Japan, it was really amazing to find Japanese elderly doing some activities such as cycling, climbing the stairs, and doing sports, not to mention, long distance walking ! These elderly are surprisingly healthy compared to what I have always seen in my country (Thailand) and this reason also attracted a number of researchers to target their research to focuses on the Japanese elderly. One of the famous Japanese elderly studies is organized by Niigata University.

Niigata Cohort Study has been initiated since 1998 in collaboration of physician, dentists, dieticians, and specialists from various departments. 600 subjects were recruited randomly from residents of Niigata city when they were 70 years old. The survey consisted of dental examination, phys-

ical examinations (Blood Pressure, ECM test, Blood Test, Eyes, Ears and Doctor's Diagnoses) and interviews. The survey was performed every year during 1998-2008. However, during 2009-2017 the yearly home visiting surveys were performed instead.



Therefore, the last examination in which the subjects were asked to come to the survey sites was done 10 years ago in 2008. As a Ph.D. student, I fortunately have an opportunity to participate in Niigata Elderly Cohort Study Examination in 2018. At this survey, many different kinds of data were collected, for example, blood test, urine test, saliva test, physical fitness test, an-

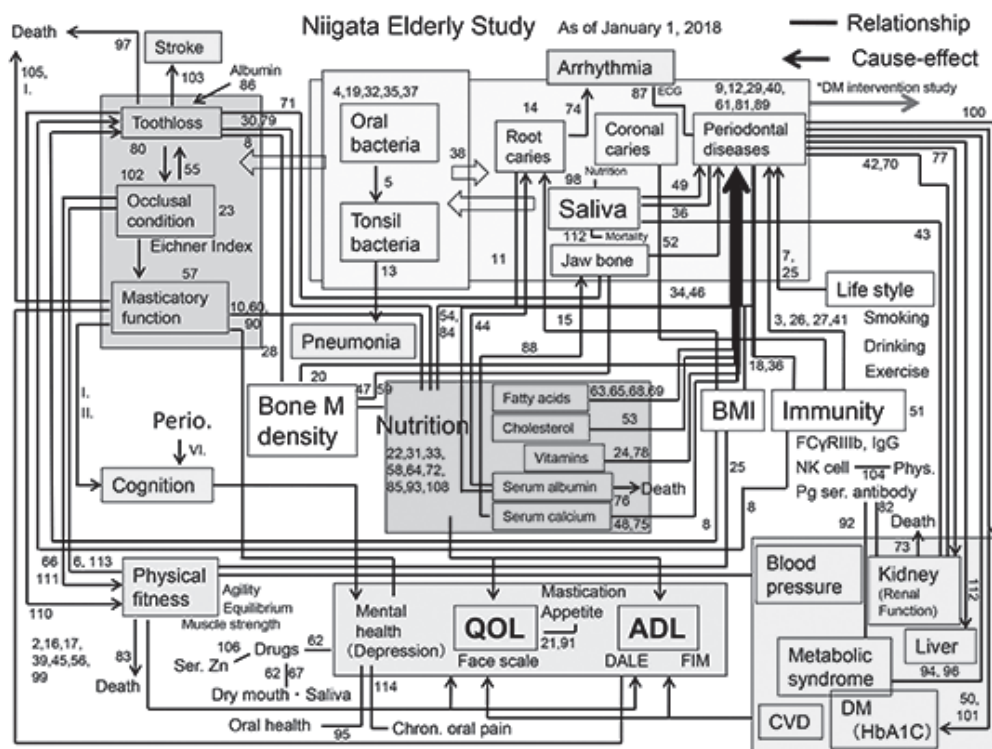
thropometric measurement, physical examination and dental examination. Such a survey enables researchers to study the relationship between oral health and general health and the casual effects of risk or protective factors. This kind of survey produced a fruitful database for research and should also be adopted for other places.

This figure shows the relationship between various variables from this survey. There were more than 100 studies published using this database. At the time of my observation, it was the time when all the subjects age 90 years old. It means that this cohort study has been continued for 20 years long.

I have to say that it was a really great opportunity to participate in this survey. Many of the subjects are surprisingly healthy both from their appearance and their examination results. Having a chance

to observe this big survey motivated me to initiate a similar study in my hometown. Apart from the research, all the subjects I have met at the survey gave me an inspiration to stay healthy and start physical exercises for myself.

One of the best impressions I got from this activity is to know how disciplined the Japanese people are. All of the coming subjects had been wearing the step counter pockets every day for years and were given the new one at the survey. If the same study was performed in other places in the world, I am still in doubt whether subjects will wear them every day. In a worse case, they might displace the pockets somewhere. Apart from the super-cooperative subjects, all the researchers joining the survey were very much disciplined. They came in time and work systematically from the start to the end. Not only at the survey site, but also at the lunch area, the



garbage was separated properly and taken back with them to the university.

Last but not least, I would like to thanks to Preventive Dentistry Department, Niigata University for giving me a chance to

gain a very useful and memorable experience. I'm looking forward to learning such interesting things during my next three years !



My life in Niigata as a graduate student

歯科矯正学・大学院3年 Supaluk Trakanant

My name is Supaluk Trakanant. My nickname is Milk. I am 3rd year postgraduate student in Orthodontic department. I was born and raised in Bangkok, Thailand. I graduated from Faculty of Dentistry, Chiang Mai University. When I was a fifth-grade student, I had an opportunity to join the short dental exchange program for two weeks here in Niigata University. During the program, I had experienced a lot in dentistry. I visited most of the departments and I also participated in many particular programs, including observing the treatment procedures in the clinic, practicing in laboratory work, and learning about research methods. I have always had a great interest in Orthodontic Dentistry. Therefore, after I came and experienced Dentistry in Niigata University, it was a great inspiration for me to pursue my further study in Orthodontics here in Niigata University. I am very happy to have a chance to come and study here. All the staffs in the faculty are very kind. Everyone has helped me adjusting my life in Niigata. It is my pleasure to be a part of Orthodontic family here in Niigata University.

The first year of my PhD program, I was learning and practicing both in the clinic and laboratory about Orthodontic treatment knowledge and techniques. Regarding research, I have developed an interest



in cleft lip and palate and basic science. As a result, I have joined Oral Anatomy department to pursue my research study since the end of the second year. It is also my pleasure to be a part of Oral Anatomy family, to learn and practice in basic science research which is one of the most precious experiences in my life.

Moreover, during the time that I have had studies here, I have made a lot of good friends both Japanese and international ones. Finally, I am certain that I would learn



a lot about Orthodontics and research. studying here.
Also, get valuable experiences while I am



歯学部生の学会発表体験記

学会発表を終えて

新潟大学歯学部4年 渡部 清人

こんにちは、新潟大学歯学部歯学科4年の渡部清人です。この度は、第29回日本咀嚼学会で発表した時のこととお話しします。私は2年生の頃から、生理学の研究室にお世話になっていて、痛みや味覚についての研究をしていました。この度は、そのご縁で、味覚の研究について発表をさせていただくことになりました。学会に参加する学生は私一人で、周りはみんな先生ばかりでした。私は緊張やプレッシャーに弱いので、最初にお話をいただいたときは少しためらいました。しかし、学生のうち学会発表をする機会は滅多にないと思い、そのお話を受けることにしました。

学会での発表が決定したのは夏休みで、学会までの期間は約2か月間でした。そこからは慌ただしい日々が始まり、準備の為にほぼ毎日研究室に通いました。実験に加え、発表のスライド作り、練習など不慣れなことばかりでした。スライドは先生に何度も見てもらい、どうすれば自分が伝えたい情報が聞き手に伝わるか、推敲を重ねました。発表練習も先生方やクラスの友人たちに何度も見てもらい、伝わりやすい表現を模索しました。時間はあっという間に過ぎてゆき、日を重ねるごとに本当に発表できるのだろうかという不安が増していきました。特に発表前の一週間は持ち前のメンタルの弱さを発揮し、夜もあまり眠れませんでした。

そうこうしているうちに発表当日を迎えました。私の発表は午後でしたが、会場の雰囲気慣れておきたいと思い、早めに会場に入りました。午前中は他の発表を聞いて過ごしました。どの先生の発表もわかりやすく、焦りがどんどん増していきました。そんな時、研究室の先生が、昼食に誘ってくださいました。自分の心境を話したり、

それを先生から茶化されたりしているうちに、発表の1時間前になりました。緊張はピークに達し、会場で人の発表を聞いていても全く耳に入ってきません。自分の番がやってくると、もはや緊張はなく、ええいままよといった感じで壇上に上がりました。それが良かったのか、発表が始まってからはいつも以上にスラスラと喋ることができました。発表が終わるとすぐに質疑応答の時間がやって来ました。これは僕が最も恐れていた時間です。私は物事を端的に話すことが世界で一番苦手なので、質問に対してわかりやすく答えることができるか本当に不安でした。質問の数は思った以上で、内容も難しかったです。正直わからないものもありましたが、何とか持ち合わせの知識だけで乗り切りました。席に戻ると質問にもっとうまく答えられたんじゃないかと考えたりもしましたが、それよりも未だかつてない解放感でいっぱいでした。最高に気持ちよかったです。大変なことたくさんありましたが、本当に貴重な体験ができました。これもひとえに発表まで支えてくださった先生方、クラスメートのおかげです。感謝しかありません。ここまで読んでくださった皆様、最後までお付き合いいただきありがとうございます。今後の渡部清人の活躍をお楽しみに(笑)



歯学部生の課外研究活動

薬理学教室での経験

歯学科3年 登内恒介

薬理学教室に入ったのは、二年生の後期の歯学研究演習がきっかけとなりました。歯学研究演習の中で、様々な先生方から研究に関するお話を聞かせていただく中で、歯科における研究に興味を持つようになりました。佐伯先生に相談に行き、薬理学教室に見学に行くことになりました。柿原先生に実験を教えてもらい、最初は骨芽細胞の培養をしていました。培養においては、コンタミネーションを防ぐための様々な手法があり、それをしっかりと覚えて培養に臨みました。継代の際に、トリプシンにより細胞をはがすのですが、上手く剥げない時があり、トリプシンの濃度を調節したりと、時にはプロトコルにないことも試してみたりしました。このように、細胞培養の手順を学んでいくのと並行して、骨芽細胞や骨の石灰化に関する説について学習を進めていきました。私に関わった実験においては、骨の石灰化に関する説のうち、基質小胞説に注目して学習しました。基質小胞に含まれる酵素が骨の石灰化に関わる機序やその時期についてしっかりと学習できたと考えています。こうした学習を生かして、骨の石灰化に関わる酵素を調べるために、ウエスタンブロッティングやゲル作成、免疫沈降などの実験も行いました。骨の石灰化に関わるアルカリホスファターゼといった酵素やカルシウムイオンの濃度などを様々な実験を通して調べていくことで、ある試薬によりもたらされる効果を調べていきました。質量分析によって分かった、ある試薬により特異的に発現する酵素に注目して学習を進める

ことで、その試薬が骨の石灰化に与える効果、機序について調べていこうと考えています。二年生の後期から初めて一年間半近く行ってきたこうした実験は、骨の石灰化に関する深い理解につながり、口腔生化学や薬理学といった授業での学習にも有用でした。薬理学での実験の成果は、歯学研究演習の中間発表の場で発表する機会を得ました。発表に対して、教授の方々から感想や質問をいただき、その後の実験に対する姿勢などについても考えさせられました。

薬理学教室には、先述した実験以外にも様々な学年の人たちとの交流がありました。薬理学教室には、学年を問わず生徒が集まっており、それに加えて他教室からの大学院生もいて様々なお話を聞くことができました。大学院生の方々には、大学生活や実験手法に関して相談に乗ってもらったり、質問に答えてもらったりしました。一年生や二年生は私とは異なる実験に関わっており、その実験に関わる話や実験手法に関する知識をお互いにすることで、双方の実験に関する考察を深めることができたと考えています。五年生からは、過去にどのような実験が行われていたかということや、その時からの実験が続いてきた結果として、現在の実験に取り組んでいるのだということが分かりました。薬理学教室では、年に数回の食事会のようなものがあり、様々な学年をまたいだ交流ができました。

薬理学教室では、実験だけでなく、様々な学年の方々との交流もでき、非常に有意義な経験ができています。今後も、実験をつづけていくなかで、様々な先生方にお世話になりながら、様々なことに対する知識、理解を得ていきたいと考えています。

歯学部で行われているユニークな研究紹介

神経細胞の「働いている」証を調べる手法：細胞外記録

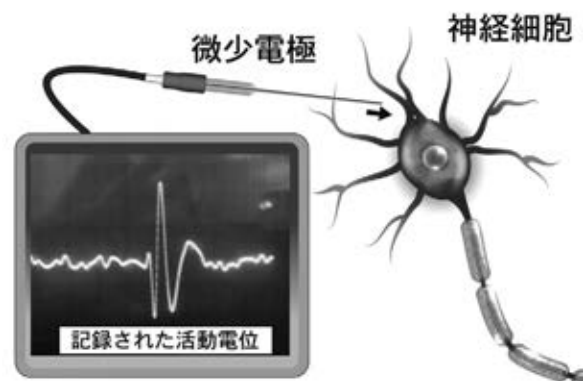
口腔生理学分野 黒瀬 雅之

私達の脳は場所によって役割が異なっています。簡単に言うと、何かを食べる場合、食べる運動に関係する脳の部分は活発に動きます。脳が活発になるということは、そこにある神経細胞（ニューロン）が活発になっていることを意味します。脳には1000億以上のニューロンがあり、さらにそれがつながることでネットワークを作ります。よって、今まで、脳の活動を知るためには、ニューロンが作るネットワークの活動を時間的に追う必要がありました。しかし、ニューロンが作るネットワークは非常に複雑で、なかなか全体を理解できる方法はありません。そこで、今まで行われてきたのが、ネットワークを作る1つ1つのニューロンの活動を記録する手法と脳を分割して観察する手法です。ここでは前者の話をしていきます。

1つ1つのニューロンの活動を記録する手法は、先端の非常に細い（直径200 μ M前後）電極を使って脳の中にあるニューロンの活動を記録する“細胞外記録”と、生体内から細胞を取り出して、試験管や培養器の中で体内と同様の環境を人工的に作り、活動を記録する“in vitro記録”があります。昨今、脳神経科学の研究では、in vitro記録を用いて非常に多くの発見がもたらされました。しかし、脳内はニューロンのネットワークが存在し、このネットワークを使って情報の処理が行われているわけですので、ネットワークから切り離れた細胞の活動を記録するだけでなく、ネットワークを損なわずにニューロンの活動の把握が可能な“細胞外記録”が重要な位置づけとなります。

我々口腔生理学分野では、ニューロンを対象と

した“細胞外記録”を長年行っております。この方法は、脳に細い電極をゆっくりと入れ、電極をニューロンに近づけることでニューロンの出す信号を記録する手法です。この時、脳には1000億以上の数のニューロンが存在しますので、ニューロンがたくさんいるような場所では、ニューロンが活動している様子（活動電位という電気信号：下図）を比較的簡単に記録可能です。しかし、同じニューロンの活動を長時間ちゃんと計測するためには数マイクロメートル単位で“微妙”に電極を操作する技術が必要です。また、標的とするニューロンのいる場所の地図はありますが、それぞれの個体で違いがあり、「この場所にいる！」と脳の上から眺めてもわからずコツコツと探すしかありません。熟練のテクニックが必要となる記録手法であり、広い脳の中から標的とするニューロンを見つけだすには忍耐が必要ですが、標的とするニューロンの活動電位が発する甲高い“働いている”音がスピーカーより流れてきた時の感動と興奮は極めて中毒性が高く、それまでの疲れが一気に吹っ飛びます。



図説：先が非常に細い金属の微少電極を生きている神経細胞にゆっくりと近づけていきます。電極の先が近くなると、甲高い“働いている”音である活動電位が記録されます。

学会受賞報告

International Association for Dental Research (IADR) / Distinguished Scientist Award in Geriatric Oral Research

International Association for Dental Research (IADR) / Distinguished Scientist Award in Geriatric Oral Research を受賞して

包括歯科補綴学分野 小野 高 裕

昨年の7月22日、ロンドンのExCel London Convention Centerで開催されたthe 96th General Session of the IADRにおいて上記の賞をいただけたことは、私にとってまことにOnce in a lifetime honorでした。同時に、これまで歯科補綴学と高齢者歯科学の臨床と研究についてご指導いただいた恩師と諸先輩、また今まで一緒に仕事をしてくれた新潟大学と大阪大学の同僚への感謝の気持ちには言葉に尽くせぬものがありました。さらに、授賞式では、これまで交流してきた友人たちが世界中から祝福に駆けつけてくれたこと、長年支えてくれている家内が見守ってくれたこともうれしいことでした。

本賞は、基礎から臨床までの17の研究分野において、分野の発展に貢献する卓越した研究業績を挙げた会員を毎年1名選ぶと言うものです。新潟大学歯学部では、2012年に宮崎秀夫教授が私と同じGeriatric Oral Research部門で、2016年に山崎和久教授がBasic Research in Periodontal Disease部門で受賞されています。

受賞の対象となった私の研究テーマは、咀嚼・嚥下障害の客観的検査法と口腔内装置によるリハビリテーション技術の開発、さらには咀嚼機能の全身の健康との関わりです。これらは世界に先駆

けて超高齢社会に突入したわが国の歯学の中でも特徴的なテーマであり、これまでに医学、工学、食品学など、歯学以外のさまざまな異分野との交流に学びながら、堀准教授、安川講師らと少しずつ成果を重ねてきました。今後も、新潟大学を中心に、国内外の多くの研究者や企業と共に、一つでも研究成果を実用化し、社会に還元できるよう頑張っていきたいと思います。



写真：左からProf. Nitschke (Zurich Univ.)、家内、私、Prof. Nisizaki (Uruguay Univ.)。私の海外デビューはこの2人のProf. のおかげでしたが、Prof. Nisizakiは本年1月に亡くなられ、Londonでの再会が最後となりました。

日本歯科医学教育学会第16回優秀論文賞受賞報告

歯学教育研究開発学分野・歯科総合診療部 藤井規孝



この度、2018年7月に郡山市で開催された第37回日本歯科医学教育学会学術大会・総会におきまして2017年度に同学会誌に掲載された「新潟大学歯学部における臨床能力評価」(33巻：4-11)が第16回同学会優秀論文賞を受賞致しました。すでに何度か報告されているとおり、本学歯学科の学生は5年次から6年次にかけて担当医の一人として実地に歯科医療を学ぶ診療参加型の臨床実習を履修しており、この論文の内容は学生が臨床実習を通じて身につけた臨床能力を確認するための評価システムについてまとめたものです。診療参加型臨床実習は大変高い教育効果をもつ反面、学生や指導教員には並々ならぬ努力や苦勞が求められ、なによりも実習にご賛同くださる多くの患者さんのご協力なくしては成り立ちません。また、様々なことに質の保証が求められる現代において、このような臨床実習を伝統的に実施することは決して簡単ではありません。今回の受賞が少しでも日頃お世話になっているすべての方々への恩

返しになれば幸いです。

この学会では過去にも優秀論文賞を2016度(第14回)：奥村暢旦先生、2017年度(第15回)：佐藤拓実先生、システム開発賞を2005年度(第3回)：魚島勝美先生、2016年度(第14回)：小田陽平先生がそれぞれ受賞しており、本学の臨床教育は対外的に高く評価され、大いに注目されていると感じています。特に2つのシステム開発賞と今回の受賞は本学臨床実習の運営コンセプトである“ACCEPT project”を支える3つの柱でもあるため、これらの結果のすべてを自信につなげ、本学臨床教育のさらなる充実を目指して努力しなければならないと考えています。最後に引き続き本学の臨床実習に対するご支援、ご理解、ご協力をお願いすると共に改めまして本学臨床実習に関係するすべての方々に厚く御礼申し上げ、稿を閉じたいと思います。ありがとうございました。今後とも、どうぞよろしくお願い致します。

The 3rd Japan-Korea Joint Symposium Best Poster Awardを受賞して

摂食嚙下リハビリテーション学分野
那小屋 公 太

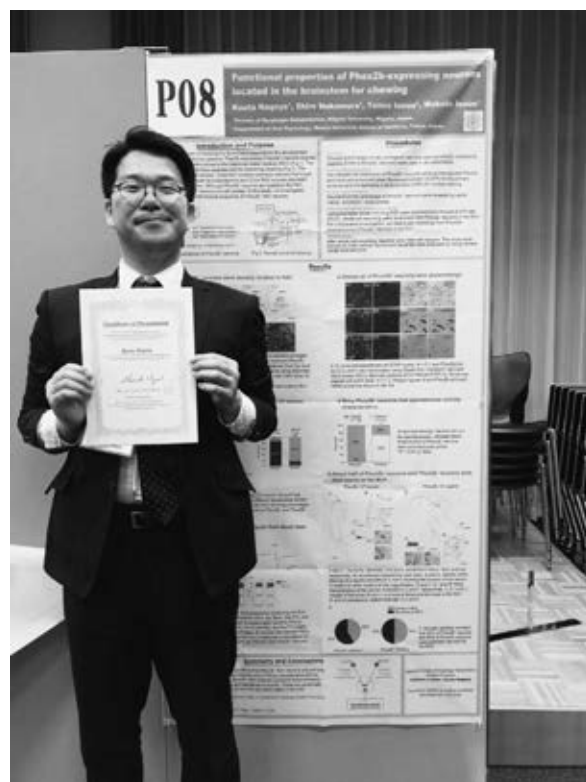
この度、平成30年9月7日に仙台で開催されました第24回日本摂食嚙下リハビリテーション学会学術大会・日韓ジョイントシンポジウムにおいて Best Poster Awardを受賞致しましたのでご報告させていただきます。「Functional properties of Phox2b-expressing neurons located in the brainstem for chewing.」という演題名にて、咀嚼運動制御に重要と考えられている領域に存在する転写因子Phox2bを持つニューロンの特性について発表致しました。

三叉神経運動核背側網様体（RdV）は、三叉神経運動ニューロンに軸索を送るプレモーターニューロン群が多数分布しており、顎運動制御に重要な役割を果たしていると考えられています。また、RdVには自律神経中枢の発生に関与する転写因子Phox2bを持つニューロン（Phox2b陽性ニューロン）が高密度に分布していることが知られています。そこで本研究では、RdVに分布するPhox2b陽性ニューロンとPhox2bを持たないニューロン（Phox2b陰性ニューロン）の電気生理学的及び形態学的特性を比較検討することを目的に実験を行いました。その結果、Phox2b陽性ニューロンとPhox2b陰性ニューロンは異なる性質を有しており、両ニューロンが協調して吸啜や咀嚼を含む摂食関連行動を調節している可能性が考えられました。

現在、RdVに分布するPhox2b陽性ニューロンに対して、摂食や睡眠・覚醒などの調節に重要な役割を果たしていることが知られている神経ペ

チドであるオレキシンがもたらす変調効果について研究を続けております。今後、咀嚼研究の発展に寄与できるような研究結果をご報告できるよう実験に邁進したいと思います。

最後になりましたが、発表に際しましてご助言頂きました井上誠教授をはじめとする摂食嚙下リハビリテーション学分野の皆様、実験をご指導頂きました昭和大学口腔生理学教室の井上富雄教授、中村史朗准教授にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。



日本顎関節学会 学会賞 学術奨励賞最優秀賞（覚道健治賞）を受賞して

顎関節治療部 高 嶋 真樹子

この度、日本顎関節学会雑誌に投稿した論文「顎関節症長期病脳患者におけるエゴグラムチェックリストを活用した自我状態の検討」が、平成30年度学術奨励賞最優秀賞（覚道健治賞）を受賞し、7月8日に福岡で開催されました日本顎関節学会第31回学術大会にて表彰を受けましたのでご報告させていただきます。

この論文は、平成23年に荒井良明先生の指導の元で奥村暢旦先生がデータ収集および日本顎関節学会で発表した内容になります。奥村先生が歯科総合診療部へ栄転された後、データは当医局のハードディスクの中で長期間大切に温かく守り続けられ、腐りかかるも、このたびついに論文として発表をすることができ、このような素晴らしい賞を受賞できたことを大変嬉しく思います。また、私ごとではありますが、この論文のおかげで顎関節学会専門医を取得することができ、2つの意味でかけがえのない思い出深い論文となりました。

顎関節症の症状を呈している患者は、身体的要因と心理社会的要因が絡み合っている事が多く、そのような場合には、顎関節症の症状に対する治療だけではなく、心理・精神的な要因へのアプローチすることが重要となります。この論文では、患者さんの自我状態、すなわち思考、感情、行動パターン、生き方や対人関係の持ち方の傾向などが、顎関節症の病態期間にどのように影響を及ぼしているか、エゴグラムチェックリストという性格分析方法を用いて調査しました。その結果、自己否定および交流回避を特徴とする自我状態を示し、さらに性別が女性であることが、6か

月以上の病脳期間に影響を与えていることが明らかとなりました。本論文が顎関節症治療に携わる多くの先生方の臨床への一助になるのではないかと考えております。

最後に、本研究の遂行にあたり、御指導を賜りました顎関節治療部部長の高木律男教授ならびに荒井良明先生、奥村暢旦先生、顎関節診療班の先生方、論文作成にあたり統計分析に御尽力頂きました予防歯科学分野の濃野要先生にこの場をお借りして感謝申し上げます。



平成24年度 日本顎関節学会 会場近くにて
(筆者は右から2番目、河村篤志先生撮影)

第11回日本総合歯科学会学術大会最優秀ポスター賞 受賞報告

歯科総合診療部 研修歯科医 阿部 朋子

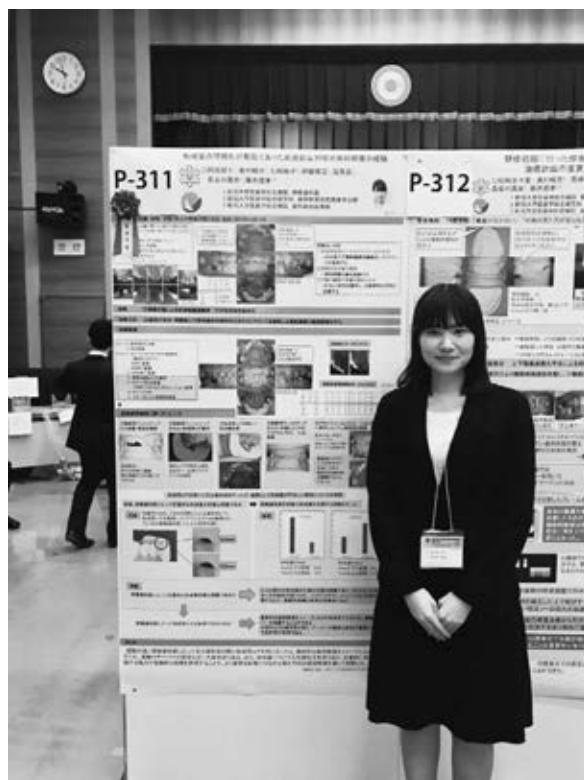
この度、2018年10月に鹿児島で開催されました第11回日本総合歯科学会におきまして最優秀ポスター賞を受賞しましたので、ご報告致します。

歯科総合診療部の研修歯科医は毎年この学会に参加する機会をいただいております、今年は6名の研修歯科医がポスター発表を行いました。

私の発表演題は「形成量の可視化が有効であった前歯部反対咬合歯冠修復の経験」です。前歯部反対咬合のためクリアランスの確保が困難な上顎前歯部に形成確認用コアを用いて歯冠修復を行った症例です。形成確認用コアを用いるなど自分なりの工夫を行いましたが、最終補綴物合着時にクリアランスが不足してしまい、合着後に対合歯で咬合調整を行う必要が生じてしまいました。この問題点を考えた結果、私の形成量の目測がそもそも誤っていたのではないかと結論になりました。そこで「研修歯科医にとって定量的な形成量の目測は困難である」という仮説を立てて簡単な検証を行いました。方法は切縁0.5mm、0.8mm切削した人工歯を用いて、形成用コアを装着しクリアランスが1mm確保されているか同期の研修歯科医17名に回答してもらうというものです。結果は、0.5mmでも4名、0.8mmでは11名が1mm以上であると誤認していました。やはり我々研修歯科医には目視で0.1mm単位の形成量を定量的に把握することは困難であり、他の客観的な指標も併用することが、エラーの少ない診療につながるのではないかと感じました。今回の症例を

通して臨床能力のレベルアップの必要性を痛感しましたので、今後も研鑽をつんでいきたいと思えます。

最後になりますが、藤井規孝教授、本発表をご指導いただきました指導医の奥村暢旦先生、歯科総合診療部の先生方、学会準備のサポートをしてくださった臨床研修センターの皆様、学会準備に協力してくれた同期の研修歯科医の皆に、この場を借りて深く感謝申し上げます。



5th International Conference on Food Oral Processing—The Royal Society of Chemistry Food Group Award 受賞報告

包括歯科補綴学分野 大学院4年 大川 純 平

この度、平成30年7月にイギリスのノッティンガムで開催されました5th International Conference on Food Oral Processingにおいて、The Royal Society of Chemistry Food Group Awardを受賞いたしましたのでご報告させていただきます。Food Oral Processingは、食品摂取について多方面から議論を行う学会として隔年で開催され、口腔生理学や摂食嚥下リハビリテーション学、口腔解剖学、食品科学、栄養学などさまざまな分野からの研究者が集まります。

私は今回、「Impact of Masticatory Performance and Chewing Strokes on Retro-Nasal Aroma」という演題でポスター発表させていただきました。レトロネーザルとは、咀嚼された食塊から放出された香りが咽頭から鼻腔へと流れて感知される経路のことです。例えば、鼻をつまんで食事をするとう味が感じにくくなるように、このレトロネーザルは「美味しさ」に影響を与えています。

我々は、咀嚼能力テストのために標準化されたグミゼリーを用いて咀嚼能率の測定を行っております。咀嚼能率の向上によって食品をより効率良く粉碎でき、嚥下や消化吸収に良い影響を与えられていると考えられていますが、レトロネーザルについての研究はあまりなされておりません。今回、グミゼリー摂取時の香りの強さを測定し、咀嚼能

率・咀嚼回数とレトロネーザルとの関係を明らかにするため研究を行いました。

本研究から咀嚼能率が高いほど、また咀嚼回数が多いほど、食品摂取時においてより多くの香りを放出していることが認められました。「よく噛む・よく噛める」ことが「美味しい食事」を行うのに重要な機能であることを示せたと考えています。今後は、食品の噛み方・飲み方によって、どのような影響を与えるかを研究していきたいと考えています。

最後になりましたが、今回の発表にあたり、ご指導いただきました小野高裕教授、堀一浩准教授、ならびに研究にご協力していただけました方々に心から厚く御礼申し上げます。



第61回 日本顎口腔機能学会 優秀賞を受賞して

包括歯科補綴学分野 児玉匠平

この度、2018年9月29-30日に日本歯科大学で開催されました日本顎口腔機能学会第61回学術大会にて優秀賞を受賞することができました。演題は「液体へのとろみづけが舌運動と舌圧発現様相に及ぼす影響」というものです。内容を簡単に説明させていただきます。舌の動きは緻密でダイナミックなものですが、口腔内の事象ですのでこれまでその動態を観測・測定することは困難でした。そこで近年導入した電磁アーティキュログラフという、舌の表面に直接センサを貼付することで舌運動をモーションキャプチャすることが可能な電磁アーティキュログラフという装置を使って研究していくことになりました。一方で、我々の教室では舌と口蓋の接触圧である舌圧測定を用いた研究が盛んであり、舌機能評価方法として有用であります。しかしながら舌圧は舌と口蓋が接触した時間のみの評価であり、実際の舌の運動自体を評価することはできません。そこで舌運動を解析可能な電磁アーティキュログラフと舌圧測定を併用することとしました。すなわち、口蓋接触時は舌圧で、口蓋接触の前後の舌運動は舌運動解析で評価を行うことでより詳細な舌機能解析を行う、という趣旨の研究になります。

私は普段の外来の診療では義歯を扱うことが多いのですが、舌機能と義歯は非常に関わりが深く、今回の研究で舌運動をたくさん見てきた経験は臨床の場でも生かされていると感じておりま

す。臨床と研究とが相互にリンクしており、臨床での疑問がそのまま研究テーマとして繋がっていることは私にとって非常に高いモチベーションとなりました。現状ではまだ健常者での評価の段階ではありますが、将来的には臨床に直接役に立つような内容に発展していければと考えております。

今回が私の初めての学会発表であり、まだまだ研究についての経験・知識が足りない中での発表でした。発表の順番も最後の方でしたので、発表を終えた熱も冷めないままに受賞の知らせを受けた時はただただ驚くばかりでした。丁寧にご指導いただきました指導医の藤原先生、優しくご指導いただきました小野先生、堀先生をはじめ多くの先生方に助けていただいたお陰です。この場をお借りして感謝申し上げます。



第11回日本総合歯科学会学術大会優秀ポスター賞 受賞報告

歯科総合診療部 研修歯科医 山中 秀 敏

この度、2018年10月に鹿児島で開催されました第11回日本総合歯科学会学術大会におきまして優秀ポスター賞を受賞しましたので、ご報告致します。

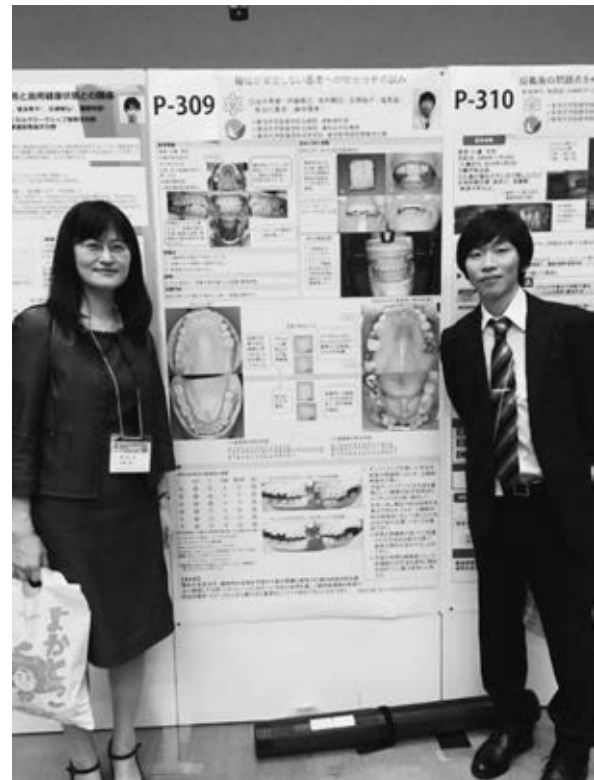
私は学会に参加すること自体初めての経験で、発表当日は会場の雰囲気もありとても緊張しましたが、同期の研修歯科医達とお互いに雑談したりすることで緊張をほぐすことが出来ました。発表の際も他病院の先生たちに囲まれながらの発表でしたが練習を思い出してなんとか乗り切ることが出来ました。今回の学会では口頭発表、質疑応答を通して、自分の担当した症例についての理解を深めることができ、大変勉強になったと思います。

今回受賞した演題名は、「顎位が安定しない患者への咬合分析の試み」です。様々な要因から咬頭嵌合位が決まらない有歯顎者において、これを検討する事を目的として咬合分析を行ったという症例です。口腔内所見と患者習慣からは酸蝕が疑われ、恐らくこれを原因として咬合接触部位が消失し、咬頭嵌合位が安定しなくなってしまったといった症例でした。

今回の治療は研修歯科医の身としては非常に難しい試みでしたが、最初にしっかり診査を行うことで現時点での患者さんの問題点を見極め、そのうえで診断・治療を行っていく事が長期間安定した咬合状態を保つために重要であるということを知ることが出来ました。今回の受賞を励みに、今後

もより一層研鑽を重ねて参りたいと思っております。

最後になりましたが、発表直前までとても熱心にご指導いただいた藤井先生、指導医の伊藤先生をはじめ歯科総合診療部の先生方、学会準備のサポートをしてくださった臨床研修センターの皆様、発表までの間協力してくれた同期の研修歯科医の皆に、この場を借りて深く感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。



新潟歯学会報告

平成30年度 新潟歯学会例会報告

平成30年度新潟歯学会集会幹事
顎顔面口腔外科学分野
永田昌毅

平成30年度第1回例会は6月30日（土）に歯学部講堂で開催致しました。17題の一般口演と、教授就任講演として、新潟大学大学院医歯学総合研究科 口腔病理学分野 田沼順一 先生に「液状化検体細胞診を用いてモデル動物へ応用させた口腔前癌病変に対する新規アプローチ」と題するご講演をいただきました。学外7名を含む122名の参加者数を数えました。

平成30年11月10日（土）には平成30年度新潟歯学会第2回例会を歯学部講堂で開催致しました。学外2名を含む111名の会員にご参加をいただき、一般口演17題の発表が行われました。

総会、第1回例会、第2回例会において、お忙しい中、座長をお引き受けいただいた先生方をはじめ演者の方々や参加いただいた会員の皆様のご協力により、平成30年度の新潟歯学会を滞りなく終了できましたことを、この場をお借りして御礼申し上げます。

平成31年度も引き続き顎顔面口腔外科学分野が集会係を担当させていただきます。第52回新潟歯

学会総会は4月13日（土）に開催予定です。新潟歯学会に関する詳しい情報につきましては新潟歯学会ホームページをご覧ください。



写真2 第一回例会 教授就任講演
田沼順一 先生



写真1 第一回例会 会場



写真3 第二回例会 会場

これからの超高齢社会に求められる先端歯科医学研究 Dental and orofacial advanced research required in a super aged society -Now and Future-

新潟大学大学院医歯学総合研究科摂食嚥下リハビリテーション学分野
井上 誠

新潟大学歯学部では、さくらサイエンスプランの支援により、2019年2月12日から2月21日まで、台湾陽明大学より3名、タイタマサート大学より4名（他にシニアメンバー2名、来日経験者1名）の若手臨床家と研究家を招へいし、臨床見学、セミナー受講、実験見学を実施しました。

さくらサイエンスプランとは、日本・アジア青少年サイエンス交流事業として産学官の緊密な連携により、優秀なアジア地域の青少年が日本を短期に訪問し、未来を担うアジア地域と日本の青少年が科学技術の分野で交流を深めることを目指して日本科学技術振興機構が行っている事業です。本事業の推進により、アジア地域の青少年の日本の最先端の科学技術への関心を高め、日本の大学・研究機関や企業が必要とする海外からの優秀な人材の育成を進め、もってアジア地域と日本の科学技術の発展に貢献することを目的としています（<https://ssp.jst.go.jp/index.html>）。

今回は過去2回を踏襲し、さらに口腔生理学分野の協力も得て、新潟大学で行われている、これからの歯科医療に必要な様々な歯科医学研究を見学・体験する機会をもってもらうためのプログラムとして実施されました。過去2回の内容はこちらでご覧になれます（<http://www5.dent.niigata-u.ac.jp/~dysphagia/sakura.html>）。

プログラムは、全員が来学した2月12日にオリエンテーションを実施し、翌日の2月13日よりスタートしました。

2月13日は、摂食嚥下障害の臨床がテーマでした。超高齢社会において高齢者を中心とした摂食嚥下障害の現状と一般的な臨床内容、さらに歯科医療が携わるべき口腔機能を起点とした臨床のあり方についての講義を行いました。その後、参加者を2班に分けて、嚥下造影検査と嚥下内視鏡検査を体験してもらいました。自らが被験者となって嚥下を可視化する実習体験は初めてのことであり、皆が大変興味を示してくれました。

2月14日は、咀嚼を知る講義と実習がテーマでした。最初に、世界に先駆けて保険診療の一部として行われている咀嚼能率測定の体験実習を行いました。グミゼリー30回咀嚼と10回咀嚼の違いから、咀嚼障害者の食塊形成の悪さ、嚥下への負担を疑似体験してもらいました。午後は、歯科補綴における機能の重要性、摂食嚥下リハビリテーションにおける補綴的アプローチについての講義が行われました。

2月15日は、ヒト実験をテーマに咀嚼・嚥下機能に関わる神経筋機構について、筋電図ならびに嚥下造影検査を用いた生理学的な実験を体験してもらいました。午前中に筋電図記録に関する導入

説明を行った後、経頭蓋磁気刺激装置を用いて大脳皮質誘発性の運動誘発電位の評価体験を実施しました。午後は、食物の咀嚼嚥下時における咬筋および舌骨上筋群の筋活動記録について、嚥下造影検査との同時記録による実習体験を行いました。歯学部では、ヒトを対象とした生理学研究はそれほど盛んではありません。この3日間の体験を契機に、今後歯学における臨床生理学の研究にもより多くの研究者、臨床家が集ってくれることを期待しています。

この日の夜には、参加者全員を集めた懇親会を開催しました。2日間の実習を通してすっかり仲良くなった皆さんは、お酒が入るとともにさらに盛り上がり、それぞれの国や研究の話だけでなく、文化交流という点でも大変有意義な時間となりました。

休日をはさんで、翌月曜日の2月18日は、動物実験の見学と嚥下造影検査・食の支援ステーション見学の日でした。午前は、動物実験における嚥下誘発および同定方法の説明や末梢への機械・化学・電気刺激による嚥下誘発実験の見学を行いました。その後2班に分かれて、嚥下造影検査の現場と食の支援ステーションの見学を行いました。嚥下造影検査では、デモによる検査とは異なり実際の患者の検査場面を見学することで臨場感を味わい、加えて診断場面にも立ち会ってもらいました。食の支援ステーション見学では、病院内に介護食の試食・介護食器具の試用、口腔ケア用品の使用体験ができる場所があるということで、皆さん目の色を変えて見学していました。

2月19日は再生医療がテーマでした。口腔領域におけるTissue Engineeringの特殊性について触れた後、新潟大学医歯学総合病院で実施している培養口腔粘膜作成方法と移植法の基本を講義しました。その後、細胞培養室に移り、前日に複数の患者さんから採取された口腔粘膜組織を用いて、ルーティーンワークとして行われている患者

の口腔粘膜上皮細胞の培養立ちあげを見てもらった後、各大学の代表者1名により実地で細胞培養を体験してもらいました。

2月20日は、口腔機能に関する基礎と臨床について、歯周病と痛みをテーマとした講義と実習を行いました。午前のセッションでは、嚥下障害の原因菌となる口腔内細菌のコントロールのためにも口腔衛生管理が必要となることを、症例を交えながら講義しました。基礎研究の紹介を行った後に、実際に参加者の口腔内細菌数を測定するハンズオンを行いました。国や専門は違いますが、歯周病への認識は同じであり、超高齢社会における歯科医の役割を全員で共有することができました。午後のセッションでは痛みを知る！をテーマに痛みの脳メカニズムに関する講義の後、痛みのモデル動物を用いた行動学的な実験と痛み刺激に伴う脳での活動電位を観察・定量化する電気生理学的な実験を経験してもらい、得られた結果と痛みメカニズムの関連性を議論しました。

最終日である2月21日の午前はドライマウスの講義と実習を行いました。実習では、ドライマウスの治療に用いられる漢方および保湿剤の試用や唾液腺マッサージの手技についての体験を行いました。

これでプログラムは終了となり、最後に12時から閉講式を行いました。参加者から一言ずつのコメントをもらい、全員で記念写真を撮って解散となりました。タイトなスケジュールの中、参加者は大いに新たな臨床、研究分野の体験を楽しみ、また一生懸命に参加してくれたことで忙しくも充実した日々を過ごすことができました。本プログラムを契機として、さらなる交流や共同研究推進への足掛かりができたと確信しています。

最後に、本プログラム実施の機会を与えた頂いたさくらサイエンスプラン、そして本プログラムの実施を支えて頂いた多くのスタッフの皆さんには深く感謝申し上げます。



写真1 2月13日講義風景



写真2 2月13日嚥下内視鏡検査の体験



写真3 2月15日経頭蓋磁気刺激の体験



写真4 2月18日動物実験の見学



写真5 2月19日Wetlab見学



写真6 2月21日
全日程終了後に参加者全員で記念撮影

歯学部長の選考について

前田健康歯学部長の任期満了に伴い、高橋姿学部長は歯学部教授会から推薦のあった2名の歯学部長候補適任者の中から、前田健康歯学部長を再任しました。これに伴い、以下のように歯学部執行部人事が発表されました。

歯学部執行部人事（2019. 4. 1～2021. 3. 31）

歯学部長 前田 健康

副学部長（学務） 大内 章嗣（評議員）

副学部長（副学系長・歯学科長） 小野 高裕（評議員）

副学部長（研究・施設） 大峽 淳

副学部長（国際交流・広報） 魚島 勝美

学部長補佐（総括） 井上 誠

学部長補佐（研究） 照沼 美穂

学部長補佐（国際交流） 小川 祐司

学部長補佐（施設・広報） 多部田康一

口腔生命福祉学科長 葭原 明弘

医歯学図書館長 寺尾 豊

教授人事について

予防歯科学分野宮崎秀夫名誉教授、歯周診断・再建学分野吉江弘正名誉教授、口腔保健学分野福島正義教授の後任として、それぞれ小川祐司先

生、多部田康一先生、吉羽邦彦先生が選考され、2018年10月1日付で発令されました。

名誉教授の訃報

新潟大学名誉教授齊藤力先生が、病气療養中のところ、2019年1月27日にご逝去なさいました。享年71歳。齊藤力先生は2006年11月から組織再建口腔外科学教授として本学に赴任され、2013年3

月に定年退職され、4月から母校の東京歯科大学で客員教授として御活躍されていました。新潟大学在職中には医歯学総合病院総括副院長、歯学部副学部長、評議員をお務めになられました。

世界大学学術ランキング2018について

高等教育機関をさまざまな指標によって順位付けした国際的な大学ランキング、世界大学ランキングがマスコミを賑わせています。大学ランキングで有名なものに「QS世界大学ランキング」(Quacquarelli Symonds : QS)、「THE世界大学ランキング」(The Times Higher Education - Thomson Reuter : THE-TR)、「世界大学学術ランキング」(Academic Ranking of World Universities : ARWU)があります。この中で、世界大学学術ランキングは上海交通大学（中国）の高等教育研究所・世界一流大学研究センターが毎年発表している科学研究の業績を評価している

大学ランキングです。2007年からは分野別ランキングが公表され始め、2017年からは歯学分野 (Dentistry & Oral Sciences) が公表されています。新潟大学歯学部は2017年には東北大学と同じ世界51-75位（国内4位）にランクされていましたが、2018年版では世界38位（国内3位）に上昇しました。国内2位の（世界30位）との差はわずかですので、より上位にランクされるよう研究活動の活性化をお願いします。(http://www.shanghairanking.com/Shanghairanking-Subject-Rankings/dentistry-oral-sciences.html)

平成30年度科学研究費採択状況について

1月25日の全学連絡調整会議で平成30年度科学研究費採択状況が公表されました。歯学系、歯学総合病院（歯科系）の新規採択率はそれぞれ40.3%、31.6%、課題保有率（新規＋継続）は71.0%、52.2%、基盤B以上の課題割合（新規＋継続）は21.5%、0%でした。なお、歯学系の新

規採択率は全学1位でした。

文部科学省が公表している中区分採択件数上位10機関ランキング（口腔科学およびその関連分野）では全国5位（H30年度の新規採択の累計数）でしたが、1課題あたりの配分額は全国2位でした。

平成30年度科学研究費「国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B）」の採択について

日本学術振興会は国際研究力強化のため、2018年度より国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））の公募を開始しました。今年度の本種目の採択件数は234件と厳しい審査でしたが、口腔生化学分野の照沼美穂教授が研究題目「アルコール摂取がもたらす認知機能障害の分子基盤」で見事採択されました。この種目の採択は全国歯

学系で4件、新潟大学では1件の快挙となりました。なお、従来の国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）は国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（A））に移行しましたが、この種目にはこれまで、多部田康一教授、加来賢准教授、堀一浩准教授、前川知樹助教が、また今年度には高橋直紀助教が採択されています。

アメリカ・ワシントン大学歯学部（シアトル） との部局間交流協定締結について

歯学部ではグローバル人材育成の目標の下、国際ネットワークの構築を進め、教員の学術交流、学生の交換留学を進めています。この度、予防歯科学分野小川祐司教授のご尽力により、アメリカ・ワシントン大学歯学部と部局間交流協定の準備が整い、前田歯学部長、事務員2名がシアトル市を訪問し、2018年10月31日に部局間交流協定を締結

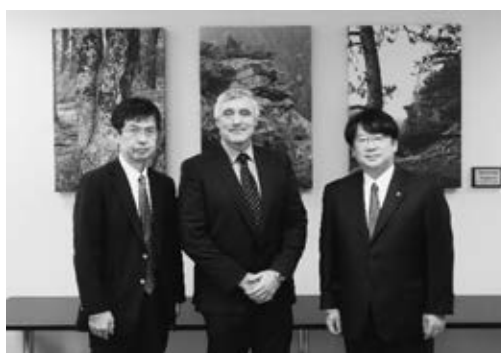
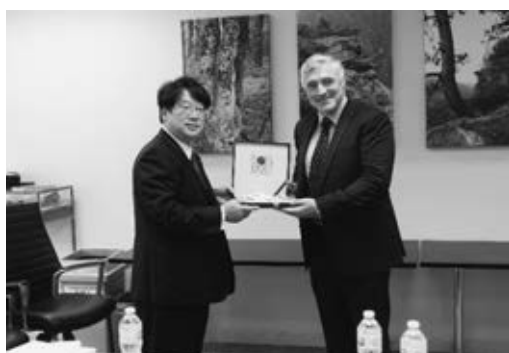
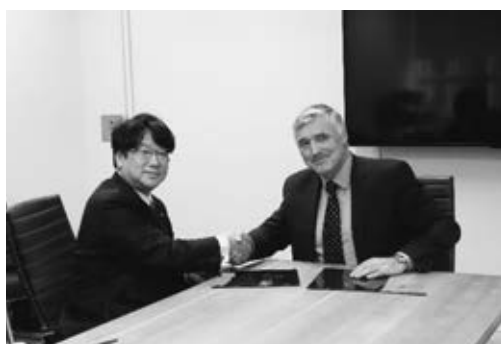
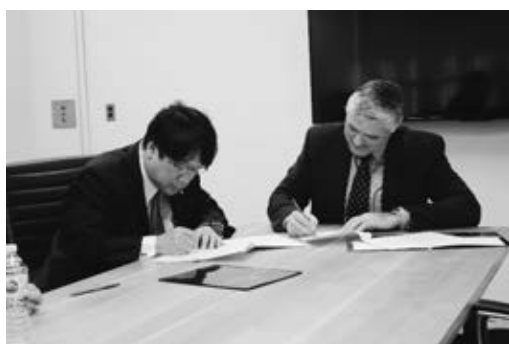
しました。アメリカ・ワシントン大学歯学部は世界大学学術ランキング（上海アカデミックランキング）の歯学部門で世界3位にランキングされている世界で有数の歯学部です。学生交流に加え、特に国際口腔保健学の分野で共同研究のさらなる進展が期待されます。ワシントン大学歯学部にはこれまでに前田歯学部長が研究留学しています。



カナダ・トロント大学歯学部との 部局間交流協定締結について

歯科麻酔学分野瀬尾憲司教授のご尽力により、カナダ・トロント大学歯学部と部局間交流協定の準備が整い、前田歯学部長、瀬尾教授、事務員2名が2018年11月2日にカナダ・トロント市を訪問し、部局間交流協定を締結しました。カナダ・トロント大学歯学部は世界大学学術ランキング（上海アカデミックランキング）の歯学部門で世界20

位にランキングされているカナダで有数の歯学部です。学生交流に加え、トロント大学にはこれまでに山村、瀬尾両教授、柿原助教が研究留学しており、共同研究のさらなる進展が期待されます。カナダにおける部局間交流協定締結校としてはブリティッシュコロンビア大学に次いで2校目となります。



タイ・パヤオ大学歯学部との 部局間交流協定締結について

この度、タイ・パヤオ大学歯学部から部局間交流協定締結の強い要望があり、前田歯学部長、魚島副学部長（国際交流担当）、野杵教授が2018年11月20日にタイ・パヤオ市を訪問し、部局間交流協定を締結しました。パヤオ大学歯学部は創立後

間もない歯学部で、この部局間交流協定には学生交流に関する事項も含むとともに、教育スタッフの人材養成への協力が期待されています。また、12月にはミャンマー・ヤンゴン歯科大学との部局間交流協定の更新が行われました。



ペルー・南部科学大学歯学部との 部局間交流協定締結について

硬組織形態学分野に国費留学生として在籍していたAngela Quispe-Salcedo博士からの申し出により、ペルー・南部科学大学歯学部 (Facultad de Ciencias de la Salud, Universidad Científica del Sur) と部局間交流協定締結の準備が整い、前田歯学部長、魚島副学部長 (国際交流担当) がペルー・リマ市を訪問し、2019年2月1日に部局間交流協定を締結しました。南部科学大学歯学部は設立が2008年と新しい私立大学歯学部です。現在歯学部キャンパスをリマ市郊外に新

築移転する予定しています。ペルーは親日的で日本への留学希望者も多く、また学生交換も強く希望しています。南アメリカ大陸の部局間交流協定締結校はブラジル2校に続くもので、今後の交流に期待が寄せられます。

この交流締結により、歯学部姉妹校は45校となりました。なお、現在、タイから1校、インドネシアから3校、韓国から2校の部局間交流協定締結の申し出があります。



国際共同シンポジウムの開催について

文部科学省の補助を受け、2019年2月10～13日にタイ・プーケット、2019年3月9～10日に台湾・台北市で、国際共同シンポジウムが開催されました。

プーケットシンポジウムは、本学歯学部とタイ・コンケン大学歯学部 (大学間交流協定締結校) との共催で開催され、ASEAN諸国、オーストラリアからの参加を得て、活発な研究発表が行われるとともに、歯学部長会議が開催され、今後の研究者・学生交流について意見交換が行われま

した。

台湾シンポジウムは昨年度に引き続き、新潟大学歯学部と台湾・国立陽明大学歯学部との共催で、台湾の7歯科大学・歯学部の参加を得て、歯学研究のフロントランナーによる基調講演、若手研究者による研究発表が行われ、若手研究者のプレゼンテーション能力の向上が図られるとともに、今後の国際共同研究の進展に議論が深められました。

部局間交流協定校からの 特別講演招聘について

部局間交流協定締結校であるミャンマー・ヤンゴン歯科大学（7月）およびインドネシア・エランガ大学歯学部（10月）から、学術特別講演を

依頼され、ミャンマーでは前田歯学部長と田沼教授が、インドネシアでは前田歯学部長が招待講演を行いました。

ミャンマー・ヤンゴン大学歯学部 への医療チーム派遣

新潟大学歯学部はミャンマー・ヤンゴン歯科大学と部局間交流協定を締結していますが、Thein Kyu前学長、Shwe Toe学長より、ミャンマーで患者の多い口唇口蓋裂患者に対する医療支援が要望されていました。昨年度に引き続き、顎顔面口腔外科学分野の高木律男教授と歯科麻酔学分野

の瀬尾憲司教授による医療チームがミャンマーでの医療支援活動を行いました。ミャンマーでは医薬品等が不足しており、いろいろな分野からの支援を必要としていますので、皆様方のご理解とご協力をお願い致します。

留学生交流支援制度（短期受け入れ及び 短期派遣プログラム）の採択について

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）が公募していた留学生交流支援制度の採択結果平成31年度分）が通知されました。歯学部から短期派遣事業（短期研修・研究型）として応募していた3プログラムすべてが採択されました。なお、本

事業による奨学金受給には各種制限が設けられており、特に成績不良の学生には奨学金を支給できないこととなりましたので、短期留学希望者は成績向上に努めるようお願いします。

顎顔面放射線学分野・歯科放射線科

顎顔面放射線学分野 教授 林 孝文

1. はじめに

私どもの顎顔面放射線学分野は、新潟大学歯学部歯科放射線学講座として昭和55年（1980年）8月に設置されました。初代教授には新潟大学医学部から伊藤壽介先生が着任され、平成14年（2002年）4月に伊藤教授が退官され同年の11月に二代目教授として私が就任いたしました。平成13年（2001年）4月に医歯学総合研究科への改組に伴い、歯科放射線学講座から顎顔面放射線学分野に名称変更となりました。一方、診療科については、歯科放射線科が昭和55年（1980年）4月に設置されましたが、平成15年（2003年）10月の医学部附属病院と歯学部附属病院との医歯学総合病院への統合に伴い、画像診断・診療室に名称変更となり、平成24年（2012年）11月の外来診療棟開院時には口腔外科系歯科（診療科）・歯科放射線科（診療室）として現在に至っています。

平成31年1月現在のスタッフは10名で、教員7名（教授1、准教授1、講師1、助教4）、医員1名（社会人大学院生）、大学院生2名（うち1名は社会人大学院生）です。歯科における放射線学に関する教育、研究、診療ならびに社会的活動を精力的に行っており、その内容としては診断部門と治療部門に大別できます。

2. 教育の概要

歯学科2年生・3年生に対しては放射線学や解剖学の基礎的事項を、歯学科4年生に対してはこれらの臨床的事項を座学主体に行っています。歯学科5年生に対しては統合科目やPBLといった分野横断的な授業に参画し、さらに6年生にかけて、歯科放射線学の実技に関係したポリクリと臨床実習を担当しています。特に、講義や実習のた

めのwebサイトを設けて、学生の予習・復習や確認、自己学習に配慮した授業形態をとっています。加えて、歯学科・口腔生命福祉学科1年生に対してはスタディスキルズの一部を担いつつ、歯学科2年生のインターネットチュートリアルや口腔生命福祉学科の演習・実習の一部を担い、歯学教育全般に幅広く関与しています。大学院生への教育としては、時間と場所の制約を排したオンライン学習システムを導入しつつ、研究課題に即した柔軟な対応を行っており、学位研究に結び付けています。こうしたシステムは社会人大学院生にも積極的に門戸を広げることに役立っています。

3. 研究の概要

診断部門では、顎顔面領域の画像診断全般をカバーしつつ、特に患者の生命予後に直結する口腔がんや頸部リンパ節転移の診断精度向上に研究テーマの力点を置いています。また、顎骨の炎症性疾患、顎変形症や顎関節症などの頻度の高い疾患における画像診断の有用性の検証も行っています。モダリティベースでは、MRIにおけるT2マッピングや拡散強調画像、CTにおけるダイナミック撮影、超音波診断におけるドプラやエラストグラフィの応用など独自の取り組みを行っています。特に、超音波診断の歯科領域のさまざまな疾患への臨床応用を検討しつつ、エックス線検査の次世代として広く普及を目指す活動を行っており、webサイトの整備や実技研修会の開催などの学習リソースの提供を進めています。加えて、検査に伴うエックス線被曝に関する検討や診療ガイドラインの策定などを通じて、患者にとって最適な診療について追及しています。直近では、教授の林 孝文が大会長として2018年1月25～26日

に第36回日本口腔腫瘍学会総会・学術大会を新潟市で開催しました。

治療部門では、頭頸部癌等に対する放射線治療を受ける患者における有害事象の予防のために、治療前や治療中、治療後にわたって口腔管理による摂食機能や生活の質の維持向上を目指したさまざまな取り組みを行っています。特に、放射線治療を確実に完遂するための口腔衛生状態の管理手法やさまざまな装置の工夫について、基礎的・臨床的見地から多様なアプローチを進めています。直近では、講師（病院准教授）の勝良剛詞が大会長として2018年12月1～2日に日本がん口腔支持療法学会第4回学術大会を新潟市で開催しました。

学内外のコラボレーションとしては、歯学部では口腔外科や矯正学などの臨床分野、解剖学や病理学などの基礎分野とさまざまな共同研究を行ってきており、医学部の放射線医学や保健学科放射線技術学などの分野との連携はもとより、新潟大学以外の大学や病院、企業との連携体制をとっています。

4. 診療の概要

診断部門では、エックス線写真、CT、歯科用コーンビームCT、MRI、超音波診断等の画像診断モダリティを用いて、各診療科からの依頼を受け、顎顔面領域の疾患の診断、治療方針決定、治療後の経過観察のための画像診断を行っています。モダリティとしては、医歯学総合病院において、単純エックス線検査ではパノラマ3台、デンタル3台、セファロ1台、CT検査では全身用CT装置3台、歯科用コーンビームCT装置1台（パノラマとの複合機）、MRI検査ではMRI装置3台、超音波検査では超音波診断装置3台（据置型1台、携帯型2台）を日常診療において利用しています（CTとMRIは医科と共同利用です）。

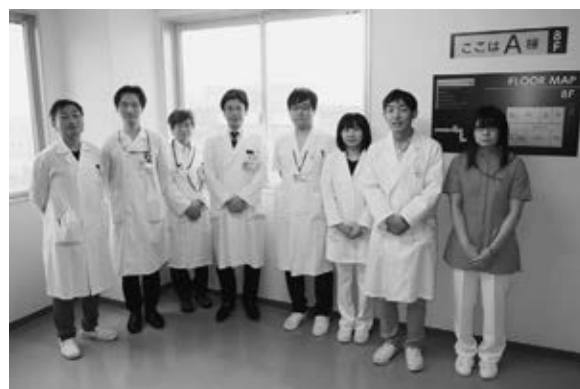
治療部門では、各診療科のがん治療医、看護師、薬剤師と連携しつつ、歯や口腔と関連する副作用対策を行うとともに、化学療法や放射線治療中だけでなく、治療後の生活の質の維持のための歯科口腔管理を行っています。

初代教授の伊藤壽介先生は、着任前には医学部

放射線科に所属されており、在職中は放射線医学教室や放射線部との間で、研修や教育、研究、診療においてさまざまな行事や人事交流が活発に行われてきました。教室には多くの放射線科医や脳外科医、神経内科医が入り交わり、旧歯学部6階の検討会室での連日深夜までのカンファレンスは、今となっても語り草となっているところでもあります。平成5年（1993年）4月から継続的に数名が医学部放射線科にて放射線治療の研修をさせていただき、現在の放射線治療患者の歯科口腔管理に結びついています。

5. おわりに

このたび、このような誌面にて当分野を紹介させていただく機会を頂戴しましたことに心より感謝申し上げます。今後とも顎顔面放射線学分野、歯科放射線科をどうぞよろしくお願いいたします。



分野構成員（2019年1月17日）



第36回日本口腔腫瘍学会総会・学術大会にて
（2018年1月25日）

口腔生理学分野の紹介

口腔生理学分野教授 山村 健介

1. はじめに

口腔生理学分野は歯学部口腔生理学講座として1966年に開設されました。大学院重点化に伴う改組により、名称が2001年に顎顔面機能学分野に、2005年に口腔生理学分野に変更となりました。初代教授の小林庄一先生、第二代教授の島田久八郎先生、第三代教授の山田好秋先生の後を継いで2009年から私が担当させていただいております。現スタッフである岡本圭一郎准教授と黒瀬雅之助教に加え、顎顔面口腔外科学分野からは中谷暢佑君、清水志保さんの両大学院生、藤澤博子さん、計良倫子さんの両社会人大学院生、歯科総合診療部の長谷川真奈特任助教とともに研究・教育活動に励んでいます。当分野で取り組んでいる教育と研究について私の私見を交えて述べさせていただきます。

2. 教育について

生理学は、身体のもつさまざまな機能の法則や意義、全身の機能との関連を明らかにする学問です。そこには細胞を構成する分子レベルから、細胞の集合体であり個体の構成要素である器官レベル、そして身体全体を意味する個体レベルまで様々な視点があります。近年の分子レベルの研究の進歩は目覚ましく、細胞機能を担う分子が次々と同定され、それらの機能も明らかになってきました。学ばなくてはいけない知識の量は、私が学生であった30年前とは比較にならないほど膨大で、30年前と変わらぬ授業時間内で、細胞から器官へ、器官から個体へと知識を有機的に繋いで個体全体を見渡す能力を培うことが困難な時代といえます。

このような背景の下で学生さんに伝えるべきことは、身体の構成要素としての細胞を見るミクロ的な視点と、身体全体を包括的に捉えるマクロ的な視点の両方をもって、身体という大きな森（小宇宙と表現されることが多いですが）の地図を描く能力ではないかと考えています。つまり、森の中の主要な道は熟知し、道のない場所に入り込んでも、位置関係を誤らない能力です。そのためには多面的な視点および知識が必要で、それを培うための教育方法にも多様性が必要であると信じています。

現在、講義では3名の教員それぞれが工夫を凝らし、各項目の知識の全貌を木に例えるとすれば、幹となる基本的な内容は動画素材などを活用し視覚にも訴えつつわかりやすく説明しつつ、細かな内容や最新の研究成果などはテーマを絞って深掘りしたり、症例を用いて病因や治療法の生理学的背景を説明することで、木から枝葉という視点での学びの促進も心がけています。特に口腔生理学では、臨床の先生方に講義を担当していただくことで臨床的な視点での学びの機会を多く設けるようにしています。一部の項目では症例シナリオを用いたPBLを行っています。これらの試みは、学生に生理学を身近に感じさせ、理解を促進させる上では効果があったと感じていますが、同時に生理学の教育だけでは包括的かつ先進的な歯科医療を提供できる歯科医師の育成という歯学部の目標を達成することが困難であることも実感しています。

歯学部で分野横断的な学年担当制が始まったことで、他の科目の先生が行っている教育の話や伺う機会が増加したことは、歯学部の教育を深化させる上で意義深いことです。それぞれの科目の先

生が工夫を凝らし魅力的な教育をされ、多様な教育がなされていると感じています。しかし、それぞれの科目で学んだ複数の木を森全体の適切な位置に配置し、森の地図を構築する過程は、今も尚それぞれの学生の自発的な努力に委ねられており、その過程の学習機会を多く与えることがこれから重要です。今年度からはじまった分野横断科目であるPBLはひとつの期待できる試みであると思います。



3. 研究について

生理学分野の教員は皆、神経科学を専門とし、電気生理学者としての長い経験を持っています。その経験をもとに、社会に還元できる成果を目指し、教員それぞれが複数のテーマを持ち研究に取り組んでいます。いくつかを列挙します。

1) ストレスが口腔顔面領域の痛みに及ぼす神経メカニズムの解明

長期間続く慢性的な痛みは人々を苦しめます。このような病的な疼痛を適切に管理することは生活の質の向上に重要ですが、その原因や病態のメカニズムに不明な点が多いため、治療困難かつ治療効果の個人差が大きいことが指摘されています。現代人が日常的に受けるストレスもその要因のひとつだと考えられています。岡本准教授はこれまでストレスモデルを用い、ストレス時には口腔顔面領域への痛み刺激に対する感受性が増大することと、その背景にある生体が本来兼ね備えて

いる痛みを制御する神経システムがストレスによって変調を受けることを解明してきました。現在は黒瀬助教らと本課題をさらに探求すべく、免疫組織学的手法並びに電気生理学手法の両面を用いて研究を行なっています。

2) 咀嚼や嚥下のメカニズムに関する研究

当分野が永年にわたりテーマとしている研究です。多くの方が食を楽しみ質の高い生活が送れる社会の構築を最終目的に、円滑な運動機能の遂行に関連する神経メカニズムを中心に研究を行っています。現在は、従来までの電気生理学的な手法に加えて、工学部との共同研究を行う中で機械学習を組み合わせることで、多面的な視点から「食べて飲む」機能を研究しています。当分野の黒瀬助教は新潟大学のコアステーションのメンバーの一人として、官能評価を運動様式から導き出すプラットフォームの構築を行っています。

3) ストレスに対する日本酒の効用の研究

2017年に日本酒に係る文化的・科学的な広範な学問分野を網羅する国際的な拠点の形成を目的として、「日本酒学」の構築について新潟県、新潟県酒造組合、新潟大学の間で連携協定を締結しました。この協定に基づき新潟大学では昨年4月に日本酒学センターが設置されました。当分野の岡本准教授はメンバーの一人として、ストレス誘発性の痛みに対する日本酒の効用を研究しています。既に本研究に関する成果の一部を学術誌に掲載しました。また昨年度末には日本酒学出前講義や市民公開講座を文部科学省などで実施しております。

4. 終わりに

ここに挙げた研究のほかにも、社会人大学院生それぞれがテーマを持ち課題に取り組んでいます。私は多くの人と出会い、その人たちとのコミュニケーションを通じて多くのことを学びました。たくさんの出会いの場とすべく口腔生理学分野の扉はいつも広く開けてあります。口腔生理学分野の研究に興味を持って下さった方、お気軽にご連絡下さい。

—「守破離」の教えを胸に刻んで—

組織再建口腔外科学分野教授 小林 正 治

2019年1月27日、組織再建口腔外科学分野前教授であられた齊藤力先生がご逝去されました。

昨夏から闘病されていたことは伺っていましたが、東京歯科大学水道橋病院では客員教授としてこれまで通り顎変形症の手術を担当されており、2018年12月14日には新潟大学全学教養講義「顔」の授業をされ、年末にも電話でお元気そうな声を聴いていたものですから、実際こんなに早く訃報を耳にすることは思ってもおりませんでした。言葉にならない寂しさを覚えます。

齊藤力先生は、2001年11月に東京歯科大学を退職して、新潟大学大学院組織再建口腔外科学分野教授に就任されました。また、2007年4月より1期3年にわたり、新潟大学医歯学総合病院歯科統括副院長に就任し、新潟大学評議員を務められ、2013年3月の定年退職までの約12年間新潟大学の中核にあって、大学の管理・運営に尽くしたことにより、2013年4月に新潟大学名誉教授の称号が授与されました。また、母校である東京歯科大学の客員教授に2013年4月に就任され、後進の指導に当たっておられました。

新潟大学在任中には、歯科医師国家試験委員会の幹事委員として2007年より6年間にわたりご尽力され、2009年度に副試験委員長、2010年度に試験委員長、2012-2013年に歯科医師国家試験出題基準改定部会部会長代理を務められました。また、2008年より医道審議会専門委員（歯科医師分科会）を3期6年、2009年より日本学術振興会科

学研究費委員会専門委員を3期務め、文部科学省ならびに厚生労働省にも大きく貢献されました。さらに、日本顎変形症学会理事長を2004年より8年間務められ、顎変形症診療ガイドラインの策定や全国規模での実態調査など、さまざまな事業を成し遂げられました。他にも、日本口腔外科学会をはじめ歯学ならびに医学に関する多くの学会に所属し、学術の発展に貢献されました。

齊藤先生の新潟大学における最終講義のテーマは「守破離」でありました。これは、茶道や武道において創造的な過程のベースとなっている思想であり、師匠の型を「守る」ことから修業が始まり、既存の型を「破る」ことで自分に合った型を作り、そして型から「離れ」て自在になることができるというお話で、齊藤先生の口腔外科医としての信念を伝える、素晴らしい最終講義でありました。われわれも、この「守破離」の教えを忘れることなく精進し、後進にも伝えてまいりたいと思います。

2月6日に前夜式が、7日に告別式が、齊藤先生の生前のご意思に従って無教会主義キリスト教式で執り行われ、式場にはとても多くの方々が集られました。これは、齊藤先生が素晴らしい人生を歩んでこられたことを、何よりも証明しているものと思います。

齊藤先生の間のお導きに心より感謝し、安らかに永遠の眠りにつかれます事をお祈りいたします。

素顔拝見



歯周診断・再建学分野

高橋直紀

平成30年8月1日付で歯周診断・再建学分野の助教を拝命しました高橋直紀です。臨床実習や学生講義、各種委員会や学部行事などで、学生さんや他科の先生方と交流する機会も増えてきたところでしたので、ちょうど良い機会と思って原稿依頼を快諾しました。素顔拝見とのことで、ざっくばらんに自己紹介します。

生まれ故郷は、自称日本三大大仏「高岡大仏」、日本の渚百選のひとつ「雨晴海岸」、ライトアップが幻想的な国宝「瑞龍寺」と、フォトジェニックなスポットが多くある富山県の高岡市という田舎町です。大学進学に合わせて、新潟市へと移り住んできました。同じ日本海側の隣県ということもあり、気候や環境への順応も早く、一人暮らしを満喫した学部生時代でした。卒後はそのまま母校の歯科総合診療部にて研修医を行い、もう少し専門的な勉強をしたいと、大学院への進学を決断しました。入局した歯周診断・再建学分野では、歯周病と全身疾患の関連について動物実験や、歯肉上皮細胞のバイオロジーについての基礎研究を通して、研究の面白さを知りました。大学院4年生の夏、研究留学のお誘いをいただき、これはまたとない機会と、留学を決意しました。行先は米国カリフォルニア州立大学サンディエゴ校の医学部免疫学教室でした。The西海岸のリゾートな雰囲気に関わられそうになりながらも粘膜免疫研究に精を出した2年間でした。帰国後は日本学術振興会特別研究員を経て、前田健康歯学部長がセンター長を務める高度口腔機能教育センターで特任

教員としてお世話になりました。その後、縁がありまして、古巣である歯周診断・再建学分野に助教として戻り、今に至ります。大学院時代からの恩師である多部田康一教授の新体制の下、研究と教育と臨床、そして少々の雑用と、多忙ながらも充実した毎日を過ごしております。

自分の性格については、よく言えば好奇心旺盛、わるく言えば飽きっぽい性格でしょうか。その性格を如実に表すように、小学校では軟式野球クラブ、中学はバスケット部、高校は硬式テニス部、大学はバドミントン部、留学先ではサーフィン、帰国後はゴルフを齧りました。広く浅くではありますが、様々なスポーツを体験できたとポジティブに考えています。そんな私でも比較的長く続いている趣味がふたつあります。ひとつは大学1年の時に始めたスノーボードです。折角やるならと、日本スノーボード協会JSBAの技術認定テストに挑戦し始め、2級まで取るに至りました（1級は一度落ちてから受けてません）。もうひとつはアコースティックギターでしょうか。大学生の時に五十嵐キャンパスでの学祭でたまたま見たコブクロのライブに感化され、数日後にアコギを衝動買いし、数か月後には工学部の友人とストリートライブを始め、雪舞う新潟駅前や古町モールでかじかむ手で夜な夜な活動したのは青春のいい思い出です。「一度しかない人生、まずはやってみる」、これは私の中で大切にしていることです。まず歯学部に入ってみて歯科の魅力を知り、大学院に入ってみて研究の面白さを知り、勢いで海外留学して新しい価値観に触れることで視野が広がりました。見切り発車な部分もありましたが、結果的には自分自身の成長につながったと思っています（そう思うようにしています）。まずはやってみる。失うものも多少あるかもしれませんが、それ以上に得るものは多いと感じています。

最後になりましたが、私の専門である歯周病学を通して歯学部、歯科界において何かしら貢献できるよう、これからも様々なことに挑戦していきたいと思っています。どうぞ今後ともよろしくお願い申し上げます。



歯学教育研究開発学分野

長谷川 真 奈

こんにちは。2018年7月より、歯学教育研究開発学分野の特任助教を拝命いたしました長谷川真奈と申します。この度、歯学部ニュース平成31年度第2号編集ご担当の先生より「素顔拝見」の原稿作成につきましてご依頼いただきましたので、簡単に自己紹介をさせていただきます。

出身は新潟市で、本学の41期生です。学生時代には茶道部に所属していました。卒業後は新潟大学医歯学総合病院歯科で臨床研修を行い、研修修了後にレジデントとして歯科総合診療部に入局させていただきました。また、ご縁があって同年の秋より、社会人大学院生として本学の口腔生理学分野で研究に携わることができました。大学院ではヒトの嚥下をテーマとした研究を行い、口腔生理学分野の先生方に大変御世話になりながらたくさんのお話を学び、多くの貴重な経験をさせていただきました。そのことに感謝しながら現在も引き続き、口腔生理学分野で心的ストレスが顎顔面部の疼痛反応に与える影響について、吻側延髄腹内側部（RVM）の神経活動の変調を電気生理学的に検索し、その脳神経メカニズムの解明を目指して研究を行っています。

一方、歯科総合診療部では昨年より、研修歯科医の先生の診療ライター業務を担当させていただいております。ライターを担当する日は毎回自分自身も学ぶことの連続で、まだまだ頼りない部分が多いと自覚しておりますので、研修歯科医の先生や患者さんにご安心いただくことができるように、歯科医師として、指導歯科医として成長するための自己研鑽に励んでいかなければならないと思っています。また、臨床の面では、大学院時代から多くの先生方にご迷惑をお掛けしてきました

が、これまでにいただいた歯科総合診療部の先生方の温かいサポートに少しでもご恩返しができるようにしたいと考えています。

歯学研究開発学分野／歯科総合診療部は新潟大学歯学部臨床実習・新潟大学医歯学総合病院歯科医師臨床研修の両方に関わっていることは理解していたつもりですが、運営側の一端をお手伝いさせていただいて改めて日々の業務は多岐に渡り、想像していた以上であることがわかりました。未熟者のため大変微力とは思いますが、今後はこれまでお世話になったすべての先生方はもちろん、新潟大学歯学部のお役にも立てるよう努めていく所存です。御指導の程よろしくお願い申し上げます。



義歯診療科

長谷川 陽 子

平成29年4月より義歯診療科の講師としてお世話になっております長谷川陽子と申します。新潟に異動して2年弱経ちました。今回は「素顔拝見」を執筆という貴重な機会を与えて頂きましたので、自己紹介などさせていただきます。

私の出身地は富山県の小矢部市です。砺波平野の散居村に家があり、最も近い信号まで5キロ離れている、「田舎オブ田舎」育ちです。高校は高岡市だったのでちょっと都会でしたが、通学に片道1時間以上かかるためほとんど寄り道しない真面目な学生生活でした。田舎から遠いところに行ってみたく、という極めて軽い動機のもと（本命志望校が落ちたためでもありますが）、日本で唯

一の県立歯学部である、九州歯科大学に進学しました。北九州市は私にとってはすごく都会に感じました。大学入学後の新歓コンパで皿うどんを生まれて初めて食べてものすごく感動したこと（白木屋の、キャベツとコーンしか入っていない一品）、白いスパゲティがあることを知ったこと（ミートソースかナポリタンが標準）、今でもいろいろな「初めて」を鮮明に記憶しています。楽しい歯学部6年間を過ごしたのち、大阪大学大学院に進学しました。歯学部時代は北九州という土地柄のせいもあって、日々飲み会と部活に明け暮れ、真面目に勉強するのはテスト前のみという自堕落な生活をしていましたので、このまま歯医者になるのは危険すぎる、大学院とは歯医者の勉強をするところだからもう少し歯医者の勉強をしよう、せっかくなら一番苦手だった有床義歯を勉強しよう、と安直な考えで大学院進学を選択しました。大学院時代は色々辛かったので多くを語らないですが、辛かったにもかかわらずそのまま大学人生活を続け、今でも大学所属であることは、神様の思召しとでも受け取っておくしかありません。実際、高校時代や大学時代の友人は、「キモイ」と思っているに違いありませんし、最近新潟大学に異動したことを伝えると、一体何になりたいのか？などと言われます（応援しなさいよ、とは言いませんが、大学時代の友人とは辛口な生き物です）。

大阪大学でのポスドク生活を数年過ごした後、縁あって兵庫医科大学の歯科口腔外科に異動しました。兵庫医科大学は1970年代に歯学部創設に向け準備したこともあり、種々の専門医が在籍していました。私が着任した時には、口腔外科専門医はもとより、歯周・保存・歯内・小児の専門医が在籍しており、私には補綴専門医としての外来を期待されている状況で、本当に嫌というほど外来診療を経験させていただきました。また、兵庫医科大学は医科歯科連携が緊密だったため、他職種連携でいろいろなことを学ばせてもらいました。今でもその人脈と知識は私の臨床研究の糧となっていますし、新潟大学に着任後も非常勤講師として学部学生講義を担当していたり、共同研究を継続していたり、色々関わりがあります。

昨年、大阪大学大学院時代の指導教官である小

野高裕教授に新潟大学へ来ないかとお声がけ頂き、悩んだ末に新潟に単身赴任することにしました。新潟は学会で何度か訪れたことがあった以外は馴染みがなく、とても雪深い地域ぐらいにしか考えておりませんでしたので、なかなか新鮮な日々を過ごしております。着任後に起きた最も印象深い事件は、雪道で転倒して膝靭帯を断裂したことです。昨年のお雪は10年ぶりの大雪だったそうですが、その寒さと厳しさは想像を超えておりました。今年の冬も寒くて辛いですが、昨年は10月末頃から毎日寒さとどう戦うかばかり考えていて、如何にすごしたのか日々の記憶がありません。借りているマンションは天井エアコンタイプの暖房で、暖房をつけると頻繁にブレーカーが落ちるため、使用する家電を制限するか、暖房以外を諦めるかの究極の2択を日々迫られます。寒くて夜眠れないと新潟地元民に相談したら電気毛布をすすめられ、買って使って感動しました（今年も絶賛愛用中です）。雪道対策として、ダウンコート／長靴／リュックサック／帽子を新潟に来てから購入しました。そして、あともう少しで冬が終わるはずと思っていた2月9日、ブラックアイスバーンなる夜道の落とし穴で転倒し、左膝の内側側副靭帯Ⅲ度損傷（完全断裂）と前十字靭帯の完全断裂と診断を受け、2度の再建手術を行いました。思い返せば暗い雪道など、新潟に来るまで歩いたことがありませんでした。雪がつもる歩道を適度なアルコール摂取後に鼻歌まじりで歩いていたのですが、雪がない黒い道路を見て私の脳内は無意識に「歩きやすい道」と判断したのでしょう、結構な大股で勢いよく踏み出したため、つるつと派手に転びました。それだけだったら打撲だけで済んだのでしょうか、万代の交差点の中での転倒だったため、恥ずかしくて急いで起き上がらなければと思い、若干変な体勢で起き上がろうとして再度転倒し、それで膝靭帯が完全に切れました。靭帯断裂により膝下が横に動くという気持ち悪い状況を体験しましたが、周りの皆様の支援のおかげで現在回復に向け絶賛リハビリ中です。寒い地域で生活される方へ、恐れながら私からのアドバイス「転んだら 起き上がる時 気を付けて 一息ついて おちつき大事」。きれい

にまとめてみました。

以上、アカデミックなところが全く無い自己紹介となりましたが、皆様今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。



歯学教育開発室

飯田和泉

2018年12月1日より歯学教育開発室の助教に拝命されました飯田和泉です。よろしくお願ひ致します。私は2018年4月に脳研究所の細胞神経性物学分野から異動して参りました。所属は開発室ではありますが、普段の研究は口腔生化学分野で行っています。出身は東京都足立区で、大学と大学院修士課程は神奈川県相模原市、大学院博士課程で新潟県へと移り住み、出産育児で神奈川県相模原市にいったん戻ったのですが、再び家族で新潟に移住し現在に至ります。

幼少期はジブリ映画「風の谷のナウシカ」の主人公ナウシカが好きだったようで、男子顔負けの強さと行動力さらに自己犠牲を厭わない姿勢に憧れていました。またナウシカは、腐海という吸うと五分で死に至る猛毒ガスが放出されている森に赴き、そこに生息する菌の胞子を採取し持ち帰り栽培するという、非常にエキセントリックな側面も持っており、まさに研究者として見惚れるべき存在です。ナウシカに憧れていたもので、周りの子と少し違った不思議な子だったようです。

中学高校は品川女子学院という女子校に通っていたため、おしとやかになると両親は期待したのかもしれませんが、男子の評価を全く受けない女子だけの空間に甘え、恥じらいというものを失った野性的な日常を送っていました。おかげで痴漢には全く合わない電車通学でした。打ち込んでいた部活は特になく、放課後友人と遊ぶことが日課の日々でした。そのように過ごしていたからか、勉強はあまり熱心な方ではありませんでした。

しかし、あるとき高校の生物の授業で当時行われていたヒトゲノム計画から分子生物学というものを知り、将来は研究がしたいと漠然と考え、北里大学理学部の生物科学科に入学しました。北里大学は神奈川県相模原市にあり、自然に恵まれた場所でのびのびと過ごしました。学生時代はアウトドア部に入り、キャンプ（野外で飲む）を月一回行う、非常に文化的な部活動を行っていました。特に夏は伊豆七島の島に部員で行き、スキューバダイビングや釣り・モリで魚を捕り食べるという、黄金伝説（テレビ朝日系バラエティー番組）のようなキャンプ生活を一週間ほどして過ごしていました。

学部4年から北里大学医学部生化学研究室に配属し、そこで神経科学に魅せられ研究生生活にどっぷりハマりました。高橋正身教授に修士課程までお世話になり、生化学実験の基礎を学ばせてもらい、マウスの脳タンパク精製・大腸菌でタンパク質合成と精製・モノ・ポリクローナル抗体作成・神経細胞培養などを主に行っていました。その後、行動レベルで脳高次機能の理解を深めたいと考え、新潟大学脳研究所の崎村建司教授のもとに博士課程で進学しました。そこでは遺伝子改変マウスの作製の全工程の手技を教えてもらい、実際に自分が作製したマウスの行動解析バッテリーや生化学的解析を行っていました。2017年の育休中に崎村教授が退官するというので、研究生命がどうなるかと少しか不安でしたが、ありがたいことに2016年8月に口腔生化学分野に着任された照沼美穂教授をご紹介して頂き、助教のポストを頂き研究者として働くことができています。口腔生化学分野は、若くエネルギーが豊富かつ聡明な照沼教授を始め助教二名と大学院生二名で構成された少数精鋭のラボです。皆、毎日フルスピードでデータをだし、週一回教授とディスカッションをしながら研究を進めるべく頑張っています。私の専門は神経科学で、研究目標を本当に簡潔に述べると、なんで不安になるのだろうか？という疑問を、マウスの行動と分子機構の両方で解明することを目指しています。

最後になりますが、この新しく恵まれた環境で仕事ができることに大変感謝しています。今後さ

らにいい仕事をしていきますので、皆様どうぞよろしくお願い致します。



小児歯科学・障がい者
歯科学分野

中 島 努

平成29年度6月1日より、小児歯科学分野の助教に拝命いただきました中島努と申します。新潟大学の出身（42期生）でして何度か歯学部ニュースに執筆させていただいたことがありご存知のかたもいらっしゃるかもしれませんが、まず初めに自己紹介をさせていただきたいと思えます。

私の生まれは、富山県の上市町出身です。どこかわからないという方も多いと思えますが、有名どころでいえば映画の「おおかみこどもの雨と雪」の舞台になった町です。鑑賞された方はわかるかと思えますが、自然が豊かな町で田畑が多く最寄りのコンビニまで自転車で15分かかるような場所に住んでいました。

中学からはソフトテニス部に入部し、テニスの魅力にどっぷりとはまり中学高校の6年間はほぼ毎日テニスばかりの日々でした。大学に入学してからはソフトテニスをやめ、硬式テニス部に入部しました。ちょうど二学年上に元日本ランカーの先輩がいらしかったこともあり、大学でも暇さえあればテニスに明け暮れておりました。部活以外では42期生の学年幹事として42期生の取りまとめ役となり、また歯学祭の実行委員長などを務めさせていただくなど、充実したキャンパスライフだったなと思えます。

そして卒業後は、研修医として半年間小児歯科学分野で研修し、残りの半年は大阪の開業医にて研修をさせていただきました。研修先では、歯科治療の技術を学ばせていただいたり、おいしいお店に連れて行っていただいたり、私の妻と出会ったりと様々なことがありました。大阪での研修を終えたのちに、小児歯科学分野へ大学院生として

入局させていただき今に至ります。

今現在の趣味の話になりますが、食べることが大好きです。休みの日には妻と2人で、おいしいお店や喫茶店を探しています。しかし、現在の問題は大学を卒業し、運動する量がめっきり減ったうえに、食べることが好きときたものですから私の体重は大学卒業後右肩上がりになってしまっていることです。これではまずいと新たな趣味としてロードバイクを始めました。新潟は直線の道が多く、景色もよいことから晴れた日にはよくサイクリングに出かけたりなどしていますが道中で美味しそうなものを見つけると誘惑にまけて食べてしまい、あまり減量できていませんが…。

このような話ばかりでは、仕事はどうなんだという声も聞こえてくるかと思えますので、研究と臨床の紹介をさせていただきます。私の研究は三次元動作解析をメインに研究を行っております。大学院生時代は歯磨き時のブラッシング運動について研究を行い、現在はモーションキャプチャーを併用した捕食動作の運動解析をテーマに研究に励んでおります。臨床では昨年11月に障害者歯科学会の認定医を取得し、現在は小児歯科学会の専門医の取得に向けて日々の診療に邁進させていただいております。

最後まで私のつたない文章を読んでいただきありがとうございます。まだまだ、一人前と呼ぶには程遠い身ですが日々精進し、臨床、研究と小児歯科学分野の助教として歯学部、病院に貢献できるよう研鑽してまいります。みなさま、今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。



小児歯科・障がい者歯科学分野

村 上 智 哉

皆様こんにちは。2017年に小児歯科・障がい者歯科で助教を拝命しました、村上智哉と申します。2012年に出身地である福岡県を離れ、生後1か月の第1子を含む家族で新潟県に参りました。新潟での日々は慌ただしくも、まもなく8年目となります。新潟での暮らしに関して、私のお気に入りを紹介させていただきます。

—春—

新潟の春は、厳しかった冬に終わりを告げるあたたかい風と共にやってきます。加治川沿いの桜並木は、まだ残雪がある山々を背景に絶景です。5月を過ぎると渓流釣りも解禁となり、多くの釣り師たちが岩魚を狙って訪れますが、私も興味がありつつまだ機会を持っていません。雪が溶け出し、山菜採りがシーズンとなるとたらの芽、こしあぶら、ごごみなどをいただくのですが、旬の素材が楽しみです。苺の越後姫はこの上ないほど甘くて格別です。最高級品で粒の大きいものは地元では出回らず、東京などに送られるようですが、幸運なことに毎年美味しいものをいただきます。以前住んでいた聖籠町はサクランボやブドウなども有名で、シーズンになると農園の周りは車や観光バスで混雑し、各種フルーツはいずれもとても美味しいです。

—夏—

新潟の梅雨は短く、気がつけば夏となります。旭町キャンパスから海はすぐ近くにあり、新潟大学あゆみ保育園の子ども達は、夏になると徒歩で海に行き、夏を身体いっぱいを感じる事ができます。我が子も保育園で幼い頃から海に親しみ、海が大好きです。そんな日焼け姿をうらやましいと思いつつ、病棟12階の職員食堂から佐渡が見える日は清々しい気持ちになります。

—秋—

お店に新米が並び始めると、今年の新米は何を食べようかと考えてしまいます。医局にも案内がくる、新潟大学農学部のお米を購入するのもささやかな楽しみです。11月を過ぎると鮭の遡上が見られ、いくらの醤油漬を各家庭で作るのも新潟では一般的のようです。私も年1回は作ります。アニサキスが心配な方は、醤油漬にした後は48時間冷凍をお勧めします。菊の花が出回るのもこの頃です。食用菊は、新潟では黄色と紫色を多く目にしますが、花びらだけをちぎって、味付けをして食卓に並べると華やかです。ほんのり酢がきいた味が好みで、これまたご飯が進みます。

—冬—

11月も後半になると車のスタッドレスタイヤ交換はいつにしようかと悩む日がやってきます。雪のある生活にもだいぶ慣れてきました。2018年2月の大雪が記憶に新しいですが、その際には、厚着をした上に、学生時代に屋久島登山で使用していたゴアテックスのレインコートを着て、雪をかき分け、子ども2人を担いで出勤しました。途中、雪でスタックしたタクシーを救出しました。新潟では、人々が当然のように助け合う様子は素敵だと思います。

冬は大変なことばかりではありません。蟹や鰯など海の幸や、冬菜などの美味しい食材がいっぱいです。新潟のお正月には、鮭をはじめとした多くの具材を用いたお雑煮、そしてこれまた野菜たっぷりの郷土料理であるのっぺを食べます。豊富な栄養で元気が出ます。お餅もよく食べますが、私の出身の福岡の丸餅とは形が違い、角餅が一般的です。形のみならず、もち米も異なるのかとても美味しく、1回の食事で5個は食べてしまいます。また、餅にかけるものは福岡では砂糖醤油、肌色のきな粉や大根おろしでしたが、新潟では緑色のきな粉や餡子などで、やはり食文化の違いを感じます。

以上長くなりましたが、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。



2018年2月 旭町キャンパス内

同窓会だより

同窓会の慶事

副会長 野内 昭 宏

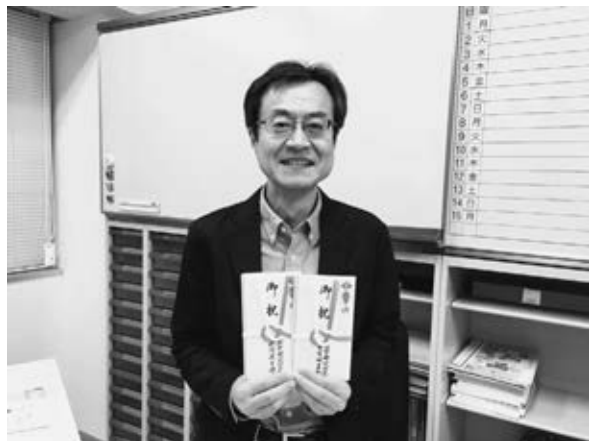
前回の歯学部ニュース以降、同窓会員お二人の教授就任がありましたのでご紹介します。平成30年10月1日就任です。当会からも祝意をお伝えしました。益々のご発展をお祈りしています。

多部田 康一 先生（歯学科27期生） 歯周診断・再建学分野

吉羽 邦彦 先生（歯学科14期生） 口腔生命福祉学科



多部田教授と有松会長



吉羽教授

新潟大学歯学部同窓会学術セミナーⅠ「最期まで美味しく食べることが諦めない！訪問歯科ができることー義歯治療から嚥下障害治療までー」に参加して

歯学科37期生 歯周診断・再建学分野
野中（青木） 由香莉

今回、37期の同期が上記の講演をすると聞き、参加させていただきました。

訪問歯科に特化した医院を札幌で開業したという彼女は、学生の頃に受けた特別講義の1枚のスライドを原点に、ここまで歩んできたとのことでした。確かに、その特別講義は興味深かったことを私も覚えているものの、私にとってはもはや10年以上前の記憶、印象のみの思い出に過ぎず、「なぜコロッケが食べられないのだろう」という、その時の疑問を、その時の情熱を、忘れずに進んできたという彼女の姿勢は、まさに「初志貫徹」そのものでした。そしてまた、そのスライドを、落ち込んだ時、悩んだ時の糧としている、という言葉が、同期だからこそわかる、ここまでのそれぞれの挫折と苦悩と努力を思わせ、一人感慨に耽ったのでした。学生実習でも、彼女が年配の方に対して温かく接していたことを思い出し、現在も、一人ひとりの患者様の人生に寄り添いながら真摯に向き合う姿が、症例の一つ一つからあふれる情熱からも容易に想像できました。

学生の頃から常に何事にも一生懸命だった彼女らしさに溢れる、非常に熱意に満ちた素晴らしい講義でした。吸着義歯の理論を、訪問歯科に適するように独自にアレンジした点、そしてまた食べることを義歯から嚥下まで総合的に診ている点が、評価されているのだと思います。大学で歯周病학을専門としている自身としても、義歯製作の

ポイントや、嚙下の評価の実際は、日常の臨床の際の疑問に答える内容で、大変有意義な時間を過ごさせていただきました。エッセンスに凝縮された90分の講義はとても短く感じ、地元北海道への愛、そして人生の先輩方である患者様への愛情をもって、これからも地域医療に貢献する彼女の講義を、また是非とも聞きたい、と思いました。

同期の講演を、歯学部講堂で聞くということ自体が、非常に感慨深く、また誇らしく思いました。同じ講義室からスタートし、仕事や子育てなどそれぞれの道を歩む同期の面々と講義の後に話しながら、少し落ち込んだり、反省したり、そして何よりまた明日から頑張ろうという活力を頂けた、貴重な機会となりました。



新潟大学歯学部同窓会学術セミナーⅡを受講して

歯学科36期生 塚田真弓

平成30年9月30日、東京医科歯科大学名誉教授の高木裕三先生より『小児の歯の外傷治療に必要な知識および注意点』という演題でご講演頂きました。高木先生は、私の父と同期（本学2期生）で、以前より父から高木教授のお話を聞いており、今回のセミナーも楽しみにしておりましたが、期待通りこのセミナーを通じて多くの勉強をさせて頂きました。

現在、私は父の医院で勤務しており、小児の患者様はそこまで多くはありませんが、父が長年近隣の保育園の園医を行っていることもあり、小児の外傷には時々遭遇します。日常の臨床現場において、小児の急患は、迅速に適切な診断と処置が求められます。親御さんが心配して我が子を見ている中で、適切な診断をください、しっかりと説明し、処置を行うには、基盤となる正確な知識が必要となります。今まで、小児の外傷の知識を得るのは、ほとんど書籍からでしたが、書籍は基礎となる部分と臨床での対応が切り離されていることが多く、頭の中で整理するのが大変でした。しかし、今回の高木先生の講演は、基礎的な部分とそれに裏付けされた臨床での対応法が結び付けられており、ずっと頭に入ってくるようでした。先生の講演はとてもわかりやすく、明日からの臨床の場でもすぐに実践できると思いました。

乳歯の外傷では、後継永久歯歯胚への障害を第一に考慮したそれぞれの対応法とともに、どんなケースが重症化しやすいかなど、また、経過観察が良いのか、積極的に処置するべきか、そして、乳歯の再植の是非など、知っているようで知らな

い曖昧な知識を正しい理解にかえることができました。

また、幼若永久歯の外傷については、露髄した歯の歯髄保存について、予後を比較すると直接覆髄よりも部分生活断髄法の方が成功率は高いなど、普段臨床において、露髄時に直接覆髄を選択することが多いので、大変勉強になりました。

そして、最後は「小児口腔機能管理加算」に関連して小児の口腔機能発達不全症についてのご説明でした。活字で読んでいてもよくわからない内容をわかりやすくご説明頂きました。

今回の講演会に参加して、普段の臨床がアップデートされ、より臨床における生きた知識を得ることの必要性を強く感じました。とても有意義な時間となりました。大変ありがとうございました。



「目に見える、意識した感染対策」を受講して

歯学科32期生 木島 寛

平成30年11月26日、新潟駅南プラーカ内の「ときめいと」にて、「目に見える、意識した感染対策」を受講して参りました。新潟を離れて10年以上経つもので、「ときめいと」と言われましても今ひとつピンと来ませんでした。会場入りしますとお世話になった先生方や懐かしい顔にお会いすることができ、学生時代を思い出させるような里帰り感の中で拝聴させていただきました。

今回の内容は「感染対策」でしたが、毎日の診療で1秒たりとも油断してはいけないうテーマだと思います。考えてみればサービスをする側と受ける側とで、お互いの顔の距離がここまで近いのは歯科と床屋くらいしか思い浮かびません。基本的には外科治療の連続である歯科治療は、血液・体液の飛散が思いのほか広範囲まで及ぶことをデータとして示していただき、そもそもこの職業自体が感染リスクが高いということを私たちは再認識しなければいけないと思いました。

また見落としがちだと思ったのが、口腔ケア時のブラッシングでも汚れは周囲にはねているということです。私は病院歯科勤務なので、病棟の口腔ケアの現場では、ベッドの角度を動かさない方、口腔ケアに抵抗を示し体動する方など様々なケースを目にします。そういった方々に対し一生命になればなるほど口腔内に意識が集中してしまい、周囲への感染物の飛散に気づいていないということは確かにそのとおりの話で、すぐにでも病院職員に伝えなくてはと思うトピックスでした。

さらに肝炎などの感染者が「嫌がられるから」「言いたくないから」などの理由で、自分が感染者であることを医療機関に申告しない人が30%い



るという統計結果は、自分が想像していたよりは高い数値で、そういった方々の心情も理解した上で、これはもうこちら側が対策するしかないと思いました。若い頃、先輩に「全ての患者さんがHIV感染者だと思って」診療にあたるようにと言われたことを覚えています。まさに全ての人に対して感染者と同等の対策を講じるスタンダードプリコーションこそがやはり基本中の基本であることを再確認できました。

今回、分かっているようで分かっていないこと、気をつけているつもりで徹底できていないことを、具体的な数字のデータも提示しながら教えて頂いた本講義は、私にとって非常に有意義な時間でした。高木教授が講義の冒頭におっしゃられた「基本的な感染対策は変わらない、でも微生物は日々アップデートしている」という言葉のとおり、東京五輪や大阪万博の開催による新たな感染症の国内流入の懸念もありますし、日々のアップデートに対応できるよう定期的にこういった勉強会には参加すべきと思いました。

最後に、お忙しい中ご講演いただいた高木教授はじめ、企画運営してくださった同窓会学術委員の先生方に深く感謝申し上げます。



第6回はびすまカフェ講演会

副会長 野内昭宏

外科には「周術期」という概念があります。外科的処置＝手術にばかり目が行きがちですが、その手術を成功させるために、術前、術中、術後の管理をシームレスに行うことを意味しています。そんなことは歯学部ニュースをお読みになる皆様はご存知でしょう。

それと同様に、当同窓会でも卒業直前の準会員～卒業5年位の会員に対しては、他の世代に比べればやや手厚いサービスを行っています。一つは歯学科6年生と口腔生命福祉学科4年生の皆さんとの「同窓会説明会」、一つは「同窓会費の軽減措置」、一つは「研修歯科医支援塾」、そしてもう一つは、これから紹介する「はびすまカフェ」。最初は出会いの場として会が持たれていましたが、最近、卒業して少し時間が経過して、卒業間もない頃に比べればかえって悩みが多い若手の道しるべのヒントになるような講演会形式を採っています。



今回は、日吉歯科診療所汐留所長の熊谷直大先生（歯学科35期）から「私の挑戦の軌跡」という演題でお話していただきました。聴講された先生から感想を頂戴しましたので、掲載させていただきます。

第6回はぴすまカフェ講演会 “私の挑戦の軌跡” を拝聴して

歯学科48期生 新潟大学医歯学総合病院
臨床研修歯科医師
浅野 佐和子

熊谷先生の講義は学生時代に一度受講したことがある。その際にアメリカ留学の話をついて、羨ましさと同時にその生活のハードさと夢を具象化する姿勢に驚いた。

平成28年度の歯科疾患実態調査では8020達成率は51.2%。しかしながら、実際に機能している8020は少ないのではないかと。昨今、人生100年時代と言われているが、日吉歯科診療所の掲げる“Keep28”や“歯と全身の寿命を逆転させる”という概念は先を行くもので、全身の健康にとって重要であることは言うまでもなく、私に歯科保健指導を担うひとりの歯科医師として予防型歯科に転換していくための素養を身につけたいと思わせてくれた。

「一度手をついたら修復治療は終わらない」という言葉も研修医の私にとっては印象深い。最適な治療を目標としてもメンテナンス期は次の問題が発見されるまでの期間と捉えている自分もいることも再認識した。心のどこかで治療を中心に

しなければ医院経営は難しいと思っていたので、補綴専門医である熊谷先生が「歯を削らない補綴が一番よい」とおっしゃっていたのはなかなかのショックであった。

今回の講演会を聞いて一番自分に問いかけるべきは“難しい”という言葉で逃げてはいないかということだ。“予防型歯科医院への転換は必要だが難しい”。わかっていると言い訳をする自分。「自分自身が納得できていない状態で患者さんを納得させることができるのか」。難しいアメリカ留学を成功させ、予防歯科の普及に向けて精力的に活躍する先生の姿を見て、“難しいと思う壁を打ち破ること”が夢を具象化できる理由なのだなと思った。

最後に、熊谷先生は「これだけは伝えさせてください」と時間を延長して話をしてくださった。先生のように“これだけは伝えたい”というものを歯科医師としての私は今後持つことができるのか。これを機に自分の挑戦のための準備を進めて行きたいと考える。



講演中の熊谷直大先生

歯学部を支える方々

再び歯学部へ

歯学部事務室長 井部 達也

平成29年4月1日付けで歯学部事務室長として財務部契約課から異動して参りました、井部達也と申します。私は、平成5年から7年まで歯学部用度係にいましたが、実に22年振りにまた歯学部で仕事をさせていただくこととなりました。現在、建物改修により綺麗で整備されていますが、改修前は事務室が学生交流室の場所にあり廊下など薄暗かった記憶が今でも残っています。また当時の先生方も何名かいらっしゃいますので、とても懐かしく思います。

歯学部の先生方は、以前から事務にも協力的でアットホームの感じがしておりましたが、それは今でも変わっていないと日々感じております。事務職員は昔に比べれば人数が半分ほどに減ったことにより、先生方にご迷惑をお掛けすることもありますが、できるだけそのようなことがないよ

うにしたいと思っています。

また歯学部では、海外へ行く機会が多いと聞いておりましたが、平成30年2月にインドネシアのジャカルタにおいて開催された国際シンポジウムに事務補助として同行させていただきました。実に30年振りの海外、そして英語が殆ど話せないなかで大変緊張しましたが、とても貴重な経験をさせていただきました。

最後に自己紹介を少しさせていただくと、私は体を動かすことが好きで、昔は剣道とスキーをやっていました。その後は硬式テニスを覚えましたが、最近ではマラソンとバウンドテニスで体を鍛えています。年に1回はフルマラソンに出場していますが、4時間以内で走れるようになったので、次は100キロのウルトラマラソンに挑戦したいと思っています。



歯学部学務係の今

歯学部学務係 中澤典子

歯学部学務係の中澤と申します。平成29年4月に歯学部学務係に異動して参りました。

大学職員として2～4年ほどの周期で異動を重ねて7つ目の配属先ですが、ご縁がありましたようで、歯学部学務係への配属は2回目です。前は遡ること10年程前、平成20、21年度の2年間、歯学部学務係（当時は学務第三係）におりまして、先生方には大変お世話になり、忙しくも楽しい2年間を過ごさせていただきました。

7年を経て再び歯学部学務係に配属となりましたところ… (!)校舎の改修が完了し、講義室や



実習室など教育環境も刷新されている (!)歯学科新カリキュラムが編成され学年進行中 (!)短期受入・短期派遣 (SS・SV) が定着し、年間3、40名も派遣・受入を行っている… 等々、不断の改革がなされてきており、現在も進行中であることを実感しています。

現在の歯学部学務係は4人——主に学部関係全般の担当（学部学生を見守るお兄さんの存在と思います）、主に大学院関係全般の担当（配属間もないとは思えない落ち着いたフレッシュウーマンです）、学部大学院含めて学生支援諸々の担当（更衣室や講義室の清浄さを守る女神です）、そして総括担当の私——です。各々担当する業務が広範囲に渡っていますが、気になる点はお互いに相談し、アイディアを出し合い協力して業務を進めています。

歯学部事務室長のもと歯学部総務係と連携して、また医歯学系事務部や大学全体の多々ある部署と連携して、よりよいサポートができるよう一層努めていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

「准講会の活動を紹介します」

平成30年度准講会 幹事

児玉泰光(顎外科)、辻村恭憲(摂リハ)

歯学部ニュースの編集担当の方より、「准講会から何か記事をお願いします」と依頼されました。現在、「准講会」の幹事を仰せつかっており、活動内容をまとめる良い機会でもありますので「准講会」の活動について紹介させていただきます。

2019年1月1日現在、「准講会」のメンバーは36名となっています。主な活動内容は以下の四つで、各メンバーによる1000円/年の積み立てが活動資金となっています。

①総会の開催

今年度は12月4日(火)に開催しました。入会者と退会者の確認、会計報告、活動報告、次年度の幹事と会計(計2名)の選出などが行われます。また、准講会メンバーが教授に昇任された場合はお祝い金、定年退職された場合はお餞別が贈られますので、その承認をします。

②忘年会(新年会)、納涼会の開催

今年度は総会終了後に忘年会を開催しました。診療分野や研究テーマが異なる先生との懇親会は、いやがうえにも盛り上がります。(写真1、



写真1：忘年会



写真2：忘年会の後の集合写真

写真2、於モルゲンロート)

一方で、最近の納涼会は、教授会、助教会、事務の方との合同開催となっています。今年度は7月18日(水)にホテル日航新潟で開催され、准講会からは13人が参加し、様々な立場の方との情報交換の場となりました。

③新潟歯学会奨励賞の贈呈

平成26年度から新潟歯学会で学位テーマ発表の大学院生の審査が行われ、第二位の大学院生に「新潟歯学会奨励賞」として准講会から楯と副賞(50,000円)が贈られます。その準備と贈呈は准講会の大切な活動の一つです。(写真3)



写真3：新潟歯学会奨励賞の贈呈
受賞者は中田樹里先生(歯科薬理/矯正)

④選挙に関する業務

学内における各種選挙に関し、適任者推薦委員会が設置された場合、准講会から推薦委員を選出することがあります。今年度は学部長選挙が行われたため、その推薦委員を准講会メンバーから3名選出しました。

幹事の2名は准講会への入会順に一年任期で務めます。来年度は岡本先生（口腔生理）、真柄先生（摂リハ）となります。以上、簡単ではありますが、現在の准講会の活動内容を紹介させて頂きました。今後とも宜しく願いいたします。



教 職 員 異 動

学 部

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
配置換	30. 10. 1	阿 部 遼	医歯学総合病院矯正歯科医院	歯科矯正学分野教務補佐員
配置換	30. 10. 1	河 村 智 子	医歯学総合病院矯正歯科医院	歯科矯正学分野教務補佐員
昇任	30. 10. 1	小 川 祐 司	予防歯科学分野教授	予防歯科学分野准教授
昇任	30. 10. 1	多部田 康 一	歯周診断・再建学分野教授	歯周診断・再建学分野助教
昇任	30. 10. 1	吉 羽 邦 彦	口腔生命福祉学科教授	う蝕学分野准教授
採用	30. 10. 1	NAKSAGOON TRAITHAWIT	高度口腔機能教育研究センター 特任助教	
採用	30. 10. 1	竹 内 亮 祐	う蝕学分野教務補佐員	
配置換	30. 10. 18	小 川 友里奈	口腔生命福祉学科特任助教	口腔生命福祉学科助教
配置換	30. 10. 31	山 鹿 義 郎	医歯学総合病院義歯診療科助教	包括歯科補綴学分野特任助教
退職	30. 10. 31	渋 木 瞳		摂食嚥下リハビリテーション学分野 特任助手
配置換	30. 12. 1	飯 田 和 泉	歯学教育開発室助教	口腔生化学分野特任助教
採用	30. 12. 1	大久保 明	摂食嚥下リハビリテーション学分野 特任助手	
退職	30. 12. 31	MOCHAMAD FAHLEVI RIZAL		予防歯科学分野助教
採用	31. 1. 1	KAUNG MYAT THWIN	予防歯科学分野助教	
退職	31. 3. 31	斎 藤 浩太郎		硬組織形態学分野助教
退職	31. 3. 31	小 田 陽 平		組織再建口腔外科学分野助教
任期満了	31. 3. 31	平 原 三貴子		小児歯科学分野特任助教
任期満了	31. 3. 31	竹 石 龍 右		摂食嚥下リハビリテーション学分野 特任助教
任期満了	31. 3. 31	鈴 見 梨 沙		摂食嚥下リハビリテーション学分野 特任助手
任期満了	31. 3. 31	大久保 明		摂食嚥下リハビリテーション学分野 特任助手
任期満了	31. 3. 31	小 川 友里奈		口腔生命福祉学科特任助教
任期満了	31. 3. 31	竹 内 亮 祐		う蝕学分野教務補佐員

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
任期満了	31. 3. 31	小 林 太 一	医歯学総合病院歯科放射線科 助教	顎顔面放射線学分野助教 (育休代替)

【事務等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
退職	30. 10. 19	桃 井 麻 未		摂食嚥下リハビリテーション学分野 産学官連携技術者
採用	31. 2. 4	増 田 さおり	医歯学系歯学部事務室総務係 派遣職員	
任期満了	31. 3. 31	目 黒 友 美		歯周診断・再建学分野技術補佐員
任期満了	31. 3. 31	木 下 優 奈		包括歯科補綴学分野科学技術振興技術者



病院

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	30. 7. 1	深井 真澄	インプラント治療部医員	
任期満了	30. 7. 6	小林 太一	(学系助教)	歯科放射線科医員
採用	30. 7. 9	堀 沙耶香	予防歯科医員	
採用	30. 8. 1	高橋 直紀	歯周病科助教	(学系特任講師)
退職	30. 9. 30	福井 忠雄		矯正歯科講師
任期満了	30. 9. 30	竹内 亮祐	(歯学部教務補佐員)	歯の診療科医員
採用	30. 10. 1	遠間 愛子	歯の診療科医員	歯の診療科医員 (パート)
昇任	30. 10. 1	竹山 雅規	矯正歯科講師	矯正歯科助教
退職	30. 10. 31	鈴木 拓		口腔リハビリテーション科医員 (パート)
採用	30. 11. 1	山鹿 義郎	義歯診療科助教	(学系特任助教)
退職	30. 11. 30	常木 雅之		病理検査室医員
退職	30. 11. 30	宮田 侑弥		矯正歯科レジデント
採用	30. 12. 1	坂上 馨	矯正歯科助教	矯正歯科医員
採用	30. 12. 1	宮澤 春菜	臨床研究推進センター特任助教	歯周病科医員
採用	30. 12. 1	佐藤 圭祐	歯周病科医員	歯周病科医員 (パート)
採用	30. 12. 1	中島 麻由香	歯周病科医員 (パート)	
採用	30. 12. 1	野中 由香莉	歯周病科医員 (パート)	
採用	30. 12. 1	河村 篤志	顎関節治療部医員	
退職	30. 12. 31	深井 真澄		インプラント治療部医員
所属換	31. 1. 1	山田 葵	顎顔面口腔外科レジデント	義歯診療科レジデント
退職	31. 3. 31	大貫 尚志		顎顔面口腔外科助教
退職	31. 3. 31	齋藤 太郎		顎顔面口腔外科助教
退職	31. 3. 31	吉川 博之		歯科麻酔科助教
退職	31. 3. 31	昆 はるか		義歯診療科助教
退職	31. 3. 31	久保田 悠	(学系助教)	予防歯科助教
任期満了	31. 3. 31	齋藤 直朗	(学系助教)	口腔再建外科医員
任期満了	31. 3. 31	渡部 桃子		顎顔面口腔外科医員
任期満了	31. 3. 31	中谷 暢佑		顎顔面口腔外科医員 (パート)
任期満了	31. 3. 31	木口 哲郎		顎顔面口腔外科医員 (パート)
任期満了	31. 3. 31	山崎 麻衣子		歯科麻酔科医員 (パート)

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
任期満了	31. 3. 31	鈴木 絢子		小児歯科・障がい者歯科医員 (パート)
任期満了	31. 3. 31	大倉 麻里子		矯正歯科医員
任期満了	31. 3. 31	眞 舘 幸平		矯正歯科医員 (パート)
任期満了	31. 3. 31	佐藤 知弥子		矯正歯科医員 (パート)
任期満了	31. 3. 31	野々村 絢子		予防歯科医員 (パート)
任期満了	31. 3. 31	黒木 歩		歯周病科医員
任期満了	31. 3. 31	中島 麻由佳		歯周病科医員 (パート)
任期満了	31. 3. 31	野中 由香莉	(学系助教)	歯周病科医員 (パート)
任期満了	31. 3. 31	坂上 雄樹		歯の診療科医員
所属換	31. 4. 1	小川 信	輸血・再生・細胞治療センター特任助教	生命科学医療センター特任助教
採用	31. 4. 1	須田 大亮	口腔再建外科医員	魚沼地域医療教育センター(歯科口腔外科)特任助教
採用	31. 4. 1	北村 厚	顎顔面口腔外科医員	
採用	31. 4. 1	新垣 元基	顎顔面口腔外科医員	
採用	31. 4. 1	氏田 倫章	歯科麻酔科レジデント	
採用	31. 4. 1	平原 三貴子	小児歯科・障がい者歯科医員	(学系特任助教)
採用	31. 4. 1	山本 悠	冠・ブリッジ診療科レジデント	
採用	31. 4. 1	長谷川 泰輔	歯の診療科医員	歯の診療科医員 (パート)
採用	31. 4. 1	高 昇 将	冠・ブリッジ診療科医員	冠・ブリッジ診療科レジデント (パート)
採用	31. 4. 1	小野 喜樹	冠・ブリッジ診療科レジデント	
採用	31. 4. 1	菊地 さつき	義歯診療科医員	義歯診療科医員 (パート)
採用	31. 4. 1	設楽 仁子	義歯診療科医員	義歯診療科医員 (パート)
採用	31. 4. 1	佐藤 拓実	歯科総合診療部医員	歯科総合診療部医員 (パート)
採用	31. 4. 1	浅野 佐和子	歯科総合診療部レジデント	
採用	31. 4. 1	田島 稜子	歯科総合診療部レジデント	
採用	31. 4. 1	土屋 健太郎	顎関節治療部レジデント	
採用	31. 4. 1	松崎 奈々香	顎関節治療部レジデント	
採用	31. 4. 1	三谷 咲貴	インプラント治療部レジデント	冠・ブリッジ診療科レジデント
採用	31. 4. 1	加藤 祐介	魚沼地域医療教育センター(歯科口腔外科)特任講師	口腔再建外科特任助教
採用	31. 4. 1	永井 孝宏	顎顔面口腔外科助教	顎顔面口腔外科医員
採用	31. 4. 1	上野山 敦士	顎顔面口腔外科助教	顎顔面口腔外科医員

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	31. 4. 1	小林 太一	歯科放射線科助教	(学系助教)
採用	31. 4. 1	荻野 奈保子	口腔再建外科医員 (パート)	口腔再建外科レジデント (パート)
採用	31. 4. 1	竹内 涼子	口腔再建外科医員 (パート)	口腔再建外科レジデント (パート)
採用	31. 4. 1	小林 亮太	顎顔面口腔外科レジデント (パート)	
採用	31. 4. 1	清水 志保	顎顔面口腔外科医員 (パート)	顎顔面口腔外科レジデント (パート)
採用	31. 4. 1	内藤 絵里子	顎顔面口腔外科レジデント (パート)	
採用	31. 4. 1	清川 裕貴	小児歯科・障がい者歯科レジデント (パート)	
採用	31. 4. 1	五月女 哲也	小児歯科・障がい者歯科レジデント (パート)	
採用	31. 4. 1	築野 沙絵子	小児歯科・障がい者歯科レジデント (パート)	小児歯科・障がい者歯科レジデント
採用	31. 4. 1	朴沢 美生	小児歯科・障がい者歯科レジデント (パート)	
採用	31. 4. 1	新井 萌生	矯正歯科レジデント (パート)	
採用	31. 4. 1	深町 直哉	矯正歯科医員 (パート)	矯正歯科レジデント (パート)
採用	31. 4. 1	水越 優	矯正歯科医員 (パート)	矯正歯科レジデント (パート)
採用	31. 4. 1	三村 俊平	矯正歯科レジデント (パート)	
採用	31. 4. 1	吉田 智美	矯正歯科レジデント (パート)	
採用	31. 4. 1	田村 浩平	予防歯科レジデント (パート)	
採用	31. 4. 1	鈴木 裕希	歯の診療科医員 (パート)	歯の診療科レジデント (パート)
採用	31. 4. 1	木村 龍弥	冠・ブリッジ診療科レジデント (パート)	冠・ブリッジ診療科レジデント
採用	31. 4. 1	高岡 由梨那	冠・ブリッジ診療科医員 (パート)	冠・ブリッジ診療科レジデント (パート)
採用	31. 4. 1	三井田 慶斗	冠・ブリッジ診療科レジデント (パート)	
採用	31. 4. 1	上原文子	義歯診療科医員 (パート)	義歯診療科レジデント (パート)
採用	31. 4. 1	兒玉 匠平	義歯診療科医員 (パート)	義歯診療科レジデント (パート)
採用	31. 4. 1	堀 頌子	義歯診療科レジデント (パート)	義歯診療科レジデント
採用	31. 4. 1	吉村 将悟	義歯診療科レジデント (パート)	義歯診療科レジデント
採用	31. 4. 1	善本 佑	義歯診療科レジデント (パート)	
採用	31. 4. 1	小貫 和佳奈	口腔リハビリテーション科レジデント (パート)	
採用	31. 4. 1	日野 遥香	口腔リハビリテーション科レジデント (パート)	
採用	31. 4. 1	吉原 翠	口腔リハビリテーション科医員 (パート)	口腔リハビリテーション科レジデント (パート)
採用	31. 4. 1	西田 洋平	歯科麻酔科医員 (パート)	歯科麻酔科レジデント (パート)

【看護・診療支援部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
退職	30. 9. 30	堀 川 奈穂美		歯科衛生部門歯科衛生士
退職	30. 9. 30	大 島 唯 太		歯科技工部門歯科技工士
採用	30. 10. 1	井 川 愛	歯科衛生部門歯科衛生士	
所属換	30. 10. 1	高 橋 迪 花	東3階病棟看護師	西8階病棟看護師
所属換	30. 10. 1	伊 藤 典 子	東4階病棟看護師	東3階病棟看護師
所属換	30. 10. 1	渡 辺 ちぐさ	東6階病棟看護師	東3階病棟看護師
所属換	30. 10. 1	齋 藤 恵 美	東7階病棟看護師	東3階病棟看護師
退職	30. 10. 31	中 井 恵 美		歯科衛生部門歯科衛生士
退職	30. 10. 31	田 中 恵 子		歯科衛生部門歯科衛生士
採用	30. 11. 1	中 井 恵 美	患者総合サポートセンター歯科衛生士	
採用	30. 11. 1	田 中 恵 子	患者総合サポートセンター歯科衛生士	
任期満了	30. 12. 31	山 田 千 尋		歯科衛生部門歯科衛生士
所属換	31. 3. 17	黒 木 純 子	東3階病棟看護師	外来2・3階看護師
定年退職	31. 3. 31	田 代 美佐子		外来4・5階看護師長
退職	31. 3. 31	國 兼 麻 子		東3階病棟看護師
退職	31. 3. 31	谷 澤 朋 子		東3階病棟看護師
退職	31. 3. 31	梅 嶋 渚		東3階病棟看護師
退職	31. 3. 31	櫻 井 鮎 美		東3階病棟看護師

【事務部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
配置換	30. 10. 1	齋 藤 真 紀	総務課総務係長	総務課臨床研修係
配置換	30. 10. 1	伊佐早 貴 子	総務課臨床研修係長	医歯学系総務課職務係
配置換	30. 10. 1	安 井 弘 道	医事課診療管理係長	医歯学系脳研究所事務室共同利用係長
配置換	30. 10. 1	平 瀬 亮 輔	学務部連携教育支援課連携教育企画係長	医事課審査係長
配置換	30. 10. 1	松 岡 清 美	自然科学系理学部事務室総務係長	総務課総務係長
配置換	30. 10. 1	伊 藤 憲 興	医歯学系脳研究所事務室共同利用係長	医事課診療管理係長

編集後記

お忙しい中を突然の執筆依頼にも関わらず快く引き受けてくださり、ご寄稿いただきました教職員ならびに学生の皆様に、この場を借りて感謝申し上げます。編集長の岡本先生のスピーディーかつ的確な指揮のもと発行されました本号が、皆様のお役に立てれば幸甚です。

歯科放射線科 坂井 幸子

この度、初めて歯学部ニュースの編集に携わる機会を頂きました。至らないところも多かったかと思いますが、快く原稿依頼を引き受けて頂いた教職員および学生の皆様には、本当に感謝しております。編集業務を通じて、学生の活動やこれまでお話したことのなった先生方のご活躍など、歯学部内の多岐にわたる活動を実感しました。歯学部ニュースがこれからも、歯学部の更なる発展と活躍を報告する場として役立って欲しいと願います。最後になりますが、編集委員の先生方と原稿を執筆いただいた皆様に深謝いたします。

高度口腔機能教育研究センター 川崎 勝盛

編集後記を書いてくださいと依頼されたときに、週間少年ジャンプの巻末作者コメントのような軽いものを書けばよいのかなと思っておりましたが、どうやら違っていたようで、御多忙の中本誌に寄稿していただいた先生方、総括をしていただいた編集長の岡本先生にはこの場を借りて深謝申し上げます。

私ごとにはなりますが2019年3月をもって退職することになりました。4年間の在籍中は、たくさん先生方に本当にお世話になりました。ありがとうございます。今後の皆様の一層のご活躍と新潟大学歯学部のご発展をお祈り申し上げます。

包括歯科補綴学分野 藤原 茂弘

はじめに、年末年始のお忙しい時期に、寄稿して頂いた皆さんに心より感謝申し上げます。特に、卒業生の皆さんには国家試験間近にも関わらず、快く原稿依頼をお引き受け頂き、大変感謝致しております。原稿を読みながら、皆さんが歯学部の学生生活の中で様々な良い経験をされ、良き仲間や恩師に出逢われ、そして大きく成長されたことがとても良く伝わって参りました。微力ながら今号の歯学部ニュースの編集に携わせて頂きまして、誠にありがとうございました。

歯科薬理学分野 柿原 嘉人

経験がない上に、大役でありますので、編集作業が、うまく運ぶのか？不安はありました。ところが、いざ開始すると編集委員の先生方の作業の円滑さには脱帽する他ありませんでした。一応、編集取りまとめ役を担当させていただいたものの、私がなすべき仕事あまり残されていないことに気づくまで、時間はかかりませんでした。あらためて本号の編集チームの皆様のご尽力には心より感謝申し上げます。そして何より主役は皆様です。私共は編集作業に携わりながら、新潟大学歯学部が持つ、多様なエネルギーを実感し、大いに刺激を頂戴しました。ご多忙の中、ご寄稿くださった方々、そして本誌を手にとってくださいる皆様に心より感謝申し上げます。

口腔生理学分野 岡本 圭一郎

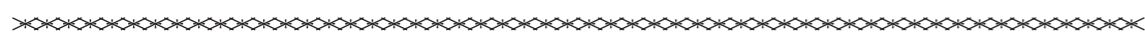
歯学部ニュース

平成30年度第2号（通算134号）

発行日 平成31年4月1日
発行者 新潟大学歯学部広報委員会
編集責任者 魚島 勝美、岡本圭一郎
編集委員 坂井 幸子、川崎 勝盛
藤原 茂弘、柿原 嘉人
印刷所 (株)ウイザップ

目次

特集1 歯学部卒業おめでとう	1
学部長から 前田 健康	
副病院長から 小林 正治	
卒業生から 郡司 敏宏・内田 俊・小松 子記・窪田 雄也・勅使川原芽依・喜本理紗子	
平成30年度 歯学部卒業生名簿	
大学院修了にあたり	11
木口 哲郎・設楽 仁子・栗原加奈子・佐藤 拓実	
平成30年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名	
平成30年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻博士前期・博士後期課程修了者論文名	
大学院へ行こう	18
清水 志保・吉村 将悟・高見澤 圭	
教授に就任して	21
予防歯科学分野 教授 小川 祐司	
新潟大学大学院医歯学総合研究科 口腔生命福祉学講座 教授 吉羽 邦彦	
歯周診断・再建学分野 教授 多部田康一	
活動の場を海外に広げて	28
SSSV報告 小澤 月詩・小野すみれ・那須 優介	
ミャンマー医療支援活動に参加して 岸本 直隆	
早期臨床実習を終えて	35
吉田 麻莉・近藤裕次郎	
ポリクリを終えて	37
森川 雄太・大久保 光	
部活動紹介	39
ゴルフ部 阿部 空	
医歯学祭を終えて	40
歯学科3年 田中 杏奈	
特集2 Shall we リサーチ!	41
SCRIP報告 柴崎 慎司	
留学生紹介 Raksanan Karawekpanyawong・Supaluk Trakanant	
歯学部生の学会発表体験記 渡部 清人	
歯学部生の課外研究活動 登内 恒介	
歯学部で行われているユニークな研究紹介 黒瀬 雅之	
学会受賞報告	51
小野 高裕・藤井 規孝・那小屋公太・高嶋真樹子	
阿部 朋子・大川 純平・兒玉 匠平・山中 秀敏	
新潟歯学会報告	59
永田 昌毅	
さくらサイエンス実施報告	60
井上 誠	
総務委員会だより	63
前田 健康	
診療室・分野紹介	69
顎顔面放射線学分野 教授 林 孝文	
口腔生理学分野教授 山村 健介	
齊藤 力先生追悼文	73
小林 正治	
素顔拝見	74
高橋 直紀・長谷川真奈・長谷川陽子・飯田 和泉・中島 努・村上 智哉	
同窓会だより	80
ミニコラム	85
歯学部を支える方々 井部 達也・中澤 典子	
准講会活動について 児玉 泰光・辻村 恭憲	
教職員異動	89
編集後記	95



表紙・裏表紙写真の説明

表紙の撮影データ

撮 影 地：岐阜上空（伊丹新潟便航空機内より）

撮 影 日：2019年1月

使用機材：OLYMPUS E-P5/M.ZUIKO DIGITAL ED 45mm F1.8／絞り：F7.1・シャッター速度：1600分の1秒

裏表紙の撮影データ

撮 影 地：長崎市（端島〔軍艦島〕）

撮 影 日：2019年1月

使用機材：OLYMPUS E-P5/M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0／絞り：F7.1・シャッター速度：1000分の1秒

コメント：今回は空と海と大地を表のテーマとして撮影してみました。結果として偶然にも世界文化遺産が共通して写り込むことになりました。表紙は伊丹新潟便航空機内からの撮影で背景に富士山を配置しましたが、奥には太平洋が、半ばには諏訪湖が光を反射しています。また少し手前には町並みも見えます。裏表紙は廃墟の状態となっている端島（軍艦島）を臨む対岸の野母崎から東シナ海の深い色合いを表現してみました。表紙・裏表紙ともに雄大な自然とつつまじやかな人の営みの対比というもうひとつのテーマに辿りつきましたが、わずかでも人の痕跡が写し込まれることで情緒が感じられるとすれば、山水画にも共通することかもしれません。

本誌中の写真の使用機材

ボ デ ィ：OLYMPUS E-M5 Mark II, E-P5

レ ン ズ：M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO, M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0, M.ZUIKO DIGITAL 25mm F1.8

撮 影 者：林 孝文

歯学部ニュース

平成30年度第2号（通算134号）

特集 歯学部卒業おめでとう
Shall we リサーチ！

リサイクル適性 (A)

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。